

平安京跡・御土居跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一八

平安京跡・御土居跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京跡・御土居跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび JR 山陰線複線工事に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

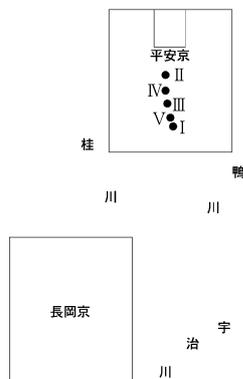
平成 19 年 2 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名
 - I 1次調査 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡
 - II 2次調査 平安京右京四条一坊四町（朱雀院）跡
 - III 3次調査 平安京右京六条一坊一・二町跡
 - IV 4次調査 平安京右京五条一坊一～四町跡
 - V 立会調査 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡
- 2 調査所在地
 - I 京都市下京区観喜寺町
 - II 京都市中京区壬生花井町
 - III 京都市下京区中堂寺北町
 - IV 京都市中京区壬生高樋町・松原町
 - V 京都市下京区観喜寺町
- 3 委 託 者 西日本旅客鉄道株式会社
- 4 調査期間
 - I 2004年4月20日～2004年5月31日
 - II 2004年10月13日～2004年12月17日
 - III 2005年11月10日～2005年12月26日
 - IV 2006年8月21日～2006年12月22日
 - V 2006年9月25日～2006年9月29日
- 5 調査面積
 - I 約76㎡
 - II 約272㎡
 - III 約324㎡
 - IV 約1,028㎡
 - V 総延長距離 約40m
- 6 調査担当者
 - I 津々池惣一
 - II 津々池惣一・吉村正親
 - III 加納敬二・吉村正親
 - IV 加納敬二・東 洋一・田中利津子
 - V 吉村正親
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」「島原」「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系
 - I～III 日本測地系（改正前）平面直角座標系VIを、世界測地系 平面直角座標系VIに変換した（ただし、単位（m）を省略した）
 - IV 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度

- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当職員
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 作成担当者 I・II 津々池惣一
III 加納敬二
IV 加納敬二・東 洋一・田中利律子
V 吉村正親
- 18 編集・調整 児玉光世・近藤章子
- 19 1次調査での御土居堀の堆積状態の写真観察については、橋本清一氏（山城郷土資料館）に御提示を得た。3・4次調査出土木簡・付札の釈文は、西山良平氏（京都大学）、吉野秋二氏（奈良女子大学）、上野勝之氏に釈読・協力を得た。4次調査での池跡土壌分析は、株式会社古環境研究所に依頼し、分析結果についてはVI 付章に掲載した。
- 20 調査時には西山良平氏（京都大学）、鋤柄俊夫氏（同志社大学）には多くのご教示を得た。記して謝意を申し上げる。



(調査地点図)

目 次

I 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡 1

1. 調査経過	1
2. 遺 構	2
3. 遺 物	4
4. ま と め	4

II 平安京右京四条一坊四町（朱雀院）跡

1. 調査経過	7
2. 遺 構	8
3. 遺 物	12
4. ま と め	15

III 平安京右京六条一坊一・二町跡

1. 調査経過	16
2. 遺 構	17
3. 遺 物	19
4. ま と め	21

IV 平安京右京五条一坊一～四町跡

1. 調査経過	22
2. 遺 構	24
(1) 1区の遺構	25
(2) 2区の遺構	26
(3) 3区の遺構	29
(4) 4区の遺構	32
3. 遺 物	41
(1) 土器類	41
(2) 瓦類	46
(3) 木製品	47
4. ま と め	49

V	平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡 2	
1.	調査経過	52
2.	遺構・遺物	52
3.	まとめ	53
VI	付章 土壌分析について	54
1.	花粉分析	54
2.	プラント・オパール分析	56
3.	珪藻分析	57
4.	種実同定	58
5.	小 結	59

図 版 目 次

図版 1	平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡 1	遺構・遺物
1	遺構検出面全景（北から）	
2	遺構掘削後全景（北から）	
3	セクション断面（北から）	
4	出土遺物	
図版 2	平安京右京四条一坊四町（朱雀院）跡	遺構
1	北部第 1 面全景（北から）	
2	北部第 2 面全景（北から）	
3	南部第 1 面全景（北から）	
4	南部第 2 面全景（北から）	
図版 3	平安京右京四条一坊四町（朱雀院）跡	遺物 出土遺物
図版 4	平安京右京六条一坊一・二町跡	遺構・遺物
1	1 区全景（北から）	
2	2 区全景（北から）	
3	出土遺物	
図版 5	平安京右京五条一坊一～四町跡	遺構
1	1 区全景（北から）	
2	2A 区第 1 面全景（北から）	

- 図版 6 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 2A区第2面全景（北から）
 - 2 2B区洲浜9全景（北から）
- 図版 7 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 2A区第2面綾小路路面34・南側溝18・溝22（北東から）
 - 2 2A区第2面綾小路路面34・南側溝18・溝22断割断面（北東から）
- 図版 8 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 2B区洲浜9（北東から）
 - 2 2B区整地層11（北から）
- 図版 9 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 3A区第1面全景（北から）
 - 2 3A区第2面全景（北から）
- 図版 10 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 3A区第2面池16・29（北から）
 - 2 3A区第2面洲浜31（北から）
- 図版 11 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 3B区全景（北から）
 - 2 4A区全景（北から）
- 図版 12 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 4A区土壇15・23・86（北から）
 - 2 4B区第1面全景（北から）
- 図版 13 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺構
- 1 4B区第2面全景（北から）
 - 2 4B区第2面五条大路路面79・北側溝45（北から）
- 図版 14 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺物
出土土器
- 図版 15 平安京右京五条一坊一～四町跡 遺物
瓦・銭貨・木製品
- 図版 16 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡2 遺構
- 1 調査地全景（北から）
 - 2 A地点西壁（東から）

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (北から)	2
図 3	調査風景 (北から)	2
図 4	遺構実測図 (1 : 100)	3
図 5	遺物実測図 (1 : 4)	4
図 6	御土居想定図 (1 : 50,000)	5
図 7	慶応年間地図「改正京町御絵図細見大成 慶応 4 (1868) 年」	6
図 8	調査位置図 (1 : 5,000)	7
図 9	調査前全景 (南から)	8
図 10	調査風景 (南から)	8
図 11	第 1 面平面図 (1 : 200)	9
図 12	第 2 面平面図 (1 : 200)	10
図 13	東壁・南壁断面図 (1 : 200)	11
図 14	縄文土器出土状況 (東から)	12
図 15	縄文土器拓影・実測図 (1 : 4)	13
図 16	土取り穴・土壇・溝出土土器実測図 (1 : 4)	13
図 17	耕作土層・土管理土出土土器実測図 (1 : 4)	14
図 18	調査位置図 (1 : 5,000)	16
図 19	調査前全景 (北から)	17
図 20	2 区調査風景 (北から)	17
図 21	遺構実測図 (1 : 200)	18
図 22	出土銭貨拓影 (1 : 1)	20
図 23	出土付札実測図 (1 : 2)	20
図 24	調査位置図 (1 : 5,000)	22
図 25	2 区調査前風景 (北から)	23
図 26	4 区調査風景 (南から)	23
図 27	断面模式図	25
図 28	2A 区路面 34・溝 18・22 実測図 (1 : 100)	26
図 29	2A 区溝 19・土壇 21 実測図 (1 : 40)	27
図 30	2B 区洲浜 9 実測図 (1 : 50)	28
図 31	2B 区洲浜 10 実測図 (1 : 100)	29
図 32	2B 区整地層 11 実測図 (1 : 100)	29

図 33	3A 区池 16・29・洲浜 31 実測図 (1 : 100)	30
図 34	4A 区溝 58・土壙 15・23 実測図 (1 : 40)	32
図 35	4B 区溝 45・路面 79 実測図 (1 : 100)	33
図 36	4C 区溝 5 実測図 (1 : 100)	34
図 37	1 区・2A 区遺構実測図 (1 : 200)	35
図 38	2B 区遺構実測図 (1 : 200)	36
図 39	3A 区遺構実測図 (1 : 200)	37
図 40	3B 区遺構実測図 (1 : 200)	38
図 41	4A 区・4C 区遺構実測図 (1 : 200)	39
図 42	4B 区遺構実測図 (1 : 200)	40
図 43	3A 区池 29 出土土器実測図 (1 : 4)	42
図 44	3A 区池 29 出土須恵器硯 (30)	44
図 45	2A 区路面 34 須恵器皿 (37)	44
図 46	2A 区・2B 区・4A 区・4C 区出土土器実測図 (1 : 4)	45
図 47	出土軒瓦・刻印瓦拓影・実測図 (1 : 4)	47
図 48	3A 区池 29 出土木製品実測図 (1 : 4)	48
図 49	出土銭貨拓影 (1 : 1)	49
図 50	遺構配置図 (1 : 1,500)	50
図 51	調査位置図 (1 : 5,000)	52
図 52	C 地点断面模式図 (1 : 40)	52
図 53	花粉ダイアグラム	61
図 54	プラント・オパールダイアグラム	62
図 55	2B 区洲浜 9 における主要珪藻ダイアグラム	64
図 56	3A 区池 16 における主要珪藻ダイアグラム	64
図 57	種実ダイアグラム	65
図 58	花粉・寄生虫	66
図 59	植物珪酸体 (プラント・オパール)	67
図 60	珪藻	68
図 61	種実	69

表 目 次

表 1	遺構概要表	2
表 2	遺物概要表	4
表 3	遺構概要表	8
表 4	遺物概要表	12
表 5	遺構概要表	17
表 6	遺物概要表	19
表 7	周辺の主要な調査一覧表	23
表 8	遺構概要表	24
表 9	遺物概要表	41
表 10	池 29 破片統計表	43
表 11	土壌分析試料一覧表	54
表 12	花粉分析結果	60
表 13	プラント・オパール分析結果	62
表 14	珪藻分析結果	63
表 15	種実同定結果	65

I 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡 1

1. 調査経過

調査は、JR山陰線複線高架工事に伴う第1次発掘調査である。

調査地は、平安京左京八条一坊一町から塩小路を跨ぐ地点に位置する。また、トレンチは南北に長く朱雀大路の東端に沿う位置にある。

一町には鎌倉時代の建保二年（1214）、高倉天皇妃・七条院藤原殖子が御堂を供養したという¹⁾。また、『山城名勝志』には、歓喜寿院について「旧跡七条南、朱雀東田畔有古木土人号歓喜森」とあり、「御堂」との関連が窺えるが、詳細は不明である。二町は待賢門院藤原珠子の御筵料にかかわる藺草田があったとされている²⁾。

また、近世には豊臣秀吉による御土居が調査地の東側隣接地を南北方向に造られていた。

今般の調査では上記に関連するものや塩小路と関連する成果が期待された。



図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（北から）



図3 調査風景（北から）

2. 遺 構（図4、図版1）

調査は、東西幅 3.3 m のトレンチを 45 度の法面をつけての掘削となったので現地表下 1.45 m の最深部で、幅は 0.60 m しか調査できなかった。

以下に検出した遺構についてその概略を述べる。

近世・近代の遺構

東端の側溝掘形を除き、調査区全体から堀の堆積土層を検出した。

堆積土層は砂と礫が互層をなしている。西から東に傾斜した状態で堆積しており、東側の堆積土層が一番新しい。第5層において19世紀代の銅版転写の染付小片が検出されており、第1層から第4層はそれ以後に埋没したことがわかる。最下層は検出した染付小片から判断すると堆積は18世紀までのものと思われる。

第1層：土色は 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂で、粒子が小さく細砂に近い。

第2層：10YR4/3 にぶい黄褐色で砂礫をなしている。堆積は薄い。

第3層：10YR4/4 褐色粗砂であるが、直径 1.0 cm までの礫も含む。

第4層：10YR3/3 暗褐色砂礫である。直径 3.0 cm ほどの礫を含む。

第5層：10YR4/6 褐色細砂である。直径 1.0 cm 未満の礫も含む。

第6層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫層で、直径 0.5 cm ほどの礫が主体をなす。

第7層：10YR4/4 褐色細砂層で、粒子は均一的である。堆積土層の底は検出できなかったが、ボーリングステッキによる探査では、調査面より約 0.5 m で黒灰色の粘質泥土が検出できた。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代～明治時代	堀	

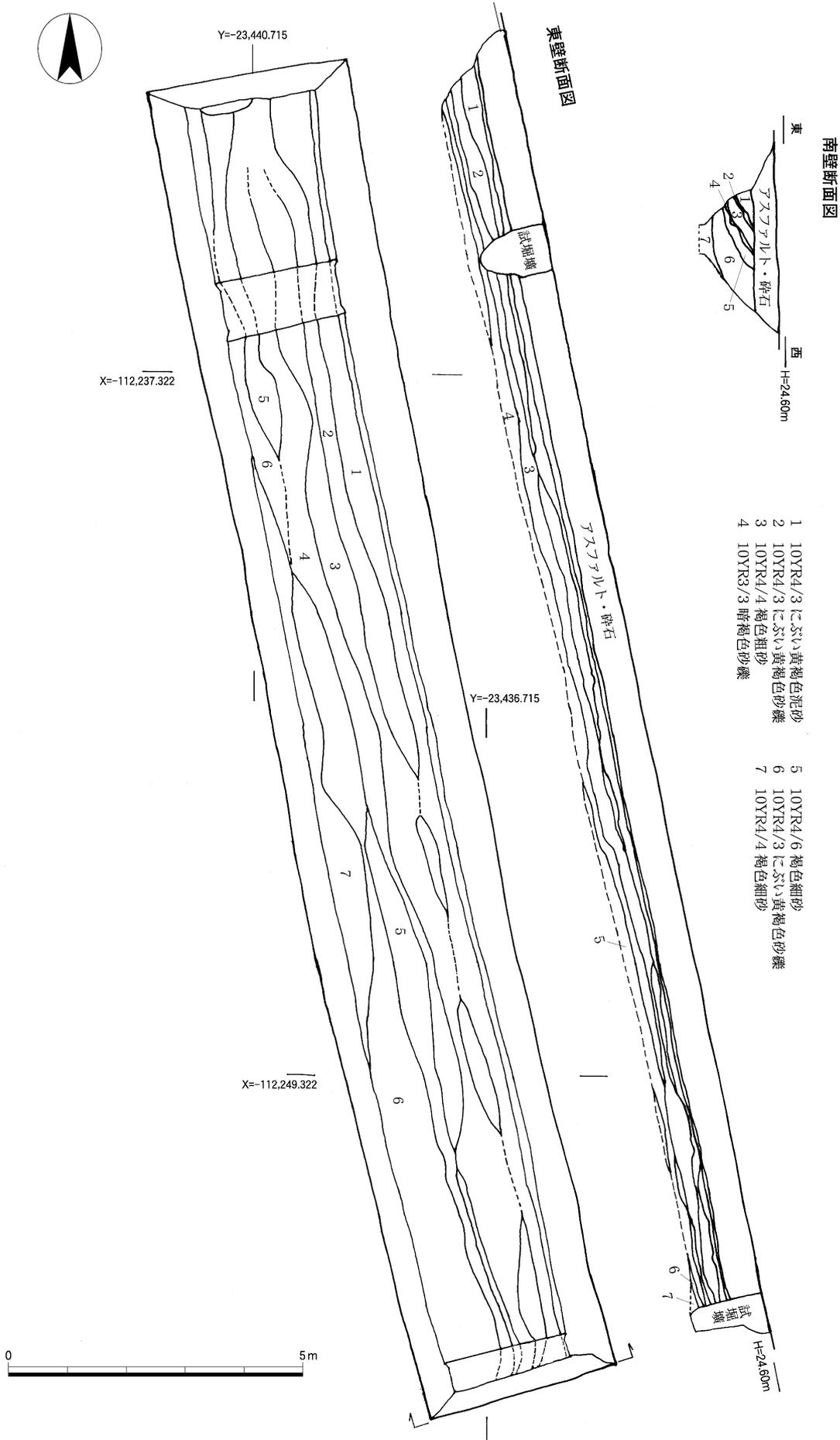


図4 遺構実測図 (1 : 100)

3. 遺物 (図5、図版1)

出土遺物は、コンテナ1箱である。堀堆積土層の第1層は出土遺物がなく、他の堆積土層からも出土数は極端に少ない。磨滅が激しく、小片である。出土した土器の器種は、江戸時代の陶器や磁器のみである。

(1) は亀甲文を配した染付合子の蓋片である。第4層から出土した。

(2) は羊歯文を配する染付蓋である。19世紀代のものである。第6層から出土した。

(3) は端反りの磁器椀の底部である。外面の高台内は無釉であり、17世紀代のものである。第3層から出土した。

(4) は京・信楽系陶器の平椀の底部破片である。内面には鉄釉を施している。第2層から出土した。

その他、瀬戸・美濃系の銅版転写磁器椀の体部小片や高台内に「角福」銘をもつ染付底部小片などがある。

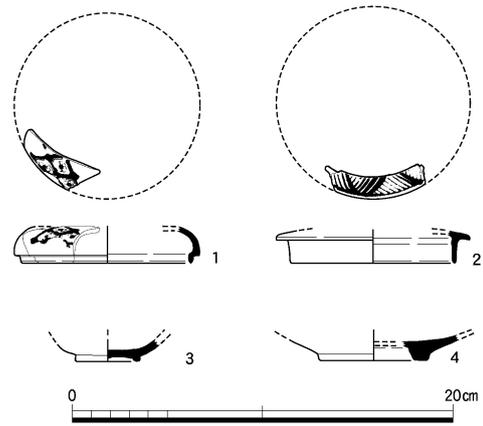


図5 遺物実測図(1:4)

4. まとめ

期待した平安時代の遺構は検出できなかった。

調査地は、東に隣接して御土居が南北に造営されていた³⁾。したがって、今回検出した堆積土層は、御土居の堀の西肩部に近い部分での最終埋没時期の様相を示している可能性がある。山陰線が敷設された明治30年(1897)頃までの堆積土層である。

なお、御土居は一般的には埋め戻されたものとされている。また、堀であるので流れが常態としていないと考える。ただし、今般検出の堆積土層については、砂層や小礫層がきれいに分離した堆積状態で、しかも調査区全長約20m以上にわたり同様の堆積状態から、流水による可能性が高い⁴⁾。調査地付近は、御土居全体の中では南端部に近く、また南北方向に造られている部分である。しかも、江戸慶応年間の地図⁵⁾(図7)では、御土居は調査区の北側の七条通で南北に途切れ、その間を七条通と東西方向の水路が横切っている。東西方向の水路は、洪水の際には冠水しやすい

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代 ～明治時代	陶器、白磁、染付	1箱	陶器1点、白磁1点、染付2点	0箱	少量
合計		1箱	4点(1箱)	0箱	少量

※ Cランクの遺物は少量のため、Aランクのコンテナにまとめて収納した。

と思われる。冠水した水が、水位の浅くなった最終埋没期に近い御土居の堀を南流する可能性はあり得ると考える。ただし、これまでの調査例では、堀埋没後に排水用として新しい溝を掘ったとするものもあり、⁶⁾また本調査区では堀の幅全体が検出されていないので、今後の調査でさらに検討していきたい。

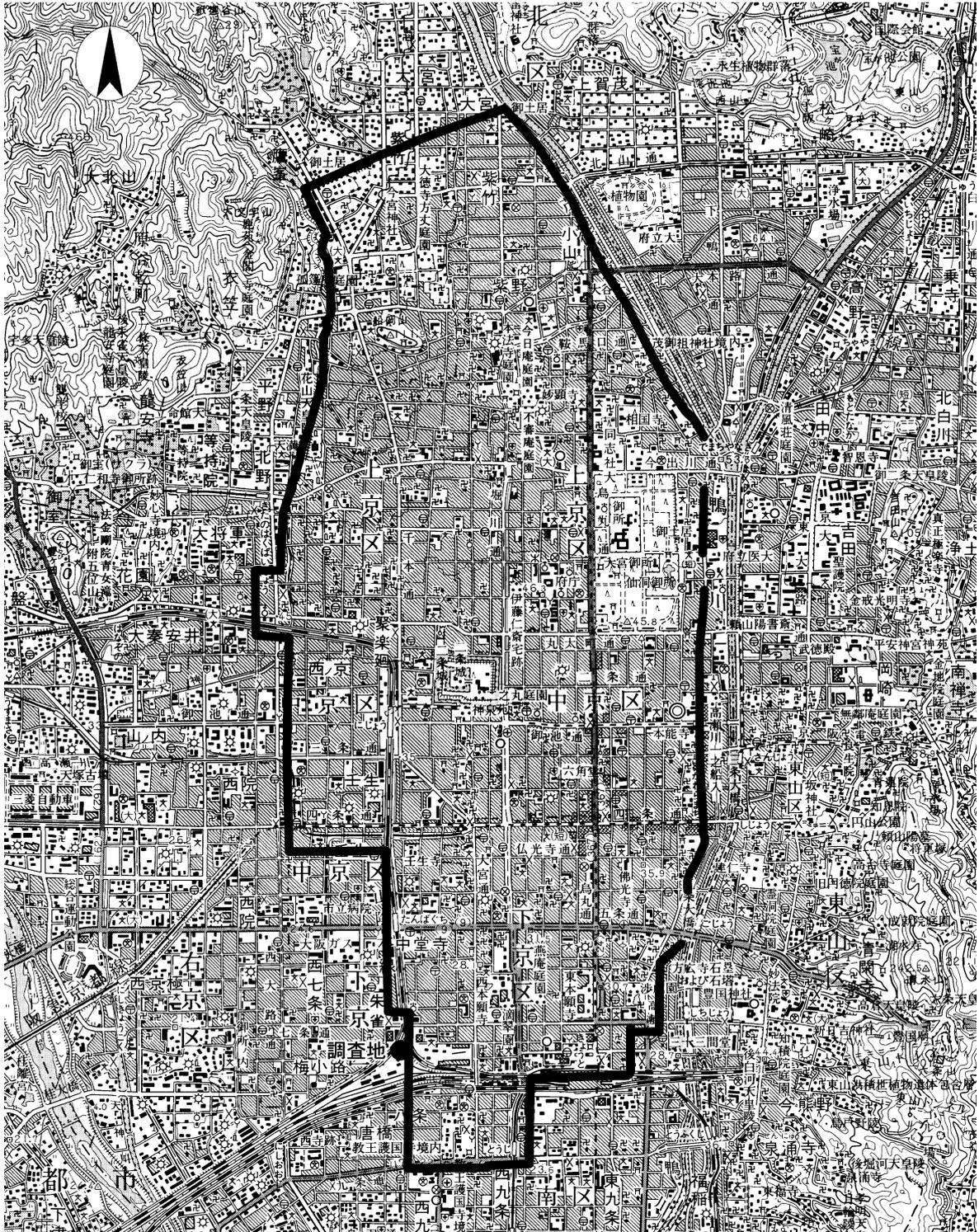


図6 御土居想定図 (1 : 50,000)

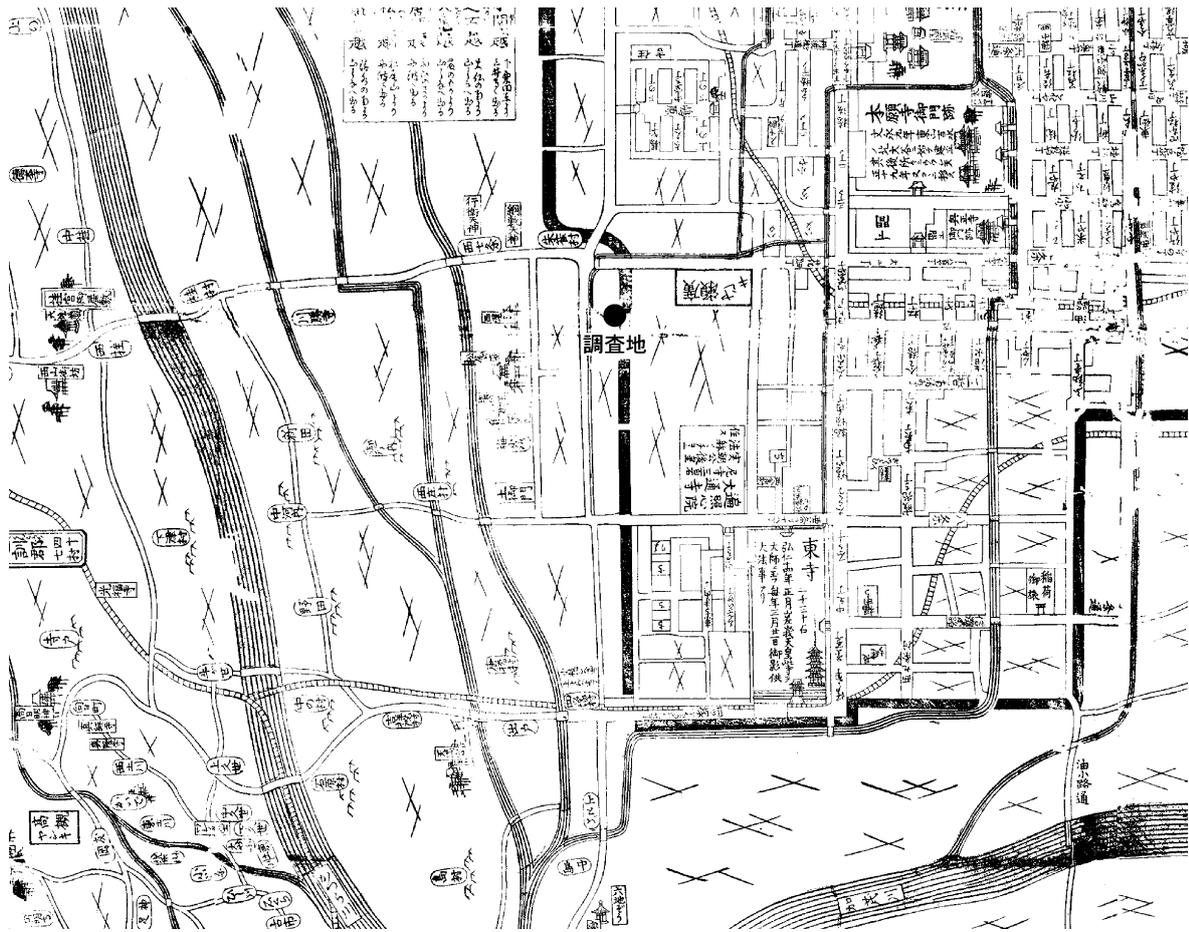


図7 慶応年間地図「改正京町御絵図細見大成 慶応4 (1868) 年」
『慶長 昭和 京都地図集成』より抜粋、加筆し転載した。

註

- 1) 『百鍊抄』第十二 建保二年(1214)二月十四日
「七條院・御堂供養。被_レ准_二御齋會_一。仍上皇竝_レ脩明門院。前齋院自_二昨日_一渡御。今日。主上行幸。」
- 2) 『平安遺文』古文書編 第八卷 四一八五 一院御座作手等解案
「在塩少路南朱雀東角二段大
八條坊門北防城西々面南一段
同次一段大
右件御領、前待賢門院御筵料藪田也、(中略)、
元暦元年七月廿四日 御作手平得壽丸判」
- 3) 図6 御土居想定図(1:50,000)は、中村武生『京都惣曲輪御土居跡の推定』「佛敎大学大学院紀要」第23號 1995年の推定図に依拠した。
- 4) 堆積状態の写真観察を橋本清一氏(山城郷土資料館)にさせていただいた。その結果、「洪水等による堆積でも生じることが有り得る」との教示を得た。
- 5) 「改正京町御絵図細見大成 慶応4 (1868) 年」『慶長 昭和 京都地図集成』柏書房 1994年
- 6) 丸川義広他「左京九条二坊十三町」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年



図9 調査前全景（南から）



図10 調査風景（南から）

分け、北部の調査後、反転して南部調査を行い、12月10日に調査を終了し、12月17日に引き渡しを行った。

2. 遺 構（図11～14、図版2）

調査は、山陰線高架西隣に沿って南北90m、東西幅3.3mのトレンチを設定した。ただし、東西両方向から45度の法面をつけての掘削となったので現地表下1.45mの最深部では、幅約1.30mしか調査できなかった。

遺構面は、耕作土層底面での遺構検出面を第1面とした。第2面は上層での遺構や南部分に広がる整地層を掘削し、地山と想定していた砂礫・砂の互層および黄褐色粘質土層上面とした。第1面遺構数は48基、第2面は23基であった。

以下に、検出した遺構についてその概略を述べる。

第1面の遺構（図11、図版3）

耕作溝（溝44・54・64・107） 山陰線敷設直前までの耕作に伴う溝である。いずれも東西方向である。溝44は、幅0.6m、深さ0.2mである。溝54は、幅1.0m、深さ0.25mである。溝64は、幅0.7m、深さ0.15mである。溝107は、幅0.9m、深さ0.1mである。染付や施釉陶器、土師器などの出土遺物から江戸時代後期以降のものと思われる。

また、調査区の南部分では、山陰線敷設に伴う排水施設と思われる土管群を8条検出した。陶器製の管で直径0.55m、長さ0.6mのものを東西に連結させており、幅1.5mを検出した。また、山陰線開通後と思われる、土管群の北側に隣接して両側を加工石で護岸する水路も検出され、近代にも大きく遺構等が削平された。

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代前期以前	土壇80・81・82、柱穴77、溝108	
江戸時代末期～明治時代	溝44・54・64・107、土壇92・100、土管	

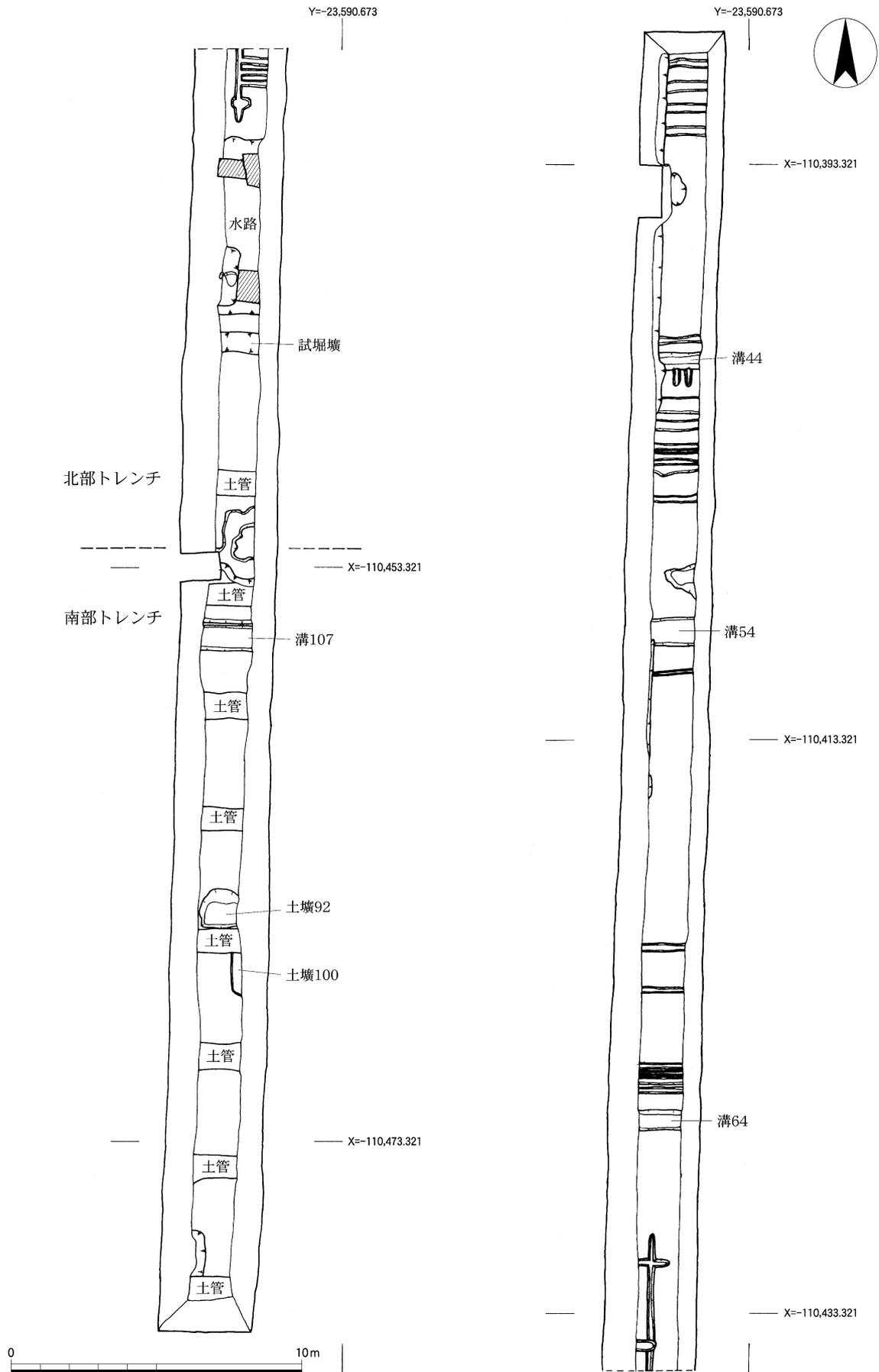


图 11 第 1 面平面图 (1 : 200)

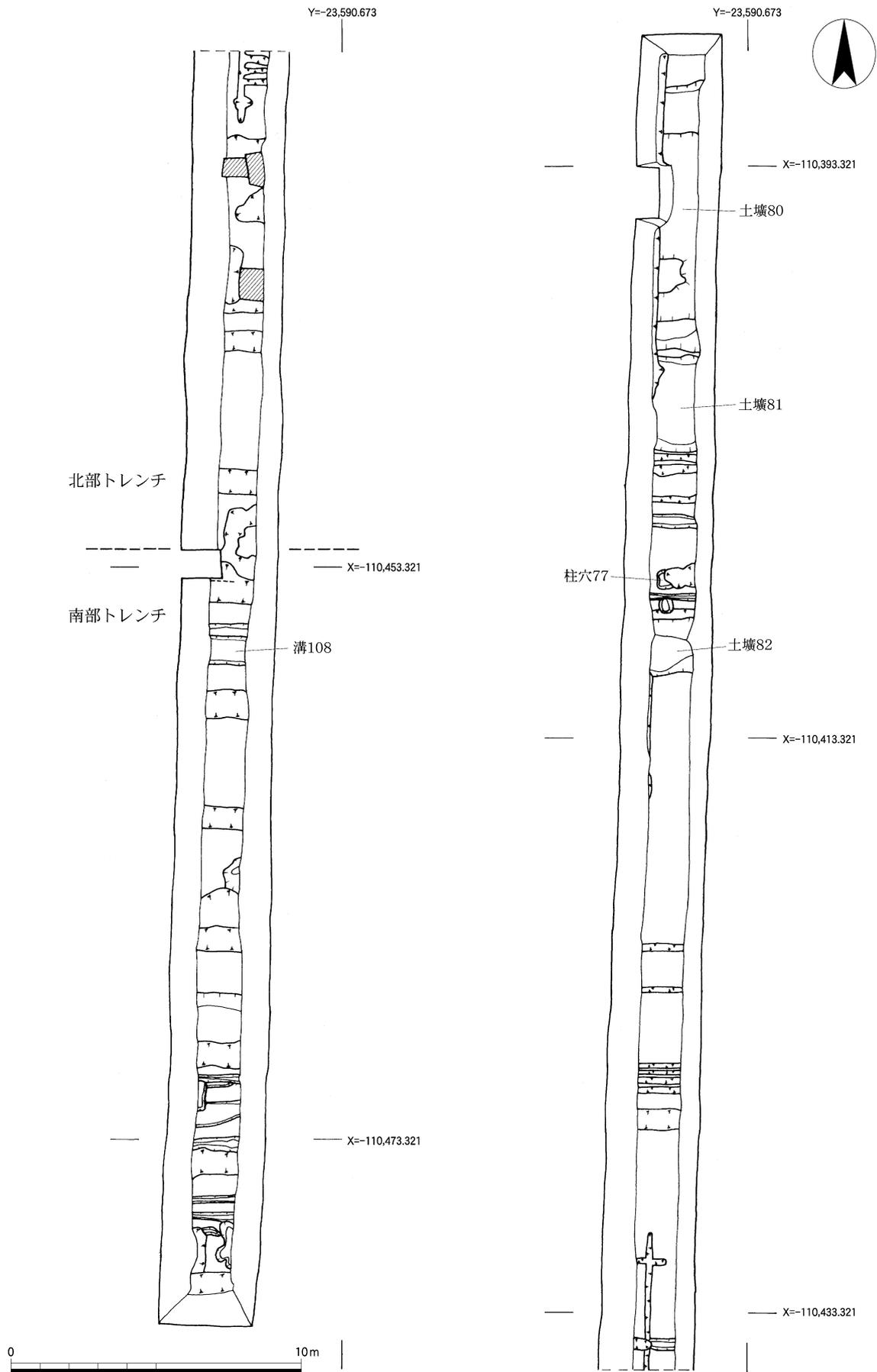
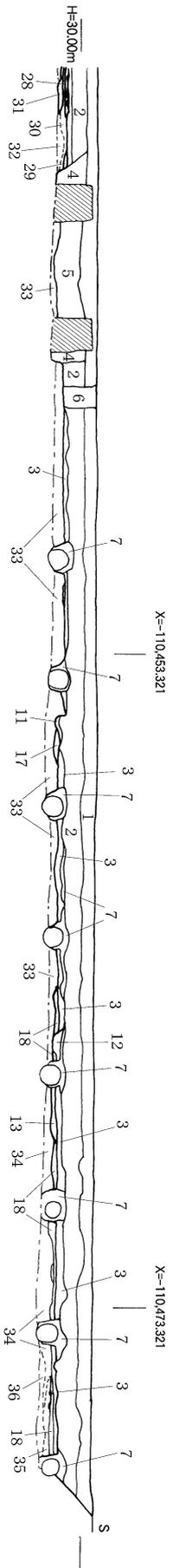
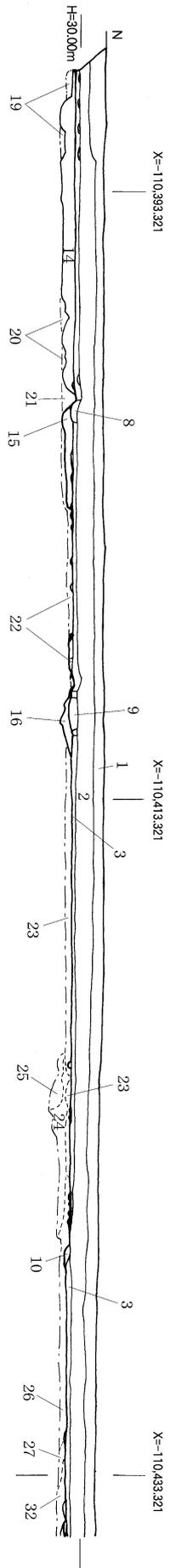
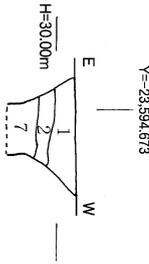


图 12 第 2 面平面図 (1 : 200)

東壁断面図



南壁断面図



- 1 10YR4/4 褐色砂礫、φ1~10cm礫・褐色泥土・フロック多量混 (現代盛土)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1~5cm礫・土管片多量混 (山陰線敷設時盛土)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、φ1~3cm礫混 (耕作土層)
- 4 10YR4/1 褐色砂泥、φ1~10cm礫・灰物片混 (水路掘形)
- 5 10YR3/1 黒褐色粘土、φ1~10cm礫少量混 (水路)
- 6 2.5Y3/3 暗才リ〜才褐色砂泥 (試掘礫)
- 7 2.5Y3/3 暗才リ〜才褐色砂泥、φ1~5cm礫多量混 (土管掘形)
- 8 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (溝44)
- 9 5Y3/2 才リ〜才黒色砂泥 (溝54)
- 10 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝64)
- 11 10YR4/1~3/1 褐色細砂、φ1~4cm礫 (溝107)
- 12 10YR4/6~5/6 黄褐色細砂、φ1~2cm礫少量混 (土壙92)
- 13 7.5YR4/4 褐色砂礫、2.5YR4/2 暗灰黄色泥土混 (土壙100)
- 14 10YR5/1 褐色砂泥 (土壙80)
- 15 10YR6/1 褐色砂泥 (土壙81)
- 16 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (土壙82)
- 17 10YR4/1~4/2 灰黄褐色砂泥 (溝108)
- 18 5Y4/2~4/3 暗才リ〜才色シルト (築地層)
- 19 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
- 20 2.5Y4/3 才リ〜才褐色粘質土
- 21 10YR6/1 褐色粘質土
- 22 10YR5/4 に近い黄褐色粘質土
- 23 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、φ1~3cm礫中量混
- 24 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、粘質
- 25 2.5Y6/1 黄灰色砂泥、木片混
- 26 5Y5/1 灰色砂礫、φ1~5cm礫多量混
- 27 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、φ1~3cm礫少量混
- 28 10YR5/4 に近い黄褐色砂泥
- 29 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、粘質、炭・遺物片微量混
- 30 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、粘質
- 31 2.5Y4/1~5Y5/1 黄灰色〜灰色細砂 (縄文土器検出)
- 32 2.5Y5/1 黄灰色砂礫、φ1~10cm礫混
- 33 10YR5/1 褐色砂泥、φ1~10cm礫混
- 34 2.5Y4/3 才リ〜才褐色細砂〜シルト
- 35 5Y4/2 灰才リ〜才色シルト〜粘土
- 36 10YR4/3 に近い黄褐色砂礫



図 13 東壁・南壁断面図 (1 : 200)

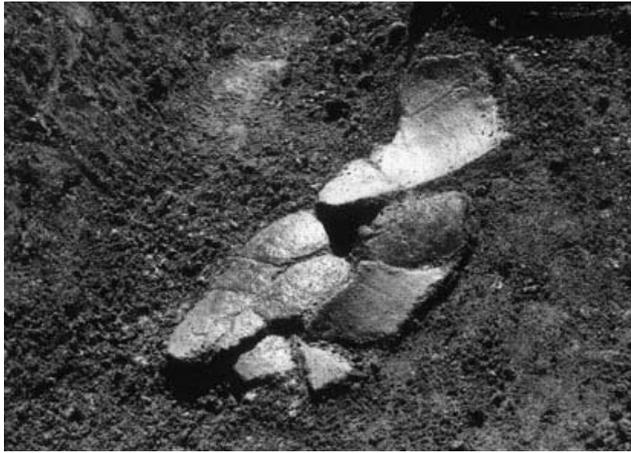


図 14 縄文土器出土状況（東から）

土壙 92 長径 1.4 m、短径 1.3 m、深さ 0.25 m の不定形な土壙である。

土壙 100 長径 1.5 m、短径 0.4 m、深さ 0.15 m、南北に長い土壙である。遺物は出土していないが層序から近世とみている。

第 2 面遺構（図 12、図版 3）

土取り穴（土壙 80～82）調査地北側部分において耕作土層の直下の溝などを掘り下げたところで同様な土壙を 3 基検出した。

土壙 80 は、南北 9.5 m、東西 1.2 m 以上、深さ 0.4 m である。土壙 81 は、南北 3.3 m、東西 1.4 m 以上、深さ 0.3 m である。土壙 82 は、南北 1.8 m、東西 1.4 m 以上、深さ 0.3 m である。出土遺物と周辺の土層の状況などから江戸時代前期以前の土取り穴と想定している。

柱穴 77 直径 0.6 m、深さ 0.2 m を測るが、柱当りは確認できなかった。出土遺物から室町時代まで遡る可能性もある。

溝 108 幅 1.0 m、深さ 0.2 m で、東西 1.2 m を検出した。第 1 面の耕作に伴う溝 107 のほぼ真下に位置する。遺物は出土していないが埋土の状況などから室町時代以前に遡る可能性もある。

なお、調査地断ち割り中に、北東から南西に向かう細砂層で縄文土器が出土した（図 14）。近辺の粗砂や砂礫層も同一方向を向いており、自然流路の堆積層と思われる。

3. 遺物（図 15～17、図版 3）

遺物はコンテナ 30 箱である。ほとんどが山陰線敷設時の盛土に伴う陶磁器類である。

他には、断ち割り時に出土した縄文土器、土取り穴から出土した平安時代から鎌倉時代にかけての須恵器や山茶碗、第 2 面の土壙から出土した土師器がある。耕作土層直下の土壙や溝からは江戸時代の陶磁器が出土している。また、耕作土層からは江戸時代末期から明治時代の陶磁器が

表 4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器	1箱	縄文土器 2点	0箱	0箱
平安時代 ～鎌倉時代	須恵器、山茶碗	0箱	須恵器 3点、山茶碗 1点	0箱	0箱
室町時代 ～明治時代	磁器、陶器、土師器	30箱	磁器 5点、陶器 15点、土師器 4点	8箱	21箱
合計		31箱	30点（2箱）	8箱	21箱

出土している。

縄文時代 (図 15 - 1・2)

縄文土器深鉢 (1・2) は、調査地中央部附近の断ち割り調査中に、調査地を北東から南西方向に流れる自然流路において出土した。1 は主文様が渦巻文で、隆帯が囲む。沈線による区画文内には「ハ」字形の横位の羽状沈線文が施されている。2 も沈線による楕円形文の中に、羽状沈線文を施す。胴部は磨滅が著しいが、縦方向の縄文がわずかに残る。また、胎土には長石が多く含まれる。以上から、縄文時代中期末いわゆる北白川C式1に属すると思われる。同時期の遺物は北白川追分町遺跡の他、上終町遺跡⁴⁾や上賀茂遺跡⁵⁾などからも出土している。

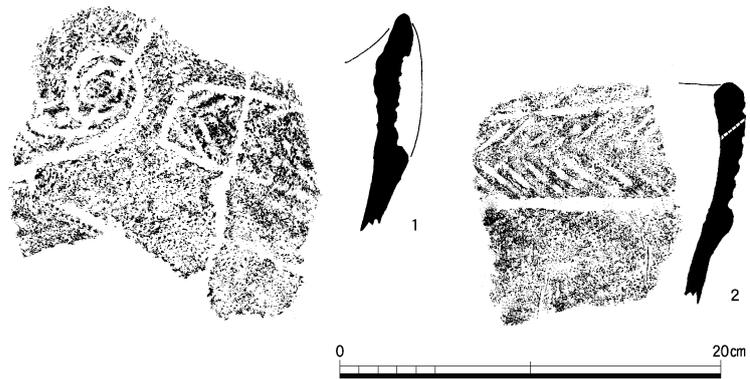


図 15 縄文土器拓影・実測図 (1 : 4)

平安時代 (図 16 - 3・4)

須恵器甕 (3) は口縁部のみである。土取り穴 (土壌 82) から出土した。須恵器杯蓋 (4) も口縁部のみである。土取り穴 (土壌 80) から出土した。これらは平安時代前期に属するものである。

鎌倉時代 (図 16 - 5・6)

山茶碗 (5) は底部の小片で、高台は貼付け、体部は緩く立ち上がるものである。東播系須恵器捏鉢 (6) は口縁部の小片で、口縁端部が外に張り出す。これらは鎌倉時代前期の様相を示す。両者とも土取り穴 (土壌 80) から出土した。

室町時代 (図 16 - 7・8)

土師器皿 (7・8) は、体部が外反し、端部がわずかに立ち上がるものである。7 は口径 9.6 cm、器高 2.1 cm で、8 は口径 12.6 cm、器高 2.2 cm である。15 世紀後半から 16 世紀までのものである。第 2 面の土壌から出土した。

江戸時代 (図 16 - 9~11)

肥前系磁器筒形碗 (9) は、四方ダスキをあしらう。京・信楽系陶器 (10) は、筒形容器である。

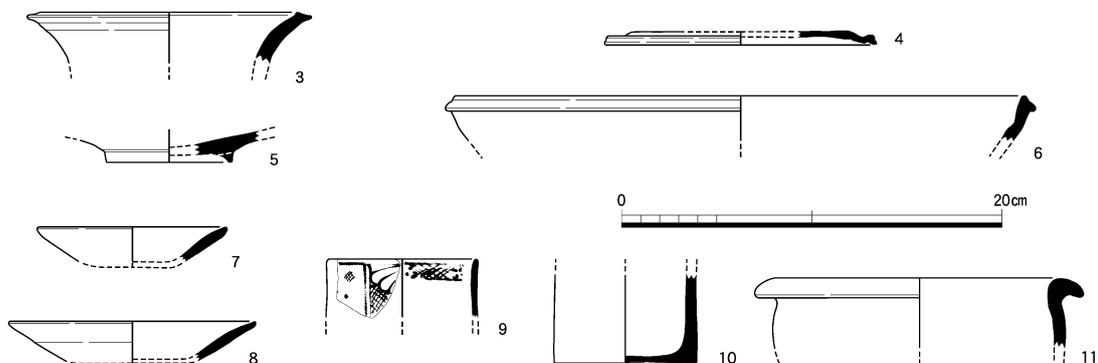


図 16 土取り穴・土壌・溝出土土器実測図 (1 : 4)

施釉部はカセている。9・10は土壙から出土した。

信楽陶器鉢（11）は、灰釉を厚く施している。類例から下半部は露胎と思われる。耕作土層直下の溝44から出土した。

江戸時代末から明治時代（図17 - 12～30）

12～27は耕作土層から出土した遺物である。耕作土層によって削平された遺構に関連すると思われる16世紀前後の土師器（12・13）もあるが、それ以外のものは幕末以降の様相を示す遺物である。瀬戸・美濃系では木型打込皿（14）、染付椀（15）などがある。京・信楽系では灯明受皿（16・17）、灯明皿（18）、急須蓋（19・20）、土鍋と蓋（21・22）、鍋蓋（23）、土瓶蓋（24・25）、イッチン描行平蓋（26・27）などがある。これらは山陰線敷設工事開始までの遺物である。

その他、山陰線敷設時の遺物には、肥前系磁器の小杯（28）、京・信楽系陶器の飛びカンナを施す行平蓋（29）や土鍋（30）などが土管埋土から出土している。大宮～二条間が開通する明治30年までの遺物である。

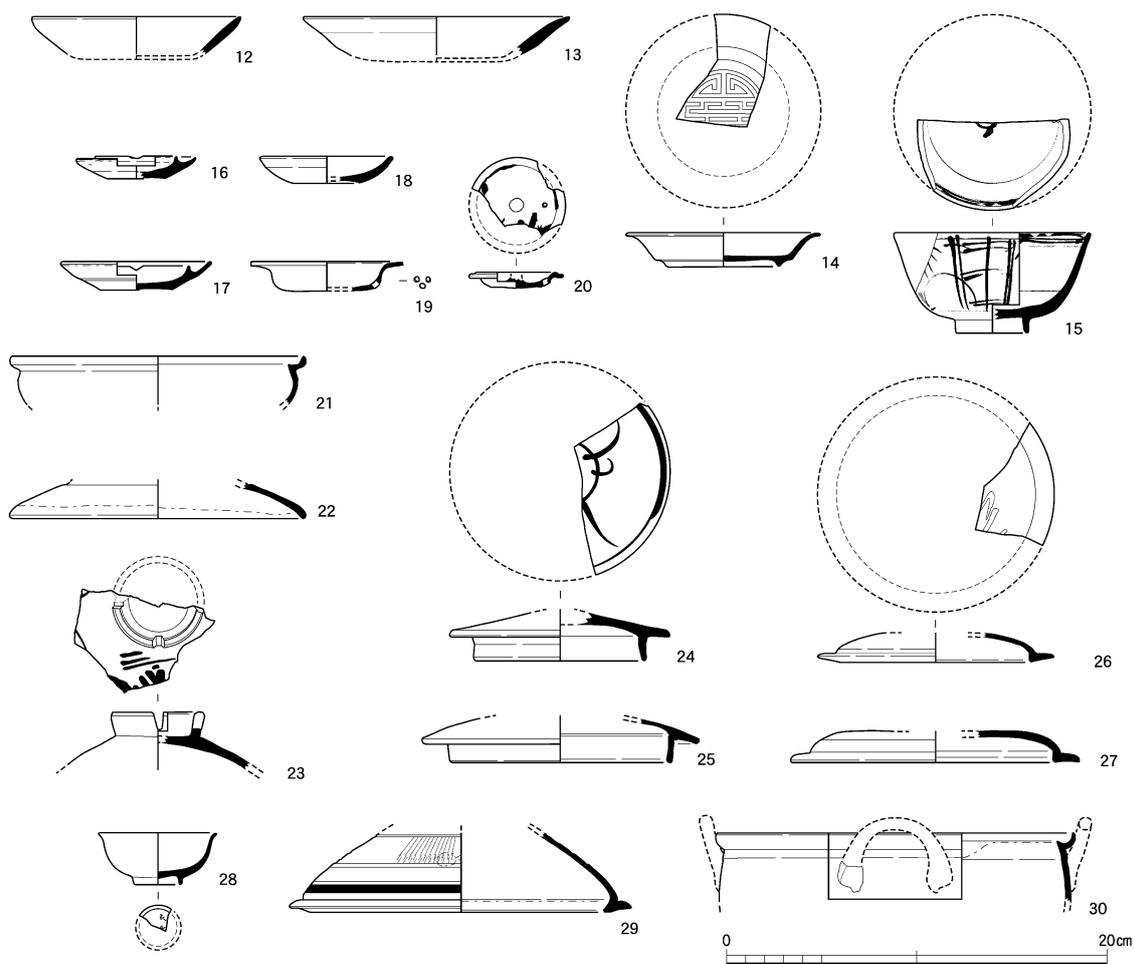


図17 耕作土層・土管埋土出土土器実測図（1：4）

4. ま と め

今回の調査を総括すれば、下記のようなになる。

1) 平安時代の朱雀院に関連する遺構は検出できなかった。近世以前の土取り穴や耕作土、そして山陰線設置などにより調査対象地の遺構は削平されていることがわかった。

2) 近世の古い時期には建築用土の採集地として、また新しい時期には耕作に伴う土地利用が認められる。

3) 明治30年4月に開通の二条～大宮間の山陰線敷設に伴い、20年代の大幅な排水施設をともなう盛土による造成がなされているなど、当該地の土地利用の変遷が明らかになった。

註

- 1) 太田静六「朱雀院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年 に依拠した。
- 2) 『平安京跡発掘調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- 3) 『平安京研究 No1』平安京調査会 1974年
- 4) 『京都大学埋蔵文化財調査報告』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985年
- 5) 坂東善平「京都市上賀茂縄文遺跡」『古代学研究』第41号 古代学研究会 1965年

Ⅲ 平安京右京六条一坊一・二町跡

1. 調査経過

調査は JR 山陰線複線高架工事に伴う第 3 次発掘調査である。調査地は松原通～五条通間の現高架下西側の南北側道である。調査にあたっては安全を確保するため高架の橋脚や民地境界フェンスからは一定の間隔を保つため、幅約 3 m、長さ約 128 m の規模で南北に細長く幅が狭い調査区の設定となった。さらに、調査区の壁面傾斜を 45 度とした。また、現在も使用中の下水道排水管が調査区内の南北に埋設されていたため、破損・崩壊を防ぐため、埋設管を養生した上で掘削を行った。調査にあたっては、掘削残土の置き場を確保するため、調査区を南から 1 区と 2 区に分けて、1 区の調査終了後に、2 区の調査を行った。

調査地は平安京右京六条一坊一町・二町域にあり、1 区は一町の南半から二町の北側にあたり、2 区は一町の北部にあたる。六条一坊一町・二町内の既調査は 1974・75 年に山陰線高架工事に伴う立会調査¹⁾が五条通から松原通間で行われているが、旧山陰線の敷設により大きく削平を受け、顕著な遺構は検出されず地山の確認にとどまっている。二町では 1984 年の立会調査²⁾(図 18- 1)で平安時代中期の遺物包含層などが検出されている。また南側の 1987 年の試掘調査³⁾(図 18- 2)

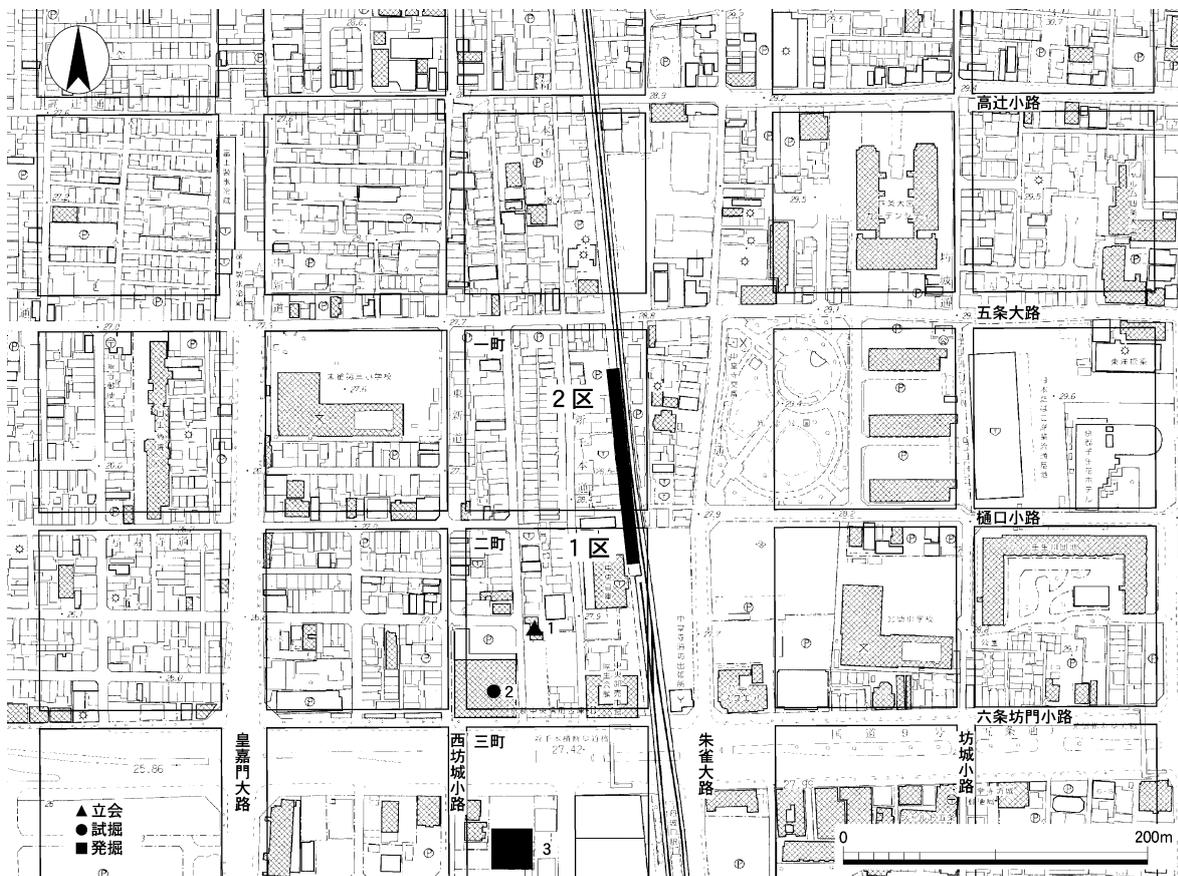


図 18 調査位置図 (1 : 5,000)



図 19 調査前全景（北から）



図 20 2区調査風景（北から）

によって、六条坊門小路北側溝・路面（平安時代末期）、平安時代中期の遺物包含層などが検出されている。調査地から西へ約 30 m のところには、豊臣秀吉によって天正十九年（1591）に築造された御土居が南北に存在していたとされる。その南にあたる中堂寺南町では 1997 年度の JR 丹波口駅再開発工事に伴う調査⁴⁾で南北方向の御土居堀の西肩を検出している。

以上の調査成果を踏まえ、今回の調査では平安時代から近世にいたる当調査地での変遷を主眼に置き、とくに平安時代については宅地や条坊に関連する遺構の検出を主目的に行った。

2. 遺 構（図 21、図版 4）

1 区の基本層序は地表面から約 0.8 m までが近・現代の積土で、その下に江戸時代末期の耕作土がある。以下は褐色泥砂層、暗灰黄色砂泥層、褐色砂礫層の地山となる。2 区も同様の堆積状況である。調査では、第 1 層の耕作土の上面まで機械掘削を行い、第 1 層からは人力で掘り下げを行い、地山面で遺構検出を行った。

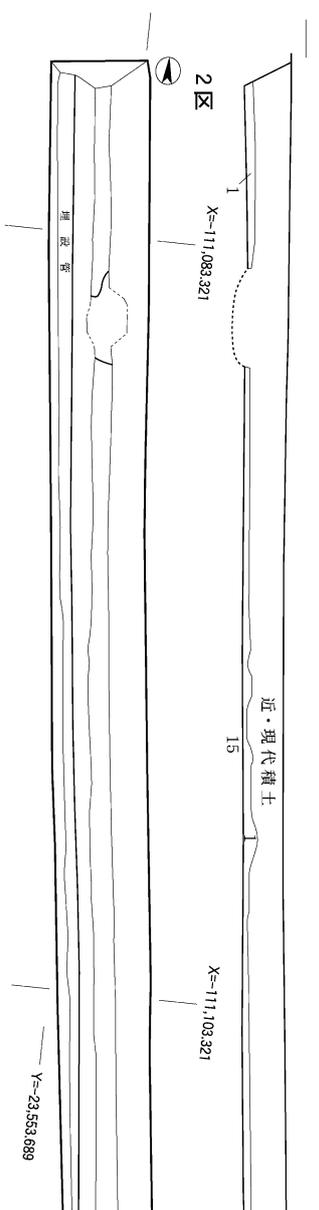
検出の結果、鎌倉時代から室町時代の遺構と江戸時代中期から末期の遺構を検出した。検出高は 2 区の北端が 1 区南端より 0.5 m 高く、北側から南に傾斜する地形を示していた。その中央での標高は 28.4 m である。遺構は 1 区側に集中し、2 区では明確な遺構は検出できなかった。1 区で検出した遺構の総数は 34 である。遺構は鎌倉時代から室町時代の土取り穴とみられる土壌群、江戸時代中期から末期の耕作溝・土壌・湿地状堆積である。以下に主要な遺構について概述する。

鎌倉時代から室町時代の遺構

土取り穴（土壌 14・23・24・27・32～34） 1 区の地山面で検出した。いずれも地山である褐色泥砂層を掘り込んでいるが、下層の砂礫層には達していない。良質な泥砂層を採取するために

表 5 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
鎌倉時代～室町時代	土壌（土取り）14・23・24・27・32～34	
江戸時代	耕作溝 1・2 土壌 17	



- 1・2区 東壁
- 1 10YR 4/1 褐色砂泥 (旧耕土)
 - 2 2.5YR 2/1 赤褐色砂泥 (旧耕土)
 - 3 7.5YR 2/2 黒色粘土 木製品含む (湿地状堆積)
 - 4 10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 (土層17)
 - 5 7.5YR 2/1 黒色粘土 (溝1)
 - 6 7.5YR 2/1 黒色粘土 (溝2)
 - 7 2.5YR 5/1 赤灰色泥砂
 - 8 7.5YR 4/1 褐色砂泥 (土層34)
 - 9 2.5Y 4/3 オウ-7 褐色粘土 (土層33)
 - 10 10YR 4/3 灰黄褐色砂泥 (土層23)
 - 11 10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 (土層32)
 - 12 10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 (土層24)
 - 13 10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 (土層25)
 - 14 10YR 4/2 灰黄褐色泥砂 (土層27)
 - 15 7.5YR 4/4 褐色泥砂 (地山)
 - 16 2.5YR 5/2 暗灰黄色砂泥 (地山)
 - 17 7.5YR 4/4 褐色砂礫 (地山)

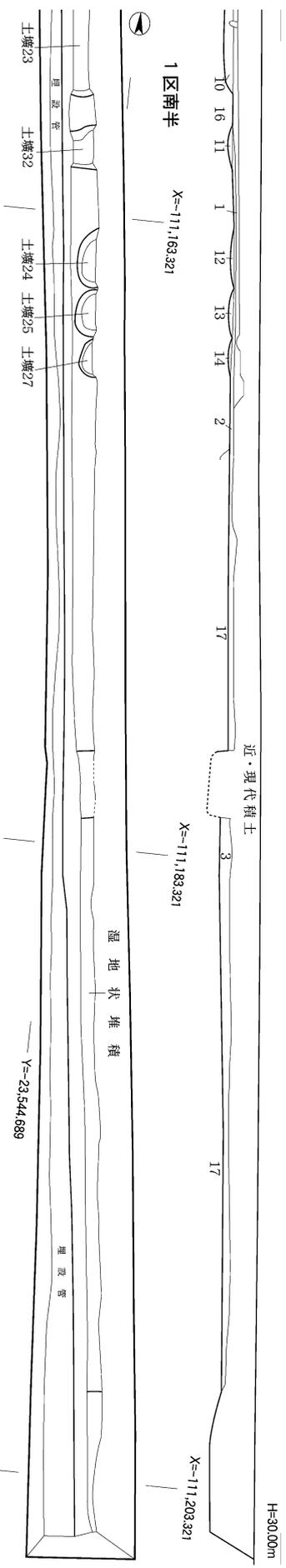
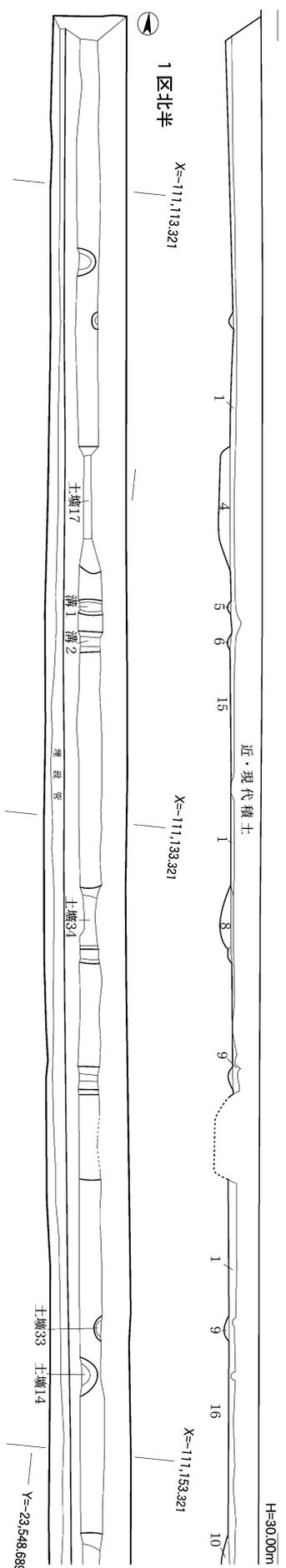


図 21 遺構実測図 (1 : 200)

掘られた土壙とみられる。その規模はおおよそ大・中・小に分かれる。大は土壙 23 で幅 4 m、深さ 0.1 m、埋土は黄褐色泥砂層。平面形状は不明である。中は土壙 24・34 である。その規模はいずれも幅 2 m、深さは土壙 24 が 0.1 m、土壙 34 は 0.6 m である。埋土は土壙 24 が灰黄褐色泥砂層、土壙 34 は褐灰色泥砂層である。土壙 24 は楕円形、土壙 34 は不明。小は土壙 14・27・33 である。幅が 0.8～1.3 m、深さが 0.1～0.15 m である。埋土は土壙 14・27 が灰黄褐色泥砂層、土壙 33 はオリーブ褐色粘土である。いずれも円形状である。

江戸時代中期から末期の遺構

土壙 17 1 区の溝 1 の北側で検出した。幅 4 m、深さ 0.4 m。埋土は灰黄褐色泥砂層で、やや礫混じりである。さらに調査区外に延びる。土壙内からは染付陶器碗や塩壺などが出土している。

耕作溝(溝 1・2) 1 区の北側で検出した。いずれも耕作に伴う東西方向の溝である。溝 1 は幅 0.4～0.5 m、深さ 0.2 m。溝 2 は幅 0.5～0.6 m、深さ 0.5 m。埋土はいずれも黒色粘土層である。

湿地状堆積 1 区南半で検出した。近・現代積土直下で、厚さ 0.2～0.5 m で南に向かって下がる湿地状堆積である。南北 22.5 m にわたってみられ、さらに調査区外の南に延びる。平安時代から江戸時代末期の土器類や木製品が出土した。木製品の中には墨書で記載された付札(図 23)が 1 点出土している。

3. 遺 物 (図 22・23、図版 4)

出土遺物は整理箱に 7 箱である。平安時代から江戸時代の遺物が出土した。鎌倉時代と江戸時代末期以降のものが大半を占め、他の時期の遺物は少ない。土器類が大半で、瓦類は少ない。ただし木製品が 1 箱出土している。以下、時代順に主要な遺物について概説する。

平安時代 土器類・瓦類が少量ある。中世の土取り穴と湿地状堆積や近世の耕作土に混入して出土した。土器類には、土師器皿、須恵器杯蓋・鉢・甕、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。瓦類には平瓦・丸瓦がある。

鎌倉時代から室町時代 土器類・瓦類がある。土取り穴・湿地状堆積溝・耕作土から出土した。土器類には、土師器皿、施釉陶器碗、焼締陶器鉢・甕、輸入陶磁器には白磁碗・青磁碗などがあ

表 6 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦				
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶器、瓦質土器				
江戸時代中期以降	土師器、陶器、磁器、土製品、瓦、木製品、銭貨、石製品		木製品 1 点、銭貨 1 点		
合 計		7 箱	2 点 (1 箱)	3 箱	3 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 1 箱多くなっている。

る。また瓦質土器もある。土取り穴からは土師器皿、須恵器甕などが出土した。とくに土壙 32 から出土した土師器皿は京都VI期古～中（12世紀後半から13世紀初頭）の特徴をもつ⁵⁾。また土壙 34 からも類似した土師器皿、白磁椀、青磁椀などが出土している。土壙 23・24 からは土師器皿とともに輸入陶磁器である白磁椀・青磁椀や瓦質土器、瓦などが出土した。その他、土壙 14・27 からも土師器皿の小片が出土している。

江戸時代中期から末期 土器類・瓦類があり、土壙 17・耕作溝・耕作土などから出土した。土器類には土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・土製品などがある。器種には土師器鍋・塩壺、焼締陶器壺・播鉢、施釉陶器椀・鉢・壺、染付陶器椀、青磁・白磁椀などがある。土器類以外には土製品、銭貨、木製品、石製品がある。土製品には伏見人形。銭貨が1点出土している。木製品は多くが1区南半の湿地状堆積から出土している。木製品には付札・曲物・箸・建築部材などが

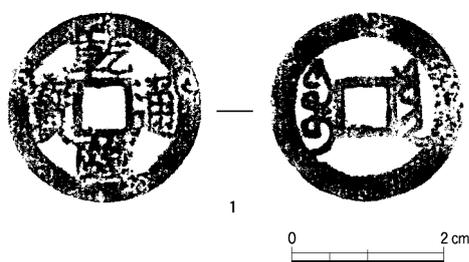


図 22 出土銭貨拓影（1：1）

ある。石製品には火打ち石がある。溝 1・2 からは染付椀、白磁椀などが少量出土しているが、いずれも小片である。土壙 17 からは染付陶器椀、施釉陶器椀、磁器椀、土製品とともに、18世紀中頃とされる体部外面に「泉州麻生」の刻印入りの焼き塩壺が出土している。

乾隆通寶（図 22） 1区耕作土から出土した。中国・

清からの渡来銭である。初鑄年代が1736年。円形方孔で外径2.5cm、穿孔径0.52cm。重量は3.98g。

付札（図 23） 1区湿地状堆積から出土した。長さ18.0cm、幅4.9～5.0cm、厚さ0.5cm。形状は折損しているが、一方の両端が隅丸状の長方形。片側のほぼ中央に径0.7cm大の穿孔がみられ、表・裏面に墨書が残る。積文は、表が「全

「京松原（穿孔）□□」「猪熊西入る 壺壺」「鶴□□様」と記されている。裏面は判読が困難である。

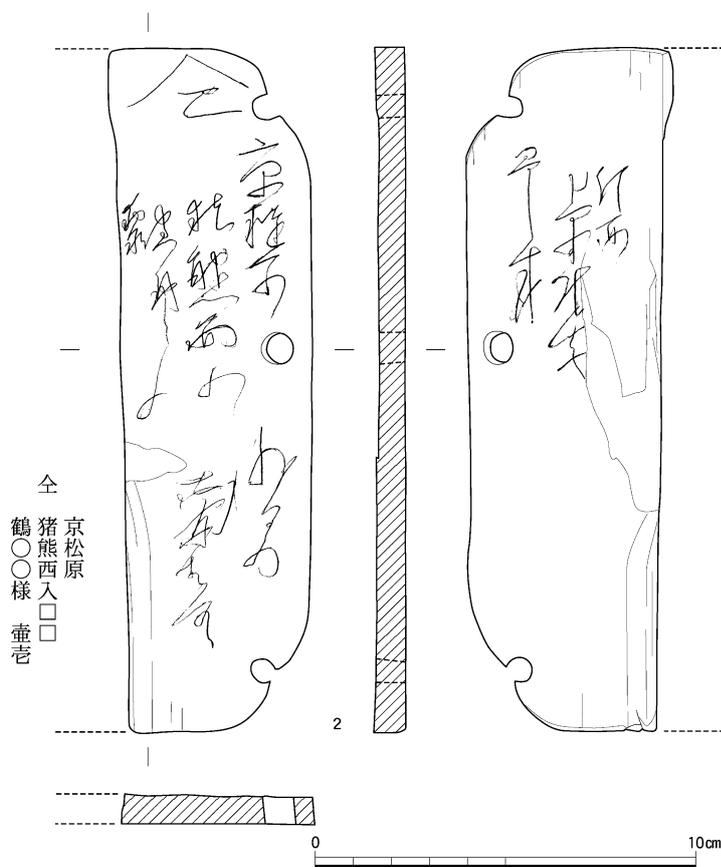


図 23 出土付札実測図（1：2）

4. ま と め

調査の結果、平安時代の明確な遺構は検出できなかった。遺物も中世以降の遺構に混在して出土したものが多く、出土量も少なかった。また1区南半での樋口小路推定部では、耕作土直下で砂礫層の露出面を確認したが、地山である砂礫層と同一層であり、その南には江戸時代後半の湿地状堆積がみられ、江戸時代後期以降の耕地化により、大きく削平されたと考えられる。

中世の土壌群は、1区北半の地山とみられる砂泥層上面で検出している。この砂泥層は断ち割り断面から、1区の南半部でみられた砂礫層の上に堆積しており、土壌の底部が砂礫に達していないことなどから、土壌群は良質な砂泥層を採取するための土取り穴と考えられる。土取り穴は出土遺物も少なく、埋土も単一なことから、かなり短期間で埋め戻されたことが推測できる。これらの土取り穴は中世以降の当地周辺の土地利用や、再開発に関連するものと考えられる。

江戸時代後半の遺構としては耕作溝1・2と土壌17がある。また後半以降には耕作土が調査区全体にみられる。調査地を含む周辺一帯は、江戸時代の中堂寺村⁶⁾に属していることから、当地が当村の耕作地であったことは明らかである。また1区南半で検出した湿地状堆積は、調査地の北にあたる五条一坊・二坊などに点在する各時代の池あるいは湿地状堆積などとの関連で、今後の検討を要する課題である。

註

- 1) 『平安京跡発掘調査報告 山陰線高架工事に伴う埋蔵文化財調査報告』山陰線高架工事に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- 2) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 3) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
- 4) 「平安京右京六条一坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 5) 小森俊寛『京から出土する土器編年の研究』京都編集工房 2005年
- 6) 「中堂寺村」『京都市の地名』平凡社 1979年

IV 平安京右京五条一坊一～四町跡

1. 調査経過

調査は JR 山陰線複線化高架工事に伴う第 4 次発掘調査である。対象地は西高瀬川から松原通までの総延長距離約 450 m で、現高架下西側の幅 3～4 m の南北側道である。調査に際し、西高瀬川から綾小路通を 1 区、綾小路通から仏光寺通を 2 区、仏光寺通から高辻通を 3 区、高辻通から松原通を 4 区とした。さらに 1 区以外は各調査区を北から A・B に細分した。4 区については北端の補足調査を C 区とした。

調査地は平安京右京五条一坊の東端部に推定され、東を朱雀大路、西を西坊城小路、北を四条大路、南を五条大路に囲まれている。その内を、さらに東西方向の道路綾小路・五条坊門小路・高辻小路が通る。また朱雀大路と皇嘉門大路に挟まれた 2 町域は、「坊城の地」とよばれた特別の地域にあり、調査地はその中に含まれる。文献や絵図などの史料には、調査地の北には四条大路

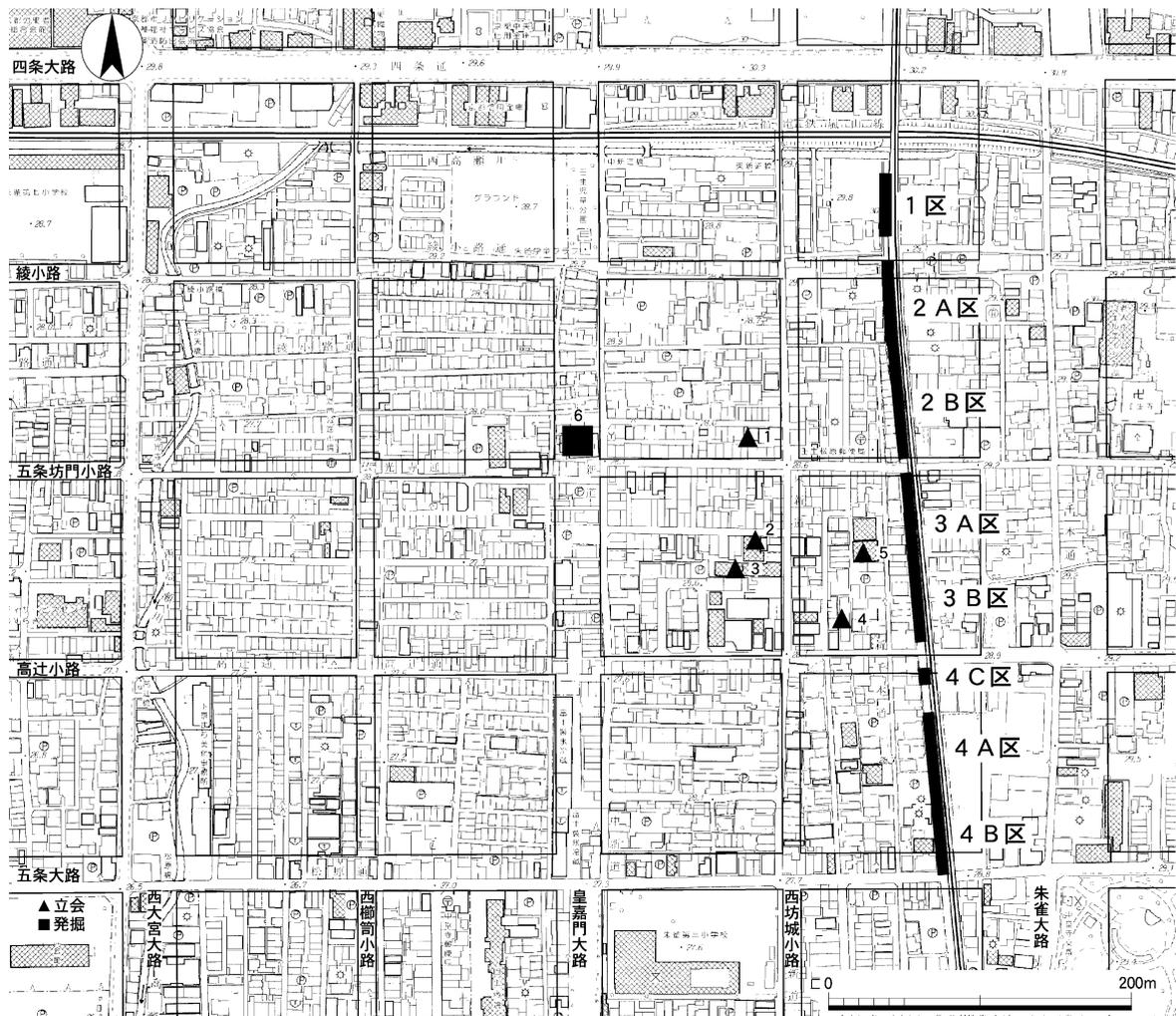


図 24 調査位置図 (1 : 5,000)



図 25 2区調査前全景（北から）



図 26 4区調査風景（南から）

から北への東西2町、南北4町に及ぶ広大な敷地をもつ嵯峨上皇の離宮・朱雀院が存在したことがわかる¹⁾。ただし平安時代末期に藤原俊盛の邸宅が五条一坊一町内に存在したとあるだけである²⁾。

右京五条一坊内での既調査は1974・75年に山陰線高架建設工事に伴う立会調査が三条通～梅小路間で行われている。その内、一町から四町にあたる四条通～五条通間の調査では、近代攪乱による削平により、顕著な遺構の検出はなかった³⁾。その後、1986年の七町の調査（図24-1）で平安時代中期の土壌と遺物包含層を検出している。また1986年の六町の調査（図24-2）では平安時代前期の土器と木製品を含む池状堆積を確認した。また、1999年の同町の調査（図24-3）でも同一の池状堆積を検出し、池内から「細工所飯肆・」と記載された木簡が出土している。1986年の三町の調査（図24-4）では池状堆積から木製品とともに江戸時代の木簡が出土した。さらに北側の同町の調査（図24-5）では平安時代の遺物包含層を検出している。1990年の七町の調査（図24-6）では皇嘉門大路と東側溝を検出している。

以上の周辺調査の成果を踏まえ、今回の調査では、平安時代から近世にいたる当調査地での変遷を主眼に置き、各時期における遺構の確認および、平安京跡の東西方向の大路・小路の路面・側溝など条坊に関連する遺構の検出を主目的に行った。

調査にあたっては、JRの高架橋脚に沿った側道であることから、調査中の排土の置場確保、

表7 周辺の主要な調査一覧表

番号	調査地区	所在地	調査期間	調査概要	文 献
1	五条一坊七町	中京区壬生高樋町	1986.05.23	GL-0.9mにて室町時代の遺物包含層検出	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局
2	五条一坊六町	中京区壬生松原町54	1986.03.06～03.07	GL-0.9mで平安時代前期の遺物包含層を含む池状堆積	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局
3	五条一坊六町	中京区壬生松原町53-4	1999.05.10～05.20	GL-1.15mで池状堆積、池内から平安時代前期の土器類と木簡出土	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成8年度京都市文化観光局
4	五条一坊三町	中京区壬生松原町67-11.20	1986.10.15～10.25	GL-0.9mにて室町時代の層、-1.0mにて平安時代の遺物包含層検出	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局
5	五条一坊三町	中京区壬生松原町1-26	1986.09.01	GL-0.37mで池状堆積、多数の木製品（木簡も含む）	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局
6	五条一坊皇嘉門大路	中京区壬生高樋町64-4	1989.03.10～04.10	平安時代前期の皇嘉門大路東側溝・路面検出	『平安京右京五条一坊皇嘉門大路』京都文化博物館調査研究報告第5集 京都文化博物館 1990年

車両進入路などの安全に留意し、重機掘削は北の1区から開始した。また調査区は高架橋脚部から一定の間隔を保ち、壁面についても法面に45°の傾斜を設け掘削を行い、安全確保に努めた。調査は調査区幅が狭隘なため、遺構の規模・性格などについては、面での把握のほか断面観察や拡張などによる確認に努めた。調査面が深い箇所については、調査区の底幅が0.5 m以下となるため、安全性を重視し重機により掘削を行い、速やかに図面や写真撮影などの記録をとり、即日に埋め戻して対応した。1～3区の調査は8月21日から開始し、10月31日までに各調査区の遺構掘削、全景撮影、図面作成などの作業を終え、埋め戻しを行い、調査を終了した。4区の調査は11月1日から南の4B区から重機掘削を開始し、4A・B区の遺構掘削、全景撮影、図面作成を終え、埋め戻しと並行して、北端の4C区の補足調査を行い12月22日には現場事務所、機材などを撤去し完了した。

調査の結果、平安時代前期の園池の存在や、平安京の道路面・側溝などを確認した。園池については、遺構の重要性を考慮し、10月19日に広報発表を行った。

2. 遺 構

調査地は調査区により堆積状況が異なるが、基本的には上から近・現代積土、耕作土で、以下第1層は灰黄褐色砂泥、第2層は暗褐色砂礫・黄褐色砂泥・黄褐色細砂などの地山である。近・現代積土は明治30年(1897)4月に開通の山陰線敷設時と昭和47年(1972)の高架建設工事に伴うもので、調査区全体にみられる。また耕作土は出土遺物から江戸時代末期から明治時代の山陰線敷設以前で、ほぼ全体に堆積している。第1層灰黄褐色砂泥は中世の遺物包含層で、2区から3区にかけては厚い堆積がみられるが、耕作土に削平され消失しているところもみられる。第2層以下はベースとみられる地山である。1区～3A区では自然流路の堆積を示す砂礫と砂やシルトの互層もみられるが、3B区から南は黄褐色砂泥層が堆積している。江戸時代の遺構は耕作土下の第1面とした第1層灰黄褐色砂泥上面で検出した。平安時代から中世の遺構は第2面の地山上面で検出した。ただし第1層が削平され消失している1区、3B区、4A区では、いずれも地山面で平安時代から近世の遺構を検出した。以下、調査区ごと、時代順に検出した主要な遺構

表8 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期	洲浜、池状堆積、路面、側溝	2B区、3A区
平安時代後期	路面、側溝、土壇、整地層	4B区、4C区
鎌倉時代	溝、土壇、石敷き遺構	4B区、4C区
室町時代	溝、土壇	1区
江戸時代後半	小溝群、溝、土壇	1区～4区

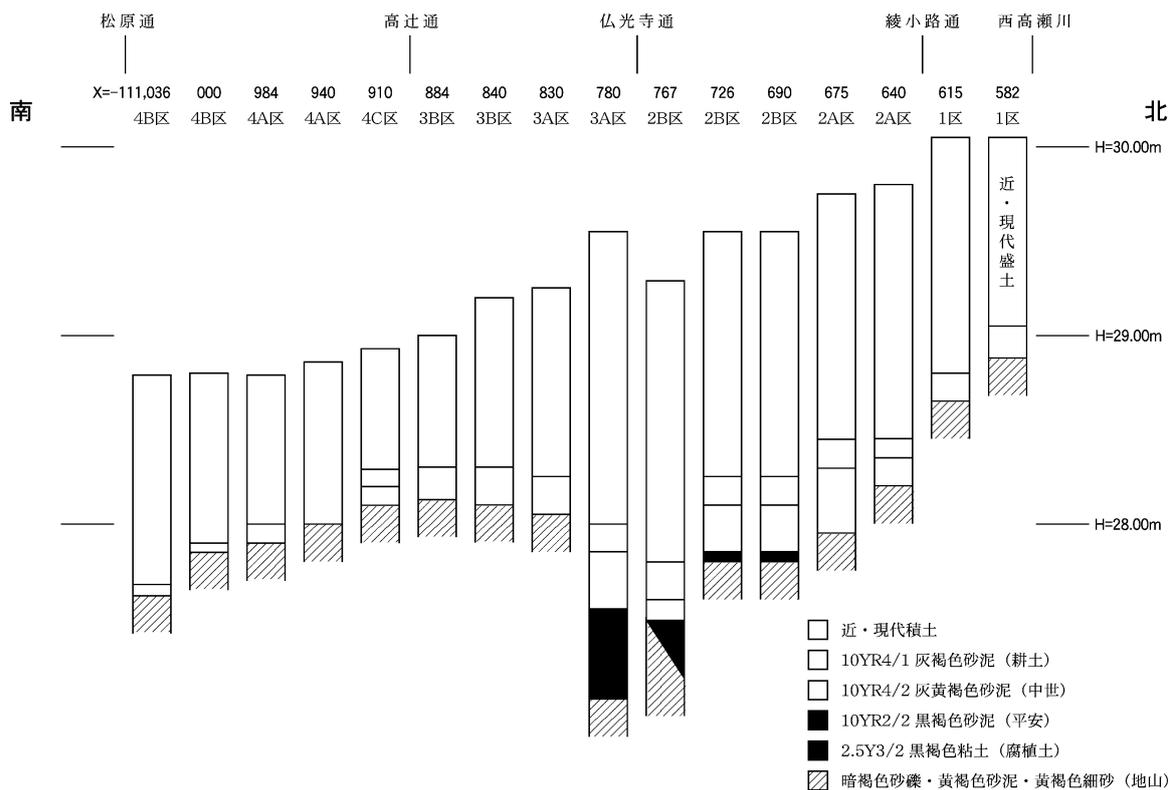


図 27 断面模式図

について概述する。

(1) 1区の遺構 (図 37、図版 5)

検出した遺構の総数は 15 である。地山上面で室町時代の遺構と江戸時代後半以降の遺構を検出した。遺構には土壌、溝がある。当調査区は五条一坊一町内の南半部に当たっている。

室町時代

溝 1・7・11 いずれも東西方向の溝である。溝 1 は調査区の北端で検出した。幅 0.8 m 以上、深さ 0.3 m。埋土は暗褐色砂泥層。調査区のほぼ中央では溝 7 を検出した。幅 0.9 m、深さ 0.3 m。埋土は暗褐色砂泥層。調査区南半部では溝 11 を検出した。幅 1.2 m、深さ 0.4 m。埋土は褐色砂泥層。いずれも出土遺物から室町時代後半とみられる。

江戸時代後半

耕作溝(溝 4・5・13～15) 溝 4・5 は南北方向の溝である。溝 4 は幅 0.5 m 以上、深さ 0.07 m で、南北延長約 11 m にわたり検出した。埋土は灰褐色砂泥層。溝 5 は幅 0.7 m、深さ 0.2 m、南北延長約 35 m にわたり検出した。埋土は褐色砂泥層。溝 13～15 は東西方向の溝で、幅 0.2～0.3 m、深さ 0.02～0.03 m。埋土は暗褐色砂泥層である。

(2) 2区の遺構 (図 37・38、図版 5～8)

検出した遺構の総数は 34 である。灰黄褐色砂泥層下の第 2 面地山上面で平安時代前期の遺構を検出した。検出した遺構は 2A 区では綾小路路面・南側溝、土壇、溝など、2B 区では土壇、洲浜、池状堆積である。また 2A 区では第 1 面の灰黄褐色砂泥層上面で江戸時代後半以降の遺構を検出した。

なお 2B 区の洲浜以南については、調査区幅 2.2 m と狭隘であったため、耕作土の上面から部分的に最深部まで重機掘削を行い、図面作成や写真撮影後、埋め戻しを順次行いながら作業を進めた。調査区全域は五条一坊二町内にあたる。

1) 2A 区の遺構 (図 37、図版 5～7)

平安時代前期

路面 34 (図 28、図版 7) 2A 区北端で東西方向の路面を良好な状態で検出した。通常は小路の路面幅は 2 丈 3 尺 (6.9 m) であるが、路面幅 7.2 m 以上で、調査区の西・東外に延びる。地山直上に粘土が貼られ径 0.02～0.04 m の小石を敷いて、堅固にたたき締められていた。粘土層からは平安時代前期の須恵器杯 (図 46 - 37) がほぼ完形で出土している。

溝 18 (図 28、図版 7) 路面 34 の南側溝である。幅 0.9 m、深さ 0.24 m。埋土は褐色粘土層である。断面の形状は逆台形を呈する。溝内からは平安時代前期の土師器皿、須恵器杯 (図 46 - 38) などが出土している。

溝 28 2A 区の南半で検出した東西溝である。幅 0.2 m、深さ 0.08 m。埋土は褐灰色混礫粗砂

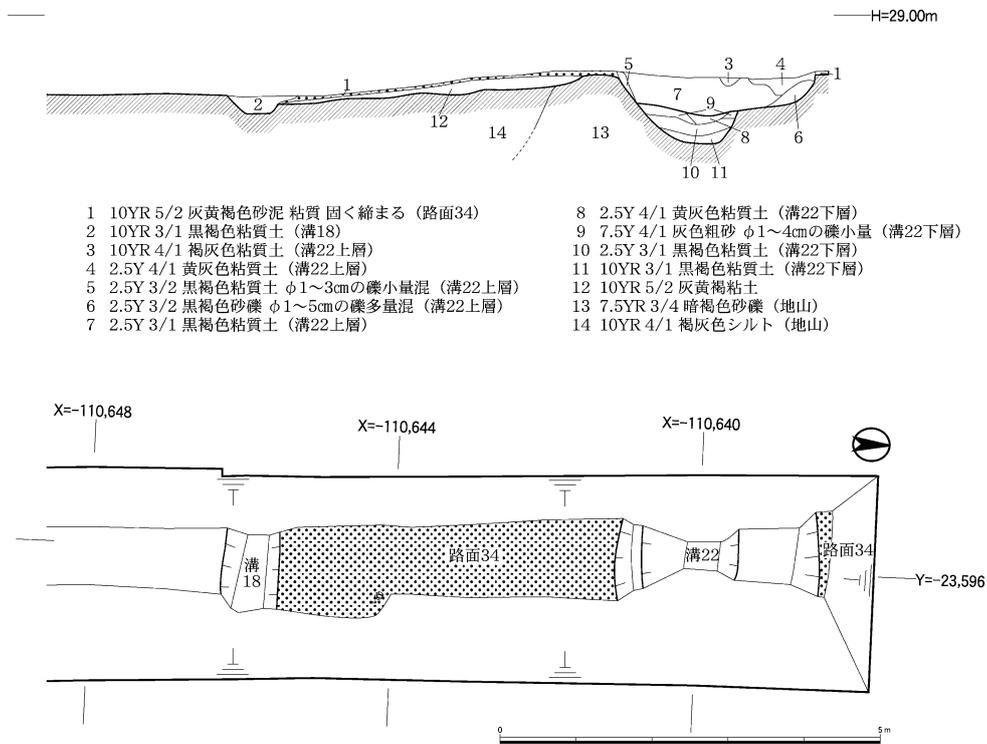


図 28 2A 区路面 34・溝 18・22 実測図 (1 : 100)

層である。

溝 19 (図 29) 溝 28 の南で検出した東西溝である。幅 0.8 m、深さ 0.07 m。埋土は 2 層に分かれ、上層は褐色砂泥、下層は黒褐色砂泥である。溝内からは平安時代前期の土師器皿片と木片、馬骨片などが出土している。

土壌 21 (図 29) 溝 19 の北に近接して検出した。東西 0.7 m、南北 0.8 m の楕円形で、深さ 0.05 m。埋土は黒褐色砂泥層である。土壌内から平安時代前期の土師器、馬骨片、木片が出土している。

鎌倉時代

溝 22 (図 28、図版 7) 路面 34 上面で検出した東西溝である。幅 2.5 m、深さ 0.9 m。埋土は上層と下層に分かれる。埋土の上層からは鎌倉時代前半の土師器皿が出土している。また、下層からは曲物、建築部材などの木製品が出土している。

江戸時代後半

石敷き 1 調査区の北端から溝 2・3 の北で検出した。規模は南北 9.4 m 東西は 1.2 m で、さらに調査区外に延びる様相を呈していた。径 0.02 ~ 0.04 m の小石で、堅固にたたき締められた状態であった。小石の間には近世の染付陶器片も混在していた。石敷きの性格については不明である。

溝 2・3 いずれも東西方向の溝で幅 0.3 m、深さ 0.02 ~ 0.03 m。埋土は黒黄褐色砂泥層。溝内に平瓦と扁平な石を一行に並べ据えている。瓦は平安時代の平瓦を転用している。いずれも調査区外に延びる。石敷き 1 と関連する溝とみられる。

耕作溝 (溝 7 ~ 11) いずれも東西方向の溝である。幅 0.5 ~ 0.85 m で、深さ 0.08 ~ 0.11 m である。埋土は灰黄褐色砂泥、黄灰色砂泥、暗褐色砂泥である。

2) 2B 区の遺構 (図 38、図版 6・8)

平安時代前期

洲浜 9 (図 30、図版 6・8) 2B 区の北端で検出した池の汀に形成された洲浜である。西に緩く傾斜している砂礫層の上面に暗オリーブ褐色粘土層が貼り付けられ、さらに上に 0.01 ~ 0.03 m の小礫を密に敷き詰めている。小礫間には土師器、須恵器、緑釉陶器などの土器片、瓦片や獣骨片、木片が散在していた。礫敷きの幅は南北 9 m。直上には厚さ約 0.2 m の腐植土層が堆積する。腐植土層からは木片の他にエノキの小枝や桃、胡桃、無患子などの種実がみられた。腐植土層は、ほぼ水平堆積で上面の標高は 27.7 m である。

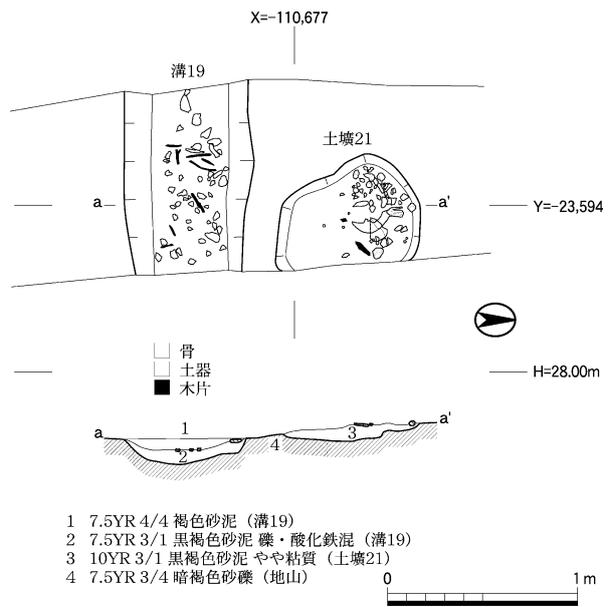


図 29 2A 区溝 19・土壌 21 実測図 (1 : 40)



图30 2B区洲浜9実測図(1:50)

杭列 13 (図 30) 洲浜 9 の北約 2.5 m に北東から南西方向の杭列である。杭穴径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.4 ~ 0.45 m と深い。埋土は褐色粗砂層。ほぼ 0.3 m 間隔で 2 本一対で並ぶ。地山の流路方向と同じである。池に伴う護岸の可能性が高い。

土壙 32 (図 30) 洲浜 9 に北接して検出した。南北 0.6 m、東西 0.72 m の楕円形。深さ 0.1 m。埋土は灰黄褐色砂泥層。土壙内から平安時代前期の土師器皿片、木片が出土している。

土壙 33 洲浜 9 に南接して検出した。南北 0.2 m、東西 0.4 m の楕円形。深さ 0.1 m。埋土は灰黄褐色砂泥層。土壙内から平安時代前期の土師器片、須恵器片などが出土している。

洲浜 10 (図 31) 2B 区の南半で検出した洲浜である。洲浜は緩やかに西に傾き、地山上面に拳大の礫を粘土で固定している。礫敷きの幅は 4 m 以上。直上には厚さ 0.2 m の腐植土層が堆積する。

池 12 洲浜 10 の南から 2B 区南端の拡張区までの南北約 30 m にわたる落ち込み。ここに腐植土層が堆積する。腐植土層の厚さは 0.2 ~ 0.3 m。2B 拡張区では洲浜 9・10 の対岸とみられる肩部を確認している。洲浜 10 では腐植土層上面の標高は 27.6 m、拡張区では 27.55 m と、ほぼ水平である。

平安時代後期

整地層 11 (図 32、図版 8) 2B 区南端で検出した。北側は中世の遺物包含層に削平を受けているが、残存規模は南北 11.4 m 以上で、さらに調査区外の南に延びる。厚さ 0.2 ~ 0.3 m。小礫を含む黄褐色粗砂層と平瓦片で突き固められていた。土層内には平安時代後期の土師器皿 (図 46 - 39・40) が含まれていた。

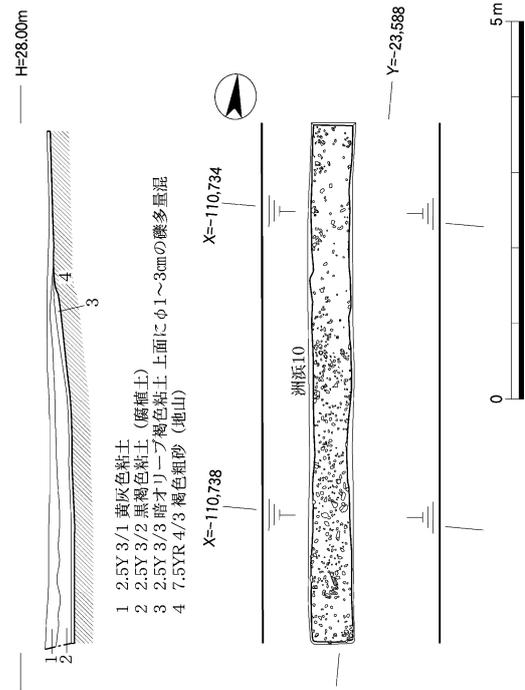


図 31 2B 区洲浜 10 実測図 (1 : 100)

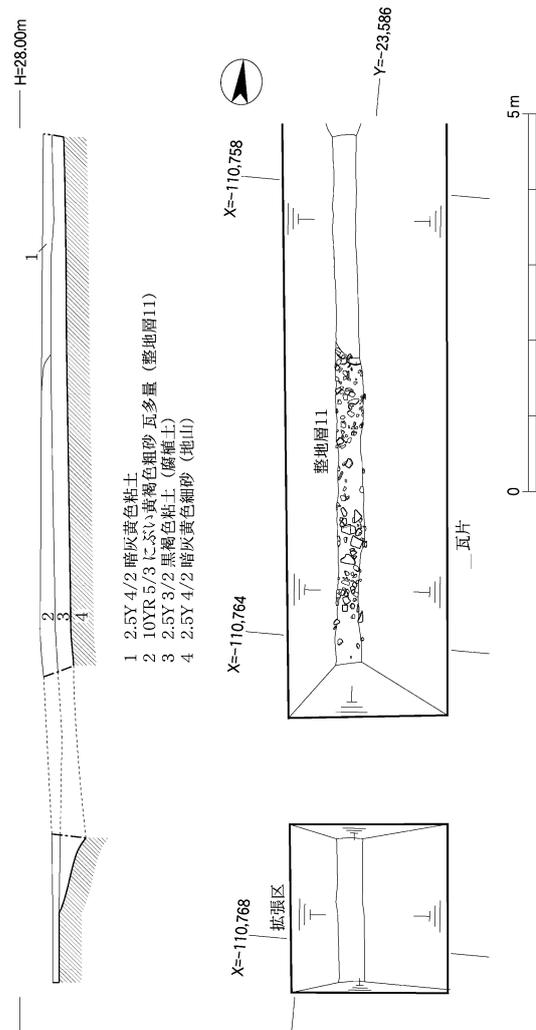


図 32 2B 区整地層 11 実測図 (1 : 100)

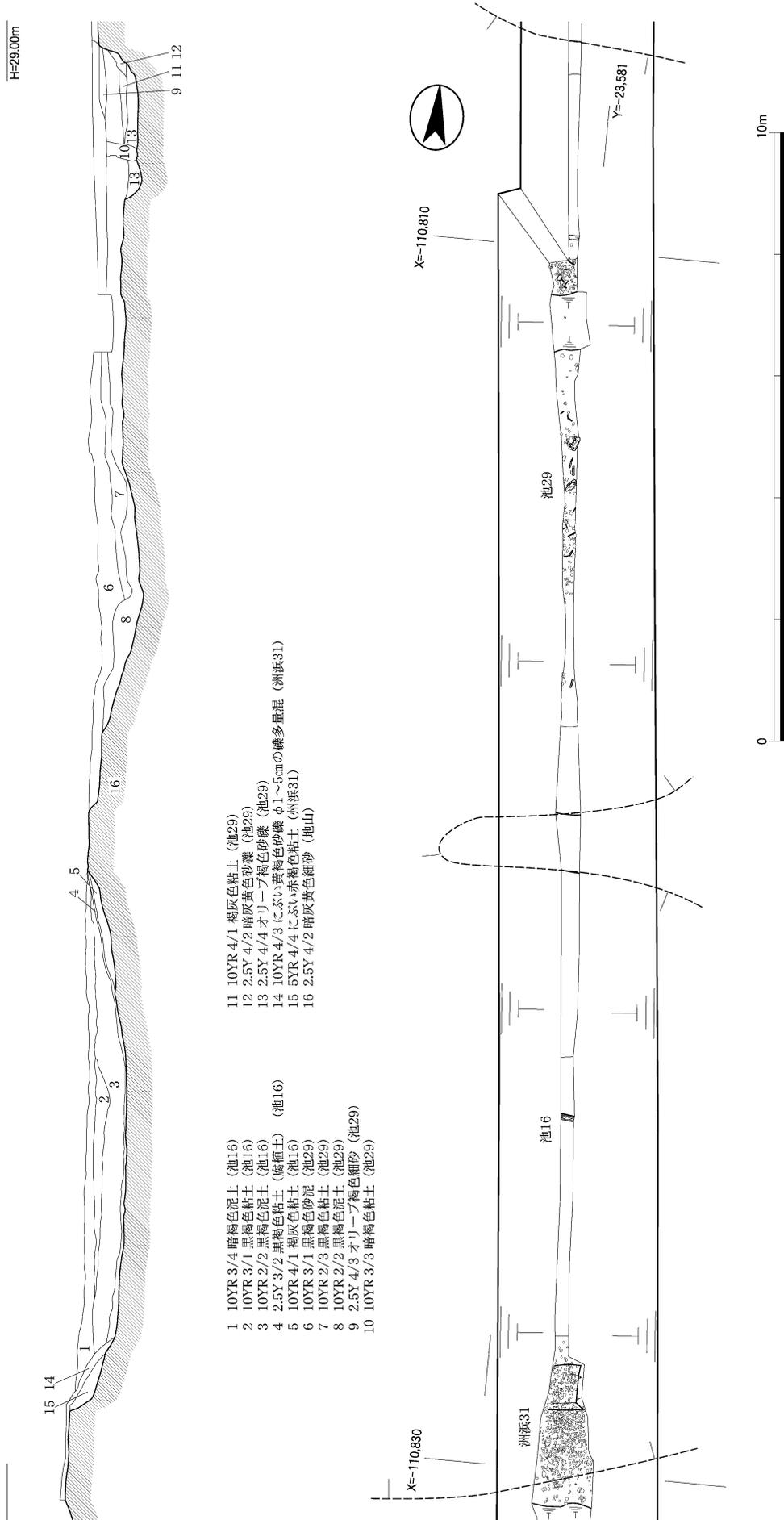


図 33 3A区池16・29・洲浜31実測図(1:100)

(3) 3区の遺構(図39、図版9～11)

検出した遺構の総数は88である。遺構には土壇、溝、洲浜、池がある。3A区の第2面では平安時代前期の洲浜と池を、第1面では江戸時代後半以降の土壇・溝を検出した。3B区では耕土直下の黄褐色砂泥層の地山上面で、江戸時代後半以降の溝、土取りとみられる土壇を検出した。調査区全域が五条一坊三町にあたる。

1) 3A区の遺構(図39、図版9・10)

平安時代前期

洲浜31(図33、図版10) 調査区南端で検出した。南側は攪乱で削平を受けていたが、南北の幅が約2.5mで東西は調査区外に延びる。北に急傾斜している砂礫層の上面に粘土が貼り付けられ、さらに上に拳大の小礫を密に貼り付けている。

池16・29(図33、図版10) 洲浜31から北に延び、間に南北1m幅の砂礫層の平坦面を挟んで池状堆積を検出した。南側を池16、北側を池29とした。池16は洲浜31から北8.8mで緩やかに上がり、平坦面となる。深さは最深で0.6mである。池29は平坦面から緩やかに下がり北12.5mで急に上がる。深さは0.7～0.8m。池16・29の池状堆積は、いずれも大きく上から3層に分かれる。池16は上から暗褐色泥土、黒褐色粘土、黒褐色泥土である。池16の黒褐色粘土層からは平安時代前期の土師器皿片と銭貨「長年大寶」(初鑄848年)(図47-66)、木片などが出土している。池29は上から黒褐色砂泥層、黒褐色粘土、黒褐色泥土である。池29の黒褐色粘土層からは平安時代前期の土器、瓦、木製品、銭貨「神功開寶」(初鑄765年)(図47-65)などがまとまって出土している。また木製品の中には木簡4点が含まれていた。池16・29は出土遺物や堆積土が類似していることから同一の池とみられ、間の平坦面は池の張り出し部と考えられる。池の規模は洲浜31から池29の北対岸までは南北23.5mである。

平安時代後期

整地層32 調査区北端と北の拡張部で検出した。厚さ0.2～0.3m。小礫を含む黄褐色粗砂層と瓦片で突き固められていた。土層内には平安時代後期の土師器皿が含まれていた。現道路を挟んで2B区南端で検出した整地層11と同一の整地層とみられる。

江戸時代後半以降

耕作溝(溝6・8・13) 調査区南半の第1面で検出した。いずれも耕作に伴う東西溝で、調査区外の東西に延びる。溝6は幅0.3m、深さ0.1m。埋土は黄褐色砂泥層。溝8は幅0.15m、深さ0.1m。埋土は黒褐色砂泥層。溝13は幅0.7m、深さ0.1m。埋土は黒褐色砂泥層である。

2) 3B区の遺構(図40、図版11)

江戸時代後半以降

耕作溝(溝1～3・23) 調査区北半では溝1～3・23を検出した。いずれも耕作に伴う東西溝で、

調査区外の東西に延びる。溝 1 は南肩のみの検出で幅 0.3 m 以上、深さ 0.2 m。埋土は黄褐色砂泥層。溝 2 は幅 0.25 m、深さ 0.2 m。埋土は暗褐色砂泥層。溝 3 は幅 0.8 m、深さ 0.1 m。埋土は褐色砂泥層。溝 23 は幅 0.6 m、深さ 0.3 m。埋土は黄褐色砂泥層。

土取り穴（土壌 10・11・27・35） 調査区中央部から南半で検出した。規模は南北幅 2.8～3.8 m で、深さは 0.3～0.7 m である。埋土は土壌 10 が黒褐色砂泥層で、土壌 11 は暗褐色砂泥層、土壌 27 は灰黄褐色砂泥層、土壌 35 は暗褐色砂礫層である。

（4） 4 区の遺構（図 41・42、図版 11～13）

検出した遺構総数は 174 である。遺構には柱穴、溝、土壌、路面、礫敷きなどがある。時期は平安時代後期から江戸時代後期である。時期別にみると平安時代後期には溝、土壌、柱穴、路面、側溝などがある。鎌倉時代から室町時代は溝、土壌などがある。江戸時代後期は溝、土壌などがある。調査区全域は五条一坊四町にあたる。

1) 4A 区の遺構（図 41、図版 11・12）

平安時代後期

溝 55 調査区北端で検出した東西方向の溝。幅 1.2 m、深さ 0.15 m。東側は中世の土壌により削平をうけている。埋土は黒褐色砂泥層。

溝 58（図 34） 溝 55 の南 1.5 m で検出した。幅 0.5 m、深さ 0.06 m。西側は攪乱により大きく削平を受けていたが、東側は溝の基底部分が残存していた。また西壁にもわずかに痕跡が確認できた。溝内から平安時代後期の土師器皿（図 46 - 41～44）がまとまって出土した。

土壌 15（図 34、図版 12） 調査区南半で検出した。東西 0.6 m、南北 0.7 m の楕円形である。深さ 0.3 m。埋土は黒褐色砂泥層。土壌内に長さ 0.25 m、幅 0.2 m の石を立てて据え、底部には拳大の石が敷かれていた。

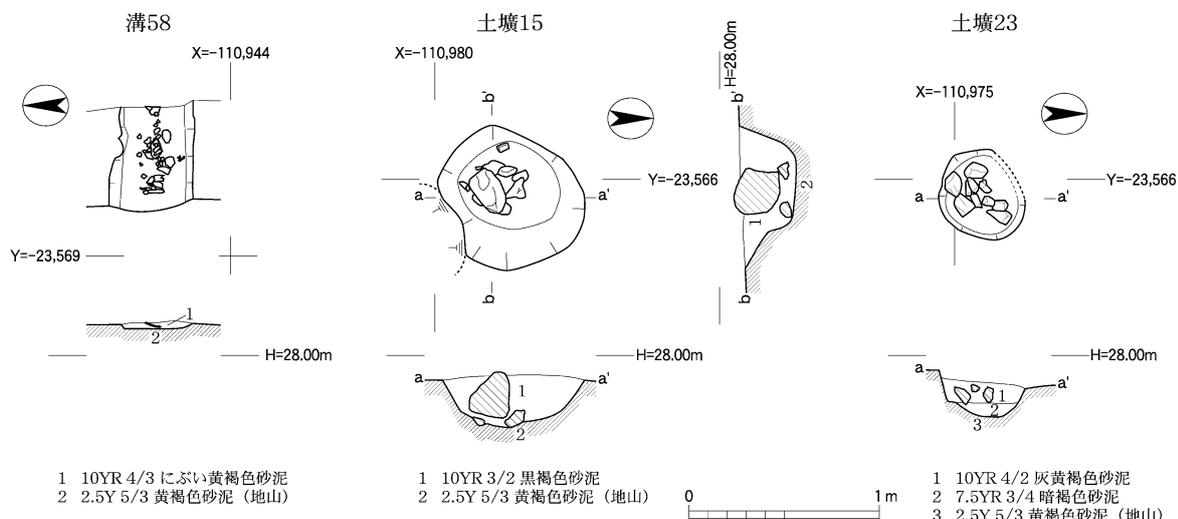


図 34 4A 区溝 58・土壌 15・23 実測図（1：40）

土壙 23 (図 34、図版 12) 土壙 15 の北約 5 m に位置する。径 0.5 m の円形。深さ 0.2 m。埋土は褐灰色砂泥層。土壙内は拳大の礫が詰められていた。

鎌倉時代から室町時代

土取り穴 (土壙 1・22・42) 土壙 1 は調査区南端の東壁沿いで検出した。南北 1.8 m 以上、東西 0.7 m 以上。深さ 0.18 m。埋土は暗灰黄色砂泥層。調査区外に延びる。土壙 22 は調査区南半の西壁沿いで検出した。南北 1.8 m、東西 1.2 m 以上。深さ 0.25 m。埋土は褐灰色砂泥層。調査区外の西に延びる。土壙 42 は調査区北半で検出した。南北 2.8 m、東西 1.7 m 以上、深さ 0.5 m で、調査区外にさらに延びる。埋土は褐灰色砂泥層。

江戸時代後半以降

耕作溝 (溝 2・26・28・29・34・61～63・76) いずれも東西方向の小溝である。規模は幅 0.1～0.2 m、深さ 0.02～0.1 m。埋土は暗灰色砂泥層、黒褐色砂泥層のいずれかである。西側が攪乱により削平を受けているものが多い。各溝間の間隔は不揃いである。

2) 4 B 区の遺構 (図 42、図版 12・13)

平安時代後期

路面 79 (図 35、図版 13) 調査区南端で検出した五条大路の道路面。攪乱を受けながらも断続して南北幅 3.6 m 程を確認した。さらに調査区外に延びる。黄褐色砂泥層の地山直上に径 0.01～0.08 m の小礫と瓦片が密に敷かれていた。五条大路の路面と推定される。

溝 45 路面 79 の北で検出した東西溝。溝幅は 0.9 m、深さ 0.2 m。埋土は褐灰色砂泥層。さらに調査区外に延びる様相であった。五条大路の北側溝とみられる。

土壙 12 調査区のほぼ中央部の西壁沿いで検出した。南北 2.5 m、東西は不明。深さ 0.8 m。埋土は 2 層に分かれ、上層が黒褐色混礫砂泥、下層は灰黄褐色砂泥。地山の黄褐色砂泥層と下の礫層を掘り込んでおり、検出状態から一辺が 2.5 m の方形の井戸掘形の東辺とみられる。

鎌倉時代から室町時代

石敷き 80 調査区南半で検出した。南北約 7 m にわたり拳大の礫や瓦片が粗く敷き詰められていた。礫間からは鎌倉時代から室町時代の土師器皿片や輸入陶磁器、瓦片などが出土している。調査区外に延びる様相であった。

土取り穴 (土壙 51・52) 調査区北端で検出した土取り穴とみられる土壙である。土壙 51 は南

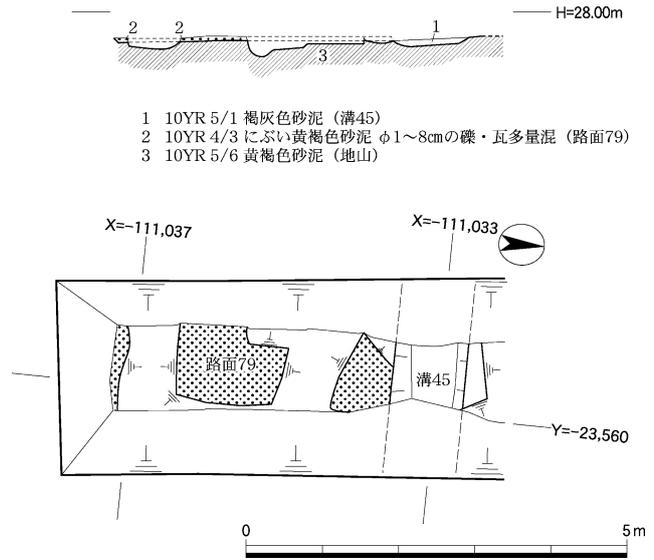


図 35 4B区溝 45・路面 79 実測図 (1:100)

北 1 m、東西 0.9 m 以上。深さ 0.35 m。埋土は灰黄褐色砂泥層。土壙 52 は南北 1 m、東西 1 m 以上。深さ 0.35 m。埋土は灰黄褐色砂泥層。いずれも平面形状が不定形で調査区外の西に延びる。土壙内からは鎌倉時代の土師器皿片が出土している。

溝 72 土壙 52 の南で検出した東西方向の溝である。溝幅 0.7 m、深さ 0.04 m。埋土は灰黄褐色砂泥層。調査区外の東西に延びる。

江戸時代後半以降

耕作溝（溝 5・13～16・20・24・31・32・44）いずれも南北方向の溝である。幅 0.2～0.4 m、深さ 0.2～0.6 m。埋土は灰褐色砂泥、黄褐色砂泥である。溝間の間隔は 0.5～1.0 m である。耕作に関連する溝とみられる。

耕作溝（溝 8・9・11・21・25・26・29）いずれも東西方向の溝である。幅 0.2～0.4 m、深さ 0.2～0.6 m。埋土は灰褐色砂泥、黄褐色砂泥である。いずれも調査区外の東西に延び、耕作に関連する溝である。

3) 4C 区の遺構（図 41）

4A 区の北約 24 m にあたる。北端は高辻小路南側溝の推定地である。現地表下 0.8 m で黄褐色砂泥層の地山面で平安時代後期の東西溝と、その東西溝を削平する鎌倉時代の土壙を検出した。

平安時代後期

溝 5（図 36）調査区北端の西壁沿いで検出した。溝幅 0.9 m、深さ 0.2 m。埋土は黒褐色砂泥層。東側は中世の土壙に削平されている。埋土から平安時代後期の土師器皿が出土している。

鎌倉時代

土取り穴（土壙 1）調査区北端で溝 5 と重複して検出した。規模は南北 1 m、東西 1.2 m、深さ 0.6 m で、さらに調査区外の北と東に延びる様相であった。地山の黄褐色砂泥層を掘り込み、砂礫層には達していないことから、砂泥層を採取する土取り穴とみられる。埋土は大きく 2 層に分かれ、上層は灰黄褐色砂泥、下層は褐灰色粘土層である。土壙内からは平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿、輸入陶磁器、軒瓦など（図 46 - 45～53、図 47 - 56・57）が出土している。

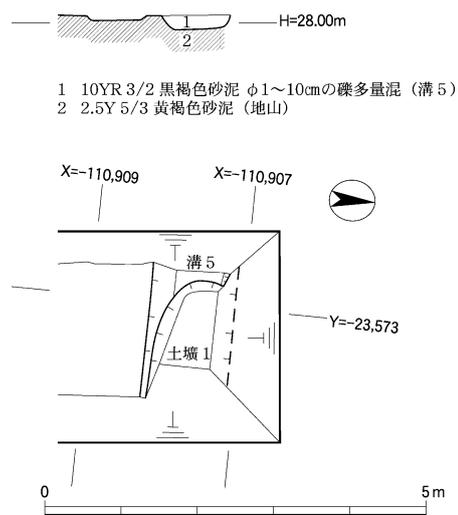


図 36 4C 区溝 5 実測図（1：100）

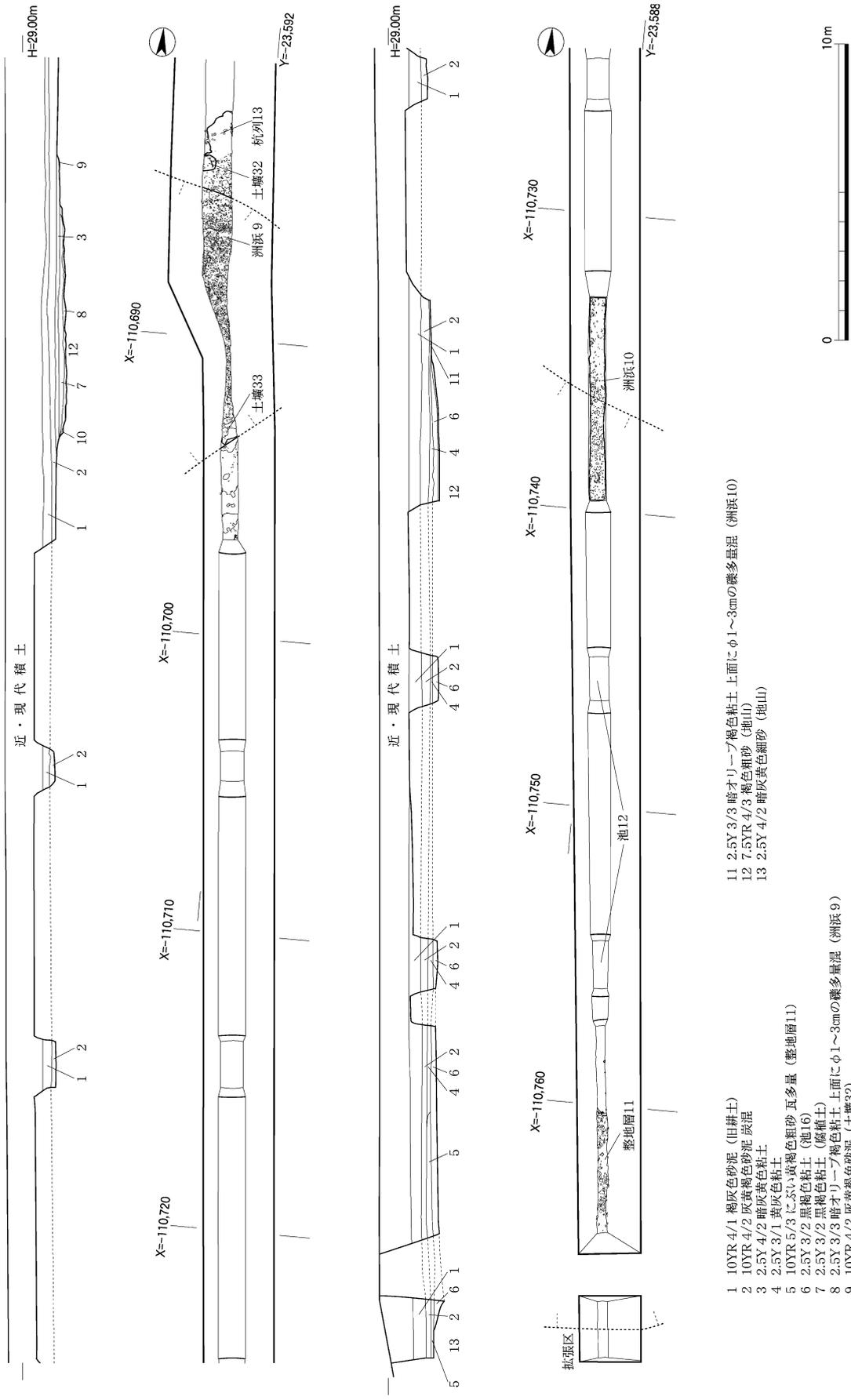
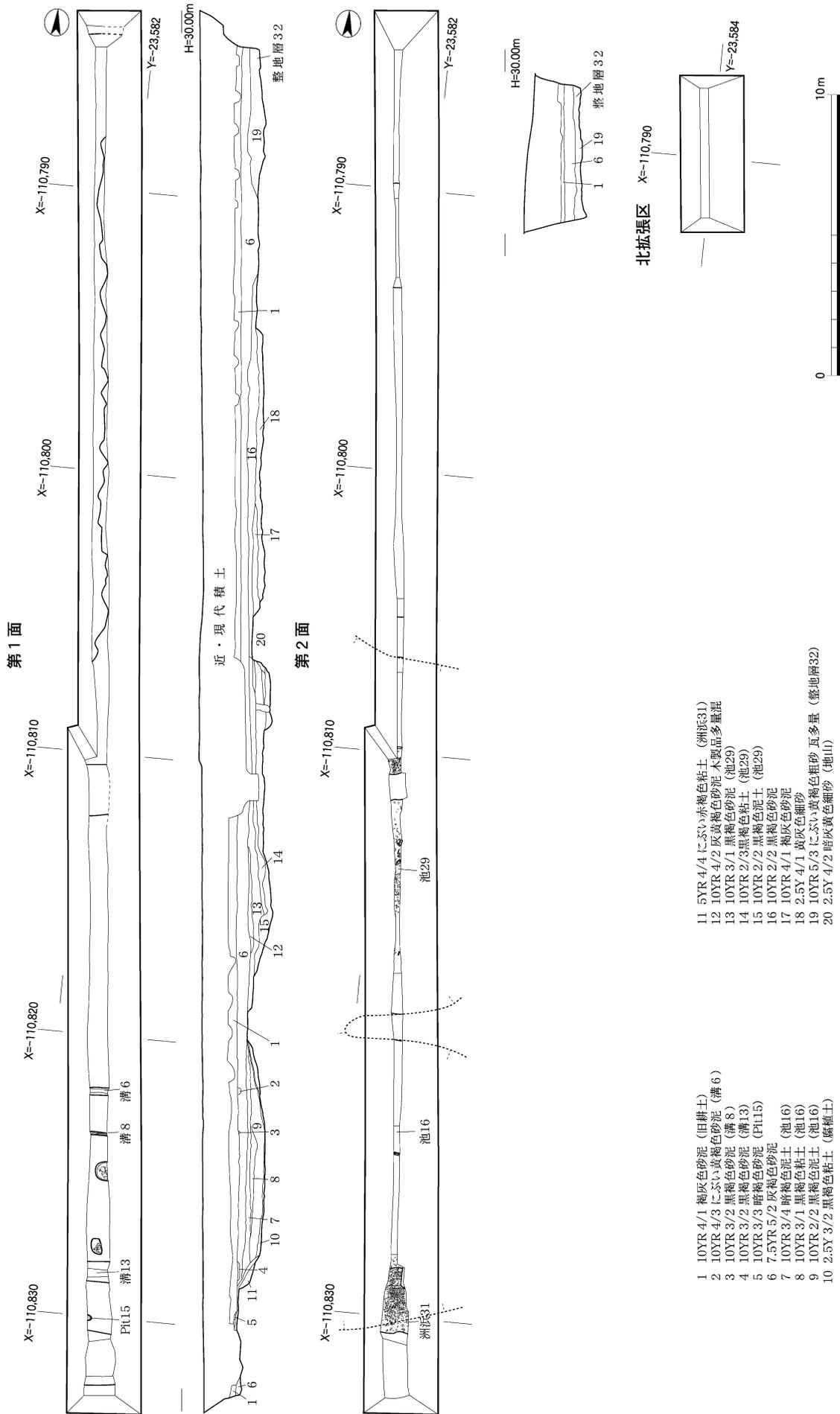


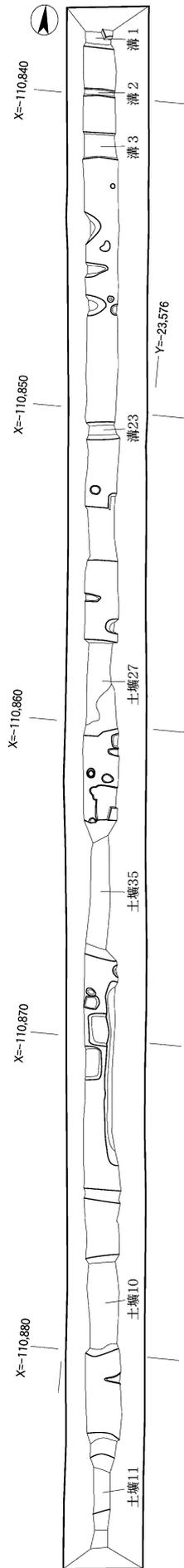
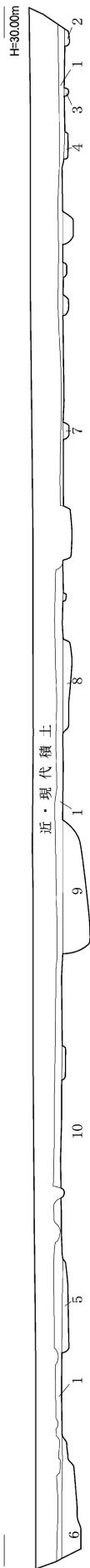
図 38 2B区遺構実測図 (1:200)



- 11 5YR 4/4 にぶい赤褐色粘土 (洲浜31)
- 12 10YR 4/2 灰黄褐色砂泥 木製品多量混
- 13 10YR 3/1 黒褐色砂泥 (池29)
- 14 10YR 2/3 黒褐色粘土 (池29)
- 15 10YR 2/2 黒褐色砂泥 (池29)
- 16 10YR 4/1 黒褐色砂泥
- 17 10YR 4/1 褐色砂泥
- 18 2.5Y 4/1 黄灰色細砂
- 19 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂 瓦多量 (整地層32)
- 20 2.5Y 4/2 暗灰黄色細砂 (地11)

- 1 10YR 4/1 褐色砂泥 (旧耕土)
- 2 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝6)
- 3 10YR 3/2 黒褐色砂泥 (溝8)
- 4 10YR 3/2 黒褐色砂泥 (溝13)
- 5 10YR 3/3 暗褐色砂泥 (Pt115)
- 6 7.5YR 5/2 灰褐色砂泥
- 7 10YR 3/4 暗褐色粘土 (池16)
- 8 10YR 3/1 黒褐色粘土 (池16)
- 9 10YR 2/2 黒褐色粘土 (池16)
- 10 2.5Y 3/2 黒褐色粘土 (腐植土)

図 39 3A 区遺構実測図 (1 : 200)



- 1 10YR 4/1 褐灰色砂泥 (旧耕土)
- 2 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝1)
- 3 10YR 4/3 暗褐色砂泥 (溝2)
- 4 10YR 4/4 褐色砂泥 (溝3)
- 5 10YR 3/2 黒褐色砂泥 (土塚10)
- 6 10YR 3/3 暗褐色砂泥 (土塚11)
- 7 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝23)
- 8 10YR 4/2 灰黄褐色砂泥 (土塚27)
- 9 10YR 3/3 暗褐色砂泥 (土塚35)
- 10 10YR 6/2 灰黄褐色砂泥 (地山)



図40 3B区遺構実測図 (1:200)

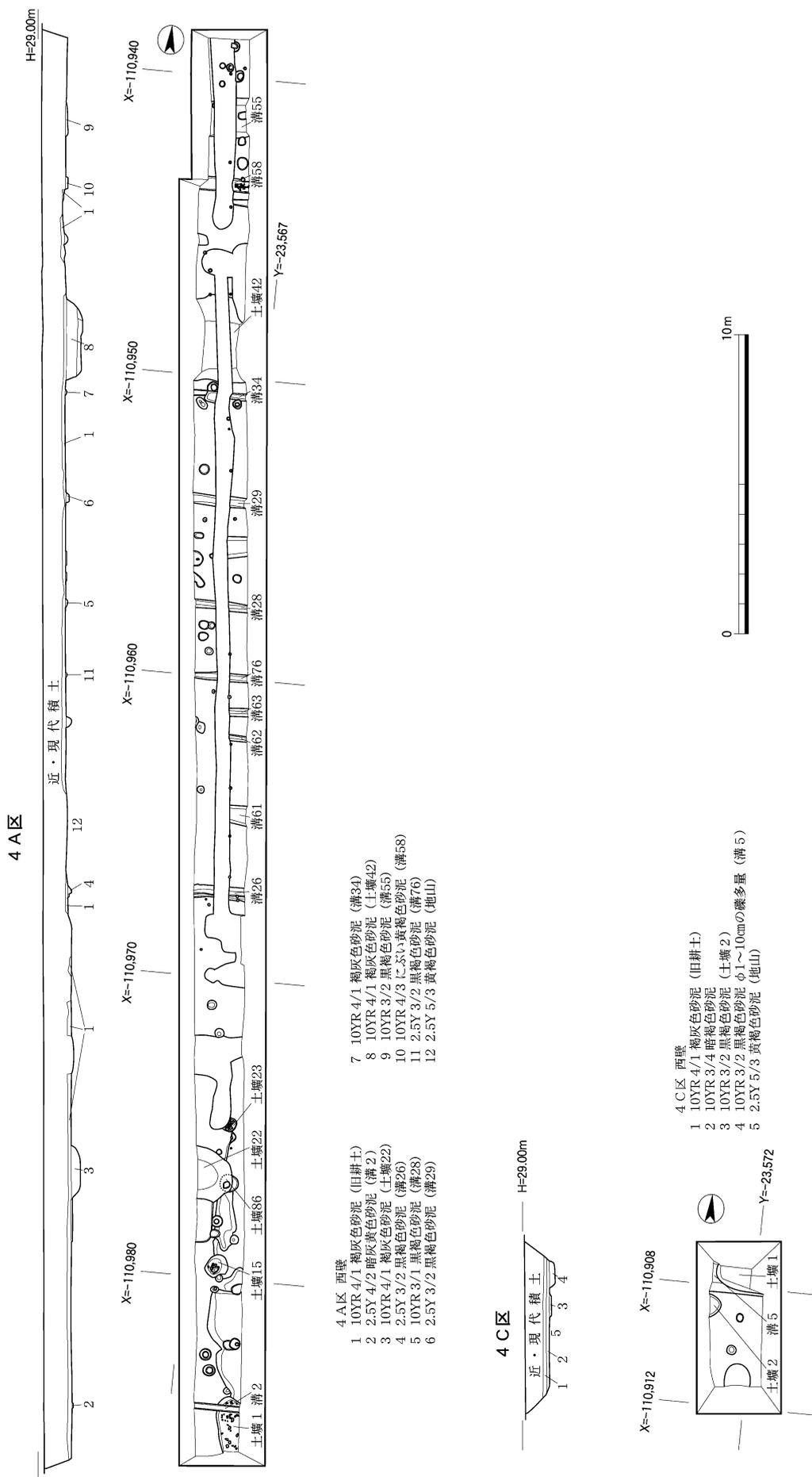


図 41 4A区・4C区遺構実測図 (1:200)

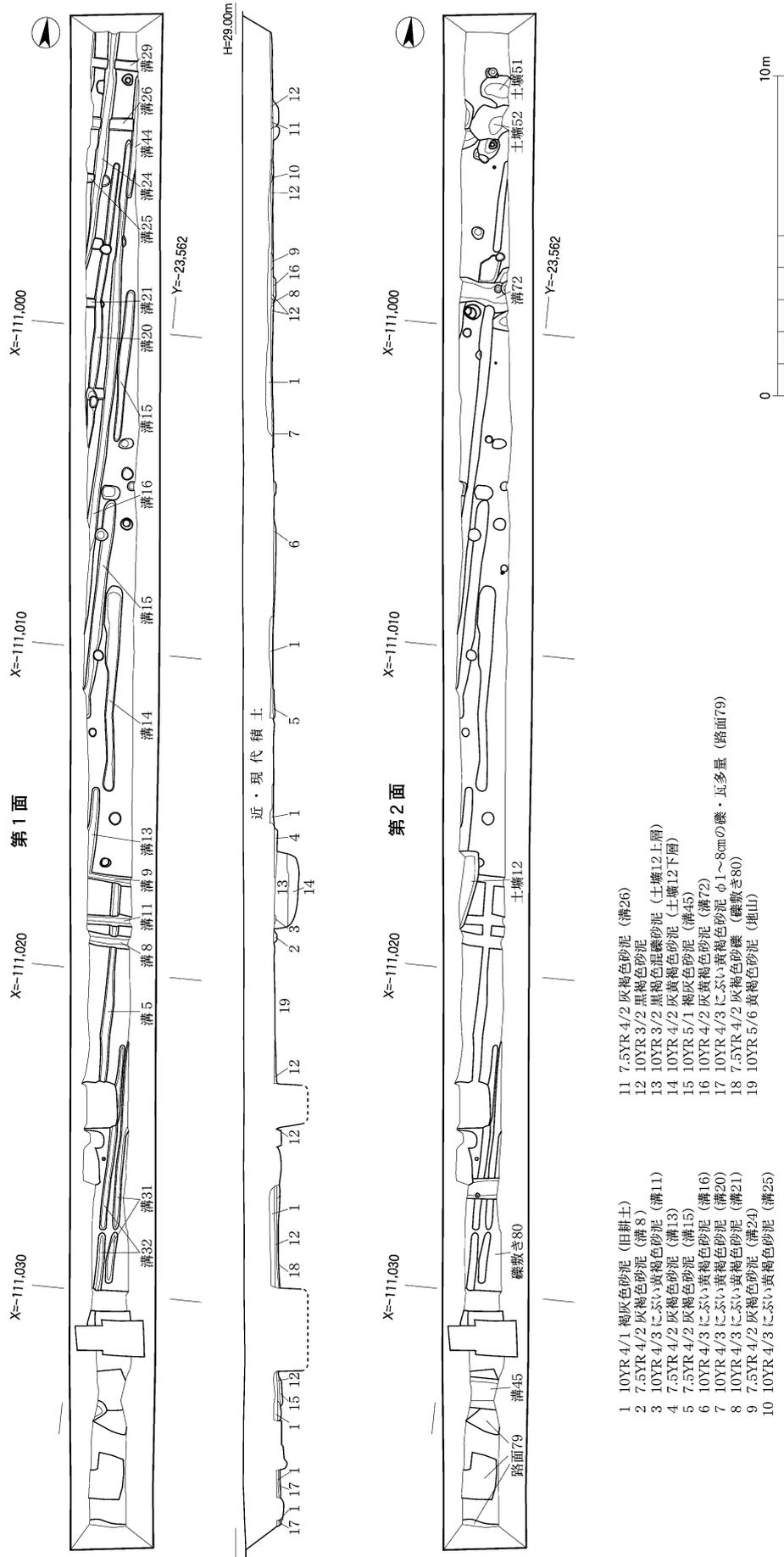


図 42 4B区遺構実測図 (1:200)

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR 4/1 褐灰色砂泥 (旧耕土) 2 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 8) 3 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 11) 4 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 13) 5 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 15) 6 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 16) 7 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 20) 8 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 21) 9 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 24) 10 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 25) | <ul style="list-style-type: none"> 11 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 26) 12 10YR 3/2 黒褐色砂泥 13 10YR 3/2 黒褐色混礫砂泥 (土層 12 上層) 14 10YR 4/2 灰黄褐色砂泥 (土層 12 下層) 15 10YR 5/1 褐灰色砂泥 (溝 45) 16 10YR 4/2 灰黄褐色砂泥 (溝 72) 17 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝 79) 18 7.5YR 4/2 灰褐色砂泥 (溝 80) 19 10YR 5/6 黄褐色砂泥 (地山) |
|--|--|

3. 遺 物

出土遺物は整理箱 92 箱である。土器類が大半を占め、他に瓦類と木製品、金属製品（主に銭貨）がある。遺物の時期は平安時代前期から江戸時代後半であり、そのまとまりとしては大きく平安時代前期、平安時代後期、鎌倉時代の 3 時期に分けることができる。

(1) 土器類

出土した土器類には平安時代前期から江戸時代後半のものがある。量的には平安時代前期のものが最も多く、平安時代後期、鎌倉時代のものがそれに次ぐ。平安時代前期の土器類は三町内の池 29 からまとめて多数出土している。また綾小路路面 34・南側溝 18 や二町内の洲浜 9 から出土している。これらの土器群が属する時期は京都 I 期中～新が主体であるが、II 期中の遺物もわずかではあるがみとめられることから、平安京造営時の 8 世紀末から 9 世紀中頃までで 10 世紀には至らない。その後については平安時代後期から鎌倉時代前半の土器群が五条坊門小路付近の整地層 11・32 や四町内の溝 58、土壇などから出土しており、この地域が平安時代後期以降に再開発が行われたことを示している。以下、時代順と遺構別に主要な出土遺物について概述する。なお、土器の時期編年については小森俊寛編「京から出土する土器の編年的研究」に準拠する⁴⁾。

1) 平安時代前期

平安時代前期の土器類には池や洲浜、溝、路面から出土しているが、集中して出土したのは 3A 区の池 29 からで、土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器など 8 世紀末から 9 世紀中頃

表9 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、 軒瓦、銭貨、木製品		土師器 23 点、須恵器 11 点、緑釉 陶器 1 点、軒平瓦 1 点、銭貨 2 点、木製品 7 点		
平安時代中期	土師器、黒色土器、軒瓦		黒色土器 2 点、軒平瓦 1 点、刻 印瓦 1 点		
平安時代後期	土師器、須恵器、輸入陶器		土師器 6 点、軒丸瓦 2 点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、輸入陶器、 瓦器		土師器 6 点、須恵器 1 点、白磁 3 点		
室町時代	土師器				
江戸時代後半	染付、陶磁器、陶器				
合 計		98箱	67点 (6 箱)	77箱	15箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 6 箱多くなっている。

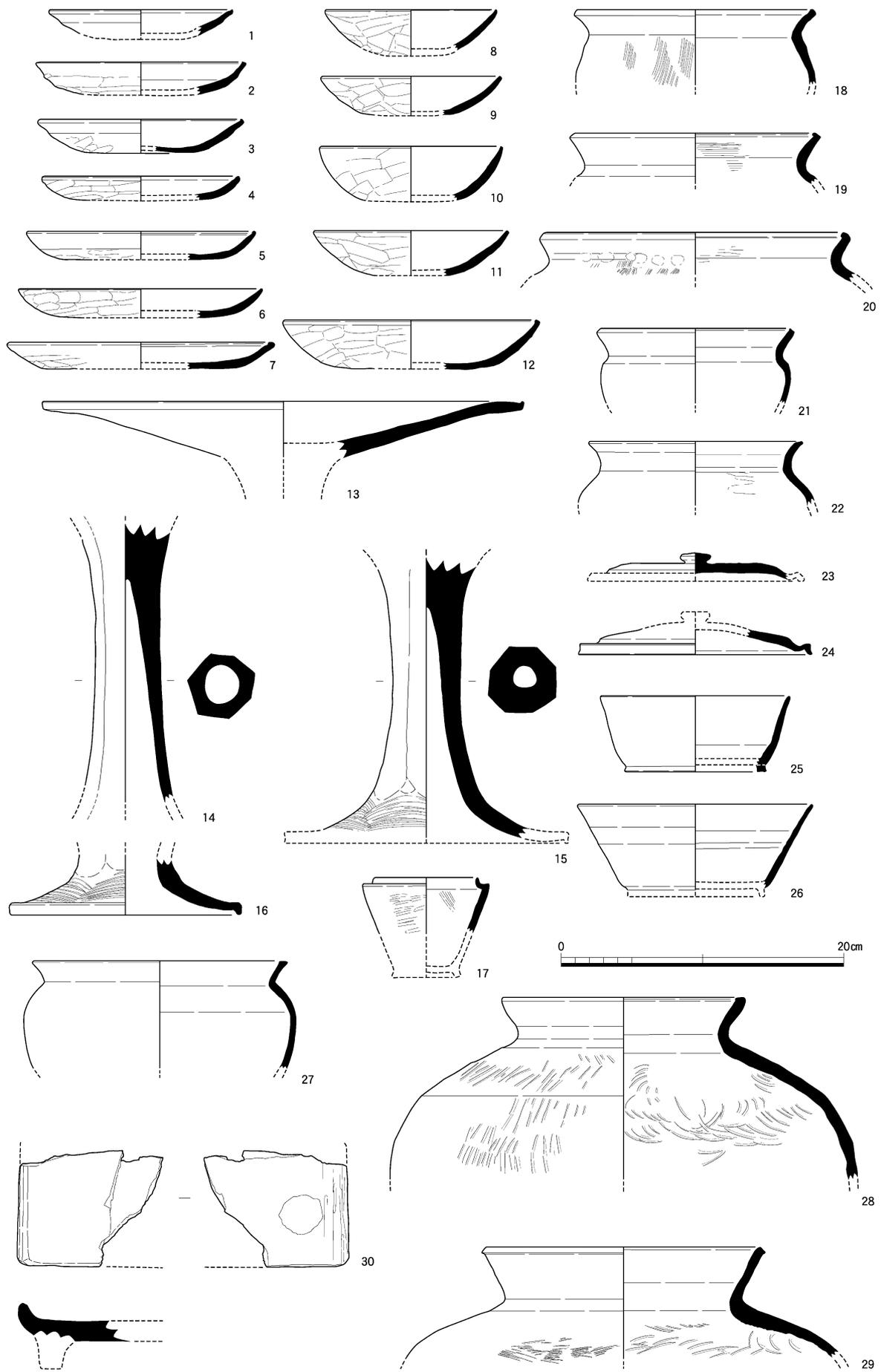


图 43 3A 区池 29 出土土器实测图 (1 : 4)

の土器類がまとまって多量に出土した。池 29 から出土した土器類については破片数の統計を行い、数量的な傾向や器種構成の比率を表 10 に作成した。

池 29 出土遺物（図 43・44、図版 14、表 10）

出土した土器類は総破片数 2,797 片あり、その内容は土師器 88.5%、黒色土器 0.4%、須恵器 10.7%、緑釉陶器 0.2%、灰釉陶器 0.2%である。機能別にみると椀・皿などの供膳具が多く、供膳具 84%、貯蔵具 1%、煮沸具 1%となっている。供膳具のうち土師器が 80%と大半を占めている。椀・皿に次いで高杯も比較的多い。土師器以外では須恵器が 4%で、緑釉陶器や灰釉陶器は 1%満たない。土器類の時期は京都 I 期中～新にあたる 8 世紀末から 9 世紀中頃の幅をもつ。

土師器杯 A（1～3・12） 1 は口径 13.0 cm、器高 2.1 cm。2・3 は口径 14 cm 前後、器高 2 cm 前後。12 は口径 18.2 cm、器高 3.5 cm と大型のもので、外面のヘラケズリも丁寧である。

土師器皿 A（4～7） 4 は口径 14.0 cm、器高 1.8 cm。5～7 は 5 は口径 15.0 cm、器高 2.0 cm。6 は口径 17.2 cm、器高 2.1 cm。7 は口径 18 cm、器高 1.8 cm で、いずれも外面のヘラケズリが丁寧である。

土師器椀 A（8～11） 6～11 は口径 12.0～13.8 cm、器高 2.8～3.8 cm である。いずれも体部外面には丁寧なヘラケズリが施され、内面はナデで調整している。

土師器高杯（13～16） 出土量は比較的多いが、杯部から裾部まで全体のわかるものはない。判明できる軸部の大半が七面に面取り（14）されているが、八面のもの（15）もある。杯部外面はヘラケズリが多いが、ミガキのもの（13）もある。

土師器壺 E（17） 壺の出土量は少ない。17 は口径 7.2 cm、器高は残存部 4.0 cm で体部外面はヘラミガキを施し、他はナデ調整である。

土師器甕（18～20） 甕は出土量も多く口縁形態も多様であるが、形状のわかるものが少ない。18 は口径 16.6 cm、器高は残存部 5.4 cm。19 は口径 17.0 cm、器高は残存部 3.6 cm。20 は口径 21.0 cm、器高は残存部 3.5 cm とやや大型である。

黒色土器（21・22） 21 は口径 13.4 cm、器高は残存部 5.3 cm、22 は口径 15.2 cm、器高は残存部 4.5 cm。いずれも内面を黒色化したもので、ハケメ調整後、粗いヘラミガキを施している。

須恵器杯蓋（23・24） 23 は復元口径 15.4 cm、復元器高 2.0 cm。24 は口径 16.6 cm、器高は残存部 1.7 cm。23 は天井部中央に宝珠つまみが付く。24 のつまみは欠損している。いずれも内面は平滑に磨滅しており墨の痕跡があることから、硯に転用されたとみられる。

須恵器杯 B（25・26） 25 は口径 13.4 cm、器高は 6.5 cm。26 は口径 16.6 cm、器高は残存部 6.5 cm。25 は底部に断面が方形

表 10 池 29 破片統計表

器種	器形	破片数	器種比率	全数量比率
土師器	杯・椀・皿	2217	89.58%	88.5%
	高杯・盤・鉢	23	0.93%	
	甕・釜・鍋	223	9.01%	
	その他	1	0.04%	
	不明	11	0.44%	
	小計	2475	100%	
黒色土器	杯・椀・皿	6	50.00%	0.4%
	甕	6	50.00%	
	その他	0	0.00%	
	不明	0	0.00%	
	小計	12	100%	
須恵器	杯・椀・皿	74	24.83%	10.7%
	壺・瓶	16	5.37%	
	鉢	28	9.40%	
	甕・大型壺	175	58.72%	
	その他	1	0.34%	
	不明	4	1.34%	
小計	298	100%		
緑釉陶器	杯・椀・皿	4	66.67%	0.2%
	壺・瓶	0	0.00%	
	その他	0	0.00%	
	不明	2	33.33%	
	小計	6	100%	
灰釉陶器	杯・椀・皿	4	66.67%	0.2%
	壺・瓶	2	33.33%	
	その他	0	0.00%	
	不明	0	0.00%	
	小計	6	100%	
他	その他・不明	0	-	
総数		2797	100%	100%



図44 3A区池29出土須恵器硯(30)



図45 2A区路面34出土須恵器皿(37)

の輪高台が付く。26は高台が欠損している。

須恵器鉢(27) 口径18.0cm。器高は残存部7.5cm。内湾する肩部に外傾する短い口縁が付く。端部は水平面をなす。

須恵器甕(28・29) 28は口径17.0cm、器高は残存部13.0cm。29は口径19.4cm、器高は残存部7.8cm。いずれも内傾する肩部に外反する口縁部が立ち上がる。外面は28は縦方向の、29は横方向の細かいタタキを施す。内面にはいずれも青海波文の当て具痕跡が残る。

須恵器硯(30) 風字硯である。風字状の粘土板の縁を上方に折り曲げて堤部とする。堤部外面および端面はヘラケズリで面取りし、上面は粗いナデ調整。脚を裏面に貼付け、ヘラケズリ調整で仕上げている。硯面は平滑に磨滅しており、よく使用された痕跡を示している。

2B区洲浜9出土土器(図44、図版14)

洲浜9から土師器椀・皿、須恵器杯、緑釉陶器壺と箸や部材などの木製品や種子も出土した。

土師器椀A(31・32) 31は口径12.0cm、器高2.5cm。32は口径13.0cm、器高3.5cm。いずれも体部外面にはヘラケズリが施され、内面はナデ調整されている。

土師器皿(33) 口径は14.0cm、器高1.9cm。体部外面はヘラケズリを施す。内面はナデ調整である。

須恵器杯(34) 口径は16.2cm、器高5.2cm。平坦な底部外面に断面方形の輪高台が付く。

須恵器壺(35) 体部は卵形。底部は平底で、外面底には糸切り痕が残る。底部径は12.0cm、器高は残存部14.2cmである。

緑釉陶器壺(36) 壺の底部とみられる。平底で体部は球形状に近い。外面はミガキ、内面はナデ調整。外面に緑釉を施釉している。胎土は軟質である。

出土土器の時期は8世紀末から9世紀前半の京都I期中～新に属する。

2A区路面34・溝18出土土器(図45・46、図版14)

須恵器皿(37) 口径は13.5cm、器高2.9cm。体部は斜め上方に延び口縁端部は上につまみあげる。底部外面に断面方形の輪高台が付く。東海系の製品とみられる。路面34の石敷き下から出土している。

須恵器杯(38) 口径は15.2cm、器高5.4cm。体部から口縁部にかけて斜め上方に延びる。底部外面に断面方形の輪高台が付く。溝18から出土した。

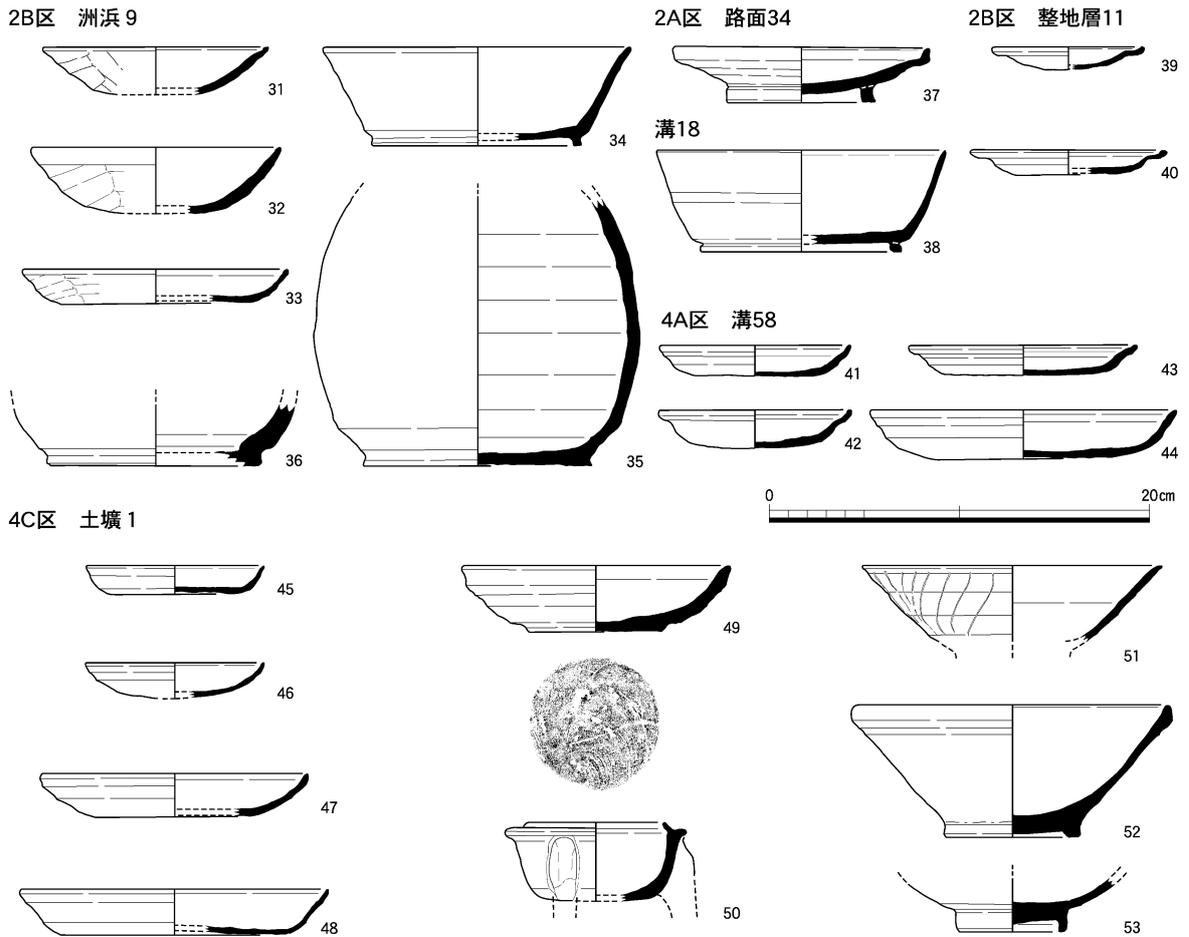


図46 2A区・2B区・4A区・4C区出土土器実測図(1:4)

いずれも時期は8世紀末から9世紀前半の京都I期中～新に属する。

2) 平安時代後期

2B区整地層11出土土器(図46、図版14)

土師器皿(39・40) 39は口径8.0cm、器高1.2cm。40は口径10.4cm、器高1.3cmである。いずれも口縁部が屈曲し、口縁部外面から内面はナデ調整、外面はオサエで、指頭圧痕が残る。11世紀中頃の京都V期中に属する。

4A区溝58出土土器(図46、図版14)

土師器皿(41～44) 41は口径10.0cm、器高1.6cm。42は口径10.1cm、器高3.0cm。41・42は小型の皿である。43は口径12.0cm、器高1.6cmで、中型の皿である。44は口径16.0cm、器高2.6cmの大型の皿である。いずれも口縁部が屈曲し、口縁部外面から内面はナデ調整、外面はオサエの手法を特徴とするが、やや器壁が厚手であり、整地層11出土の土師器皿よりは時期的に後出である。11世紀中頃から後半とみられる京都V期中～新に属する。

3) 鎌倉時代

4C区土壌1出土土器(図46、図版14)

土師器皿(45～49) 45・46は口径9.4cm、器高1.4～1.5cmの小型皿である。47は口径12.0cm、器高2.3cmの中型皿である。48は口径16.2cm、器高2.4cmの大型皿である。いずれも外面は体部上半から口縁部にかけては、ナデによる2段の凹みをもつ。49は口径14.0cm、器高3.5cm。外面から口縁部内面にかけてロクロによるナデ調整で、底部外面は未調整で糸切り痕が残る。

土師器皿は12世紀末から13世紀前半とみられる京都VI期古～中に属する。

土師器羽釜(50) 口径7.0cm、器高は残存部4.3cmの小型羽釜である。三足が付く。口縁部・体部内外面ともにナデ調整、底部外面はケズリを施している。

輸入陶磁器(51～53) 51は口径15.8cm、器高は残存部で4.3cmの白磁椀である。体部・口縁部内外面には灰白色の釉を施している。体部外面には縦方向の櫛目による花文が描かれている。52は口径16.6cm、器高7.0cmのやや大型の白磁椀である。底部外面以外には灰白色の釉が施釉されている。高台は断面方形の輪高台をケズリ出している。口縁端部は玉縁状を呈している。53は白磁椀の高台部である。端部が内傾する高台をケズリ出している。高台部と底部外面以外には灰白色の釉が、施釉されている

(2) 瓦類(図47、図版15)

瓦類は主に2B区整地層11、3A区整地層32、4C区土壌1から出土しており、軒丸瓦、軒平瓦、刻印の平瓦がある。平安時代前期のものと平安時代後期に属するものがある。以下、軒瓦を中心に概説する。

均整唐草文軒平瓦(54) 中心飾りは上向C字形で、唐草文は両側に4回反転する。ゆるい段顎。下顎には深くまでミガキがかかり、縦方向の縄目がみられる。平瓦凹面の布目は荒い。瓦当面右上端に汜傷により珠文が欠損している。出土例は少ないが平安宮・式部省推定地で表面採取された軒平瓦と類似している⁵⁾。2B区整地層11から出土した。平安時代前期。

唐草文軒平瓦(55) 中心飾りは対向C字形で、唐草文が両側に反転するとみられる。外区には珠文が密にめぐる。曲線顎。側面は縦方向のケズリ。3A区整地層32から出土した。平安時代中期。奥海印寺瓦窯産。

巴文軒丸瓦(56) 左巻きの三巴で頭・尾は連結しない。圏線・珠文はない。瓦当部裏面はオサエ。瓦当部側面はケズリ。瓦凸面は縦方向のナデ。4C区土壌1から出土した。平安時代後期。

巴文軒丸瓦(57) 巴文と推定され、圏線・珠文はない。瓦当部裏面はオサエ。瓦当部側面はケズリ。丸瓦部がはずれた痕跡が明瞭に残る。4区土壌1から出土した。平安時代後期。

刻印瓦(58) 平瓦凹面に逆範で「末」銘を押捺する。凹面は布目、凹面は縄タタキ。胎土は砂粒を多く含む。3A区整地層32から出土した。平安時代前期から中期。栗栖野産。

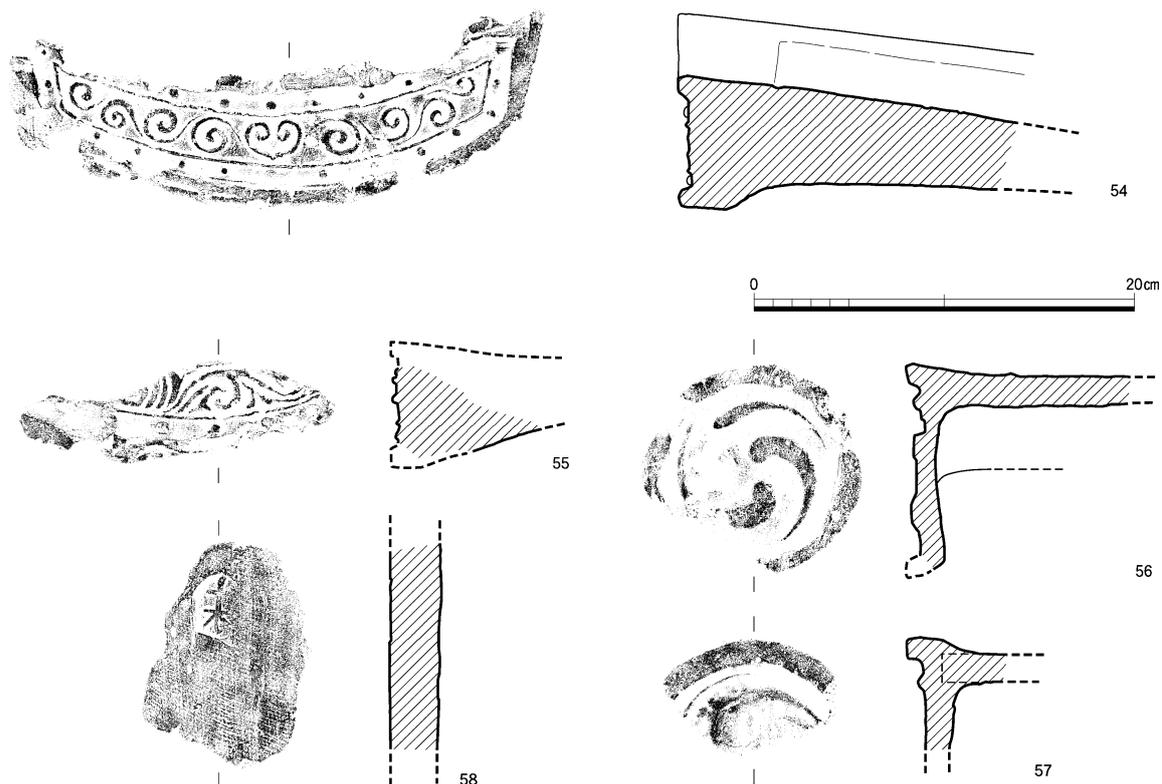


図 47 出土軒瓦・刻印瓦拓影・実測図（1：4）

（3）木製品（図 48、図版 15）

木製品は主に 3A 区池 29 から多く出土した。木製品には曲物、箸、斎串、下駄、部材、木簡などがある。なかでも用途が不明な板材、棒状のもの、木端などの部材が多くを占める⁶⁾。材質はヒノキが多く、次いでスギ、またカシもみられる。以下、主要な木製品について概述する。

円形曲物（59） 径 17.3 cm、高さ 5.0 cm。底板側面に木釘が残存しており、また側板に華皮紐が 2 列 3 段で内側にみられることから、華皮紐と木釘で結合された曲物である。側板の重ね合わせ部の内側には斜め方向に切り目が入れられ、華皮紐で綴合させている。材質はヒノキ。

箸（60） 細く丸棒状に削る。削りは粗雑で荒い。長さ 25.0 cm、厚さ 0.5 cm のほぼ完形である。材質はヒノキとみられる。

斎串（61） 斎串の下半部である。細長い薄板の端を尖らせている。長さ 15 cm 以上、幅 2.0 cm、厚さ 0.5 cm。材質はヒノキ。

木簡（62・63） 62 は上下が折損しており、残存長 20.5 cm、幅 4.0 cm を測る。表面には①「（上欠）□様（道様カ）□（斎）所行米一斛八斗四升」、裏面には②「（上欠）□料米六斗人別二升、」③「功銭一貫□（下欠）」④「（上欠）六合人別二夕」⑤「體一斗八升人別六合 □」との食料・功銭支給に関する記載がある。木簡裏面の②米 2 升は成人男子に対する 1 日分の標準給食料である。④⑤もあわせ考えると、対象者 30 人に一律の条件で一日分の支給を行ったことがわかる⁷⁾。④は上部欠だが、支給量が米の 100 分の 1 で、塩支給とみて間違い⁸⁾ない。一方、③の功銭に関する

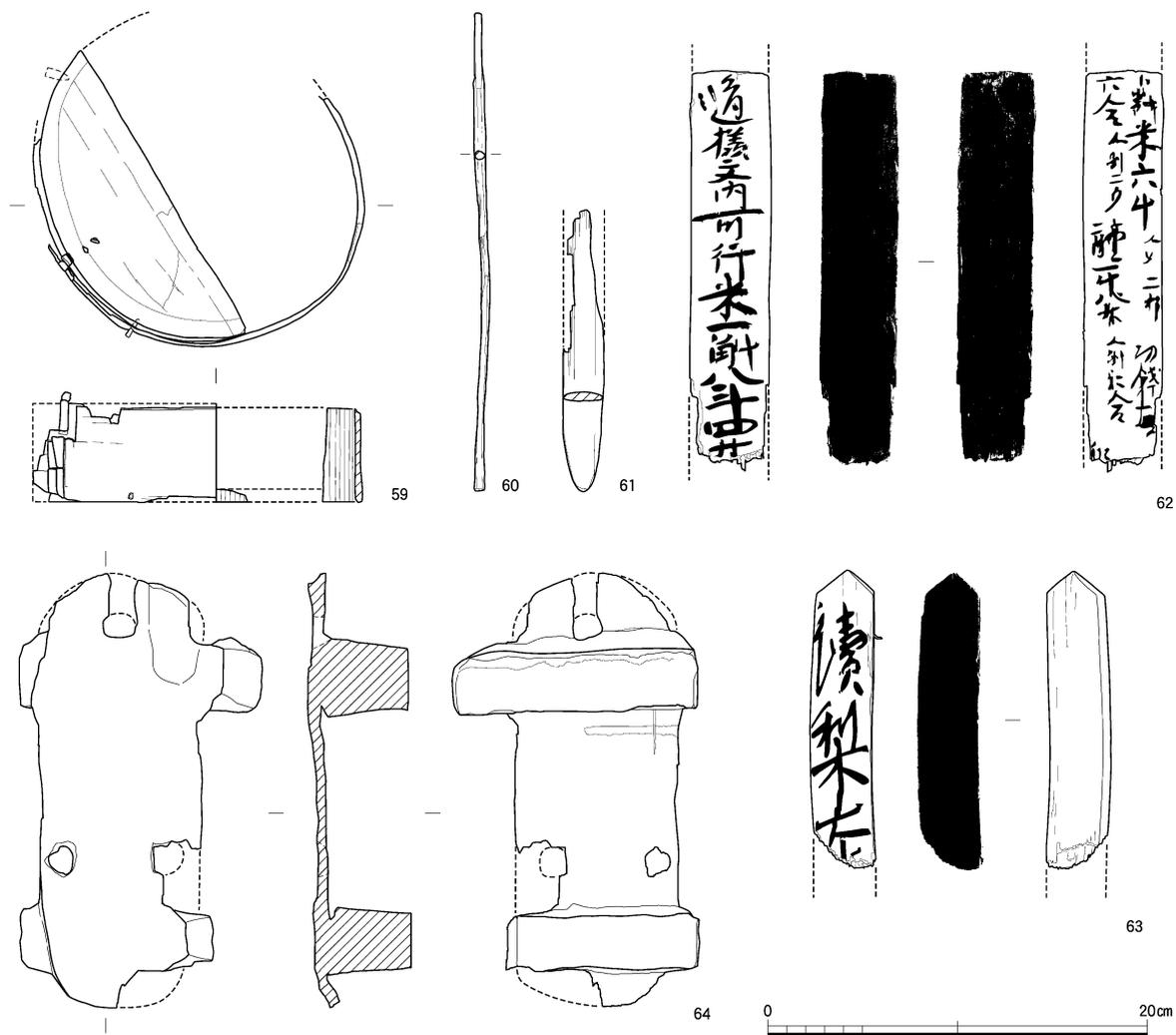


図48 3A区池29出土木製品実測図(1:4)

記載は、総額部分の「一貫」の下が欠けているため、内容を確定できない。ただし、対象者30人、総額1貫以上2貫未満だから、人別支給額は34～66文ということになる。奈良時代の類例と比較して高額であり、インフレーションが頻発した9世紀中頃の社会状況を反映している。「體」(コサケ)は安価な甘酒(一夜酒)である。⁹⁾正倉院文書・木簡などには造営・運輸関係の肉体労働者・技術労働者に対する酒・酒糟の支給事例が散見する。この木簡の場合、対象者が30人と比較的多数だから、造営事業関連と推測される。木簡表面は解釈が難しいが、①「様」が「ためし=木製品の見本」の意だとすると、裏面の記述を造営事業関連とする推測の傍証になる。63は頭端を尖らせ下半部は折損している。残存長は15.5cm、幅3.2cmを測る。積文は「續梨□・・・」で、片面は墨書が剥落している。「つぎなし□・・・」と読める。『延喜式』「内膳司」雑菓樹条に内膳司の園地に續梨百株とみえる。つぎなし(接梨)はつぎ木をした梨の木という。

下駄(64)鼻緒孔(前壺)が隅丸長方形の台の前中央に、後壺は歯の内側にある。歯は下辺幅を台の幅より広く、断面は台形を呈している。台は長さ23.0cm、幅8.5cm、厚さ0.5cm。指の痕跡から、左足用とみられる。材質はヒノキ。

(4) 金属製品 (図 49、図版 15)

神功開寶 (65) 銅銭鑄造で円形方孔の銭貨である。直径 2.5 cm、孔径 0.52 cm、重量 2.6g。表面は右から「神功開寶」と記す。初鑄は天平神護元年 (765)。

長年大寶 (66) 銅銭鑄造で円形方孔の銭貨である。直径 1.9 cm、孔径 0.52 cm、重量 1.3g。表面に右から「長年大寶」と記す。初鑄は嘉祥元年 (848)。

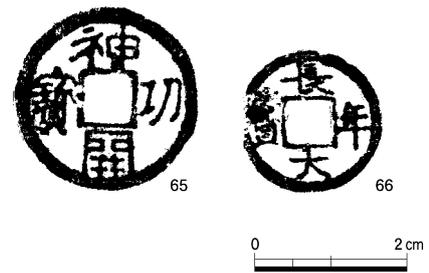


図 49 出土銭貨拓影 (1 : 1)

4. まとめ

調査地は山陰線高架下に沿って西高瀬川から松原通までの総延長約 450 m の南北側道で、平安京右京五条一坊一町から四町の朱雀大路の西側にあたる坊城¹⁰の地に推定されている。

調査の結果、平安時代前期の池・洲浜や、条坊関連の道路路面・側溝、平安時代後期から鎌倉時代の溝、土壌などを検出した。以下、調査の成果を町ごとに要約して概述する。

一町 平安時代の遺構は検出できなかった。調査区全体の地山面下は砂礫層・砂層・シルト層の互層堆積で、平安京造営以前の自然流路とみられる。地山面では室町時代の東西溝と江戸時代後半の南北溝を検出している。いずれも耕作に関連しており、中世後半以降には耕作地化されていたことを示している。

二町 中央部北から南半部で平安時代前期の池・洲浜を検出し、南端部では池の南肩部を確認した。洲浜は汀の西への緩傾斜に小礫が敷き固められていた。洲浜 10 の南では腐植土を伴う池状堆積がみられ、その肩部を五条坊門小路の北築地推定ライン付近で確認したことから、平安時代前期に二町内には洲浜を有する園池が存在していたことが判明した。池は蛇行しながらも主体は西に広がる。南北の規模は洲浜 9 から南の対岸とみられる肩部まで約 83 m である。この池は出土遺物から、平安京造営時に造られ、平安時代中期以前には廃絶したと考えられる。

二町の北を限る平安時代前期の綾小路路面 34 と南側溝 18 を検出した。また路面上では鎌倉時代前半には廃絶したとみられる東西溝 22 を検出し、従来の南側溝 18 から約 6 m 北へ路面の縮小がみられる。現在の道路はさらに北へ約 11 m に位置する。路面の縮小化は平安時代後期から中世に京中の街路が浸食され、宅地の拡大化ないしは耕地化した巷所¹¹とも関連しており、綾小路の変遷を考える上で貴重な資料となる。

南を限る五条坊門小路については、現道路とも重複しており、道路・側溝などの直接関連する遺構については検出できなかった。ただ池状堆積の直上で検出した砂層と瓦片で堅緻に固められた、平安時代後期の整地層 11 と、現道路を挟み南の 3 区北端で確認した整地層 32 が同一の整地層と考えられることから、整地層は五条坊門小路の敷設に関連する可能性が高い。

三町 中央部よりやや北で平安時代前期の洲浜 31 と池 16・29 を検出した。池内からは平安時代前期 (8 世紀末～9 世紀中頃) の土器や瓦、木製品、銭貨がまとまって出土した。また木製品の中には判読できる木簡が 2 点認められた。池 16・29 は共有する肩部が池の張り出し部で、堆

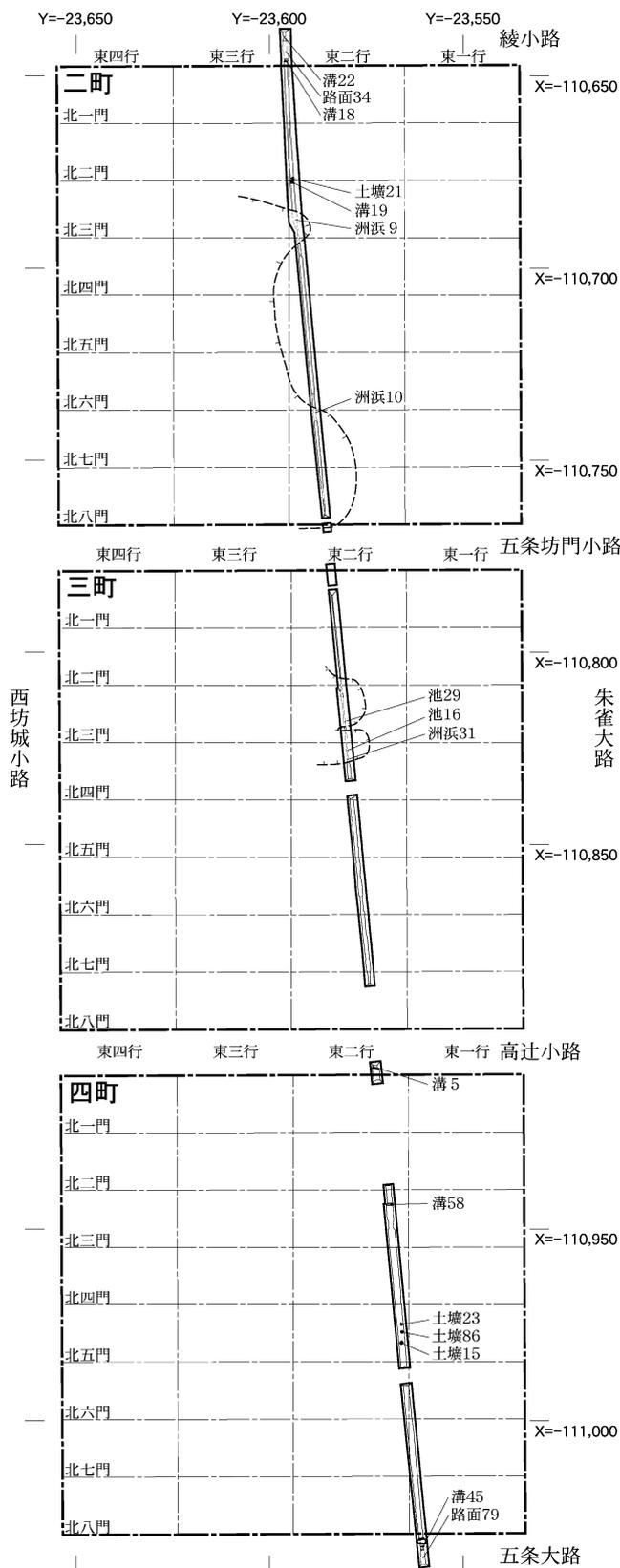


図 50 遺構配置図 (1 : 1,500)

積土や出土遺物からも同一の池と考えられる。南の洲浜から池 29 の北肩部まで南北 23.5 m で、三町内の北半部に位置する。池の南側は中世から近世の土取り穴が点在し、地山の砂泥層が厚く比較的安定しており、邸宅や施設の存在が推測できる。また池から出土した造営事業にかかわった労働者への功銭支給事例を示す木簡の内容と建築部材などの木片類、さらに六町の調査で検出された池状遺構から出土している「細工所飯肆・」と記載の木簡などを考え合わせると、造営事業に関連する細工所などの施設が、近辺に存在したことが考えられるが、池の性格も含めて検討を要する今後の課題である。

四町 北を限る平安時代後期の高辻小路南側溝と同町の南を限る五条大路の路面の一部と、北側溝を検出した。当町内は一町から三町とは状況が異なり平安時代後期から鎌倉時代の遺構が多くを占める。平安時代後期の遺構分布は五条大路以南の六条一坊の調査事例¹²⁾においても、坊内の朱雀大路沿いの東半部は密度が高いことから、平安時代後期以降に朱雀大路沿いが再開発が行われたことが示されており、その契機や政治的背景などが今後の調査課題である。

また、園池については砂礫層・砂層・シルト層の互層堆積による自然流路上で洲浜や池を検出していることから、平安京造営以前の自然流路の一部を利用して形成されたとみられる。池の形状や洲浜の緩勾配、湧水などは、この自然流路と密接に関連している。今後、近辺の調査

で検出した湿地状堆積や池状堆積の分布を見直すことにより¹³⁾、検出した園池の全体像が明確になると考えられる。

また、東西溝 22・溝 18・洲浜 9・池 12・池 16 の洲浜 31 の埋土について自然科学分析を行った。詳細については、付章を参照されたい。平安時代前期の南側溝 18、池 16 の洲浜 31 については樹木花粉が多く、周辺に植栽されていたことを窺わせる。特に鎌倉時代前半に廃絶した東西溝 22 は、回虫卵や鞭虫卵などの寄生虫卵が多く、他と異なった結果を得た。このことは、京内の側溝のあり方を考えるうえで貴重な分析結果となった。

今回の調査は、右京五条一坊一町から四町の東半部を、線状に縦断する調査であった。面的な把握については不十分ながら、縦断面的に得た成果は大きい。今後は池の広がりや形状について、また条坊関連の道路・側溝の調査区外への残存状況など、近隣での発掘調査により面的に捉え、検討課題についての対応が望まれる。

註

- 1) 太田静六「朱雀院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987 年
- 2) 山田邦和「右京全町の概要」『平安京提要』角川書店 1994 年
- 3) 『平安京跡発掘調査報告』山陰線高架化に伴う埋蔵文化財発掘調査団 1976 年
- 4) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年
- 5) 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980 年 瓦拓影図その 8-92 と同文
- 6) 『木器集成図録 近畿古代編』の分類を参考にした。奈良国立文化財研究所 1985 年
- 7) 向林八重「日本古代社会における塩の支給」『続日本紀研究』364 2006 年
- 8) 向林八重「日本古代社会における塩の支給」『続日本紀研究』364 2006 年
- 9) 関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館 1969 年
- 10) 岸俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店 1988 年 氏は「坊城の地とは朱雀大路の両側の左右京各一坊の朱雀大路に沿う半分を指し、それをとりまく築垣を坊城垣、または坊城といったのであろう。」と述べている。
- 11) 秋山國三・中村研「第三章 第一節 巷所の成立と展開」『京都「町」の研究』法政大学出版局 1975 年
- 12) 平尾政幸・山口 真『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2002-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- 13) 鈴木久男「平安京の庭園遺構(低湿地状遺構の再検討)」庭園学会資料 1997 年

V 平安京左京八条一坊一町跡・御土居跡 2

1. 調査経過

調査は JR 山陰線の複線工事に伴う埋蔵文化財の第 5 次立会調査である。2004 年 4 月に南接地で同工事に伴う第 1 次発掘調査（本報告 I 平安京左京八条一坊一町跡・御土居）を実施しており、今回の調査は北側の橋脚部にあたる立会調査である。

調査地は平安京左京八条一坊一町の南半部の西端で、朱雀大路に東面している。近世には豊臣秀吉による御土居が調査地の東隣接地を南北に造成されていたところである。第 1 次調査で御土居の堀西肩の裾部を検出していることから、御土居堀の確認を主眼に行った。

調査は 4 箇所の橋脚部の掘削工事に際して立ち会い、断面土層の観察や写真撮影などの記録作業で対応した。調査地点を北から各橋脚部を A・B・C・D とした。調査の結果、B・C 地点で御土居の堀東肩の裾部を確認した。

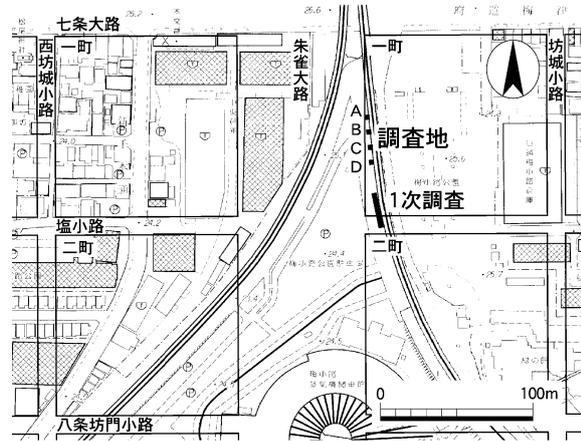


図 51 調査位置図（1：5,000）

2. 遺構・遺物（図 52、図版 16）

基本層序は現代層以下、灰白色砂礫層が現地表下 1.9 m まで、その下には灰色砂礫層が 2.2 m まで堆積し、以下は地山とみられるオリーブ黄色砂層である。砂礫層は東から西に傾斜しており、地山も同様の傾斜を示す。地山であるオリーブ黄色砂層は御土居の裾部に関連するものとみられる。裾部については B・C 地点の北壁断面で確認できた。A・D 地点については現地表下 2.3 m 掘削後、安全確保のため西壁を除き鋼矢板による土留めが行われたため、西壁で堀の堆積層を確認した。

B 地点で現地表下 1.7 m の灰白色砂礫層から江戸時代の肥前産小杯を採取した。

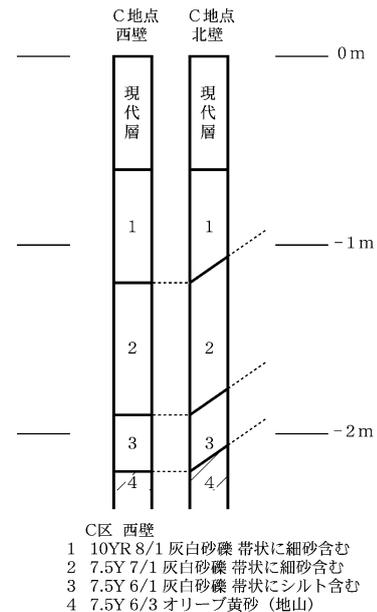


図 52 C 地点 断面模式図（1：40）

3. ま と め

調査の結果、御土居堀の東肩裾部を確認することができた。第1次調査で西肩裾部を検出していることから、堀の規模は東西幅約14 m、深さ約1.8 m以上と推定される。その規模については他の御土居堀の調査事例から矛盾はない。堀は流路状の堆積を示していることから、御土居が廃絶、あるいは機能が消失した後の堀の埋没過程を考える上で今後検討を要する。

註

- 1) 丸川義広「御土居跡の発掘調査とその成果」『日本史研究』420号 1997年

VI 付章 土壌分析について

第4次調査（IV 平安京右京五条一坊一～四町跡）では、平安時代前期の園池、道路・側溝などが検出された。ここでは、これらの遺構の性格および当時の周囲の植生や環境を把握する目的で、1花粉分析、2プラント・オパール分析、3珪藻分析、4種実同定を行った。分析対象は、2B区洲浜9・池12、3A区池16の洲浜31、2A区綾小路南側溝18、路面上の東西溝22である。試料の詳細を表11に示す。

1. 花粉分析

(1) 分析結果（図53・58、表12）

1) 東西溝22

下位の試料6（地山）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科が優勢であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、シイ属、コナラ属コナラ亜属、スギ、クリなどが伴われる。

試料5・試料4（平安）では、イネ科（イネ属型を含む）が優占し、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属、ソバ属、ササゲ属、ベニバナなどが伴われる。樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属、ハンノキ属がやや増加し、シイ属、クリは減少している。また、試料5（平安）では回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵が990個/cm³、試料4（平安）では鞭虫卵、回虫卵が500個/cm³検出された。

表11 土壌分析試料一覧表

地点	試料No.	色・性状	時期	
2A区 東西溝22	1	黒褐色粘土	鎌倉	
	2	黄灰色粘土	鎌倉	
	3	灰色粗砂	鎌倉	
	4	黒褐色粘土	平安	
	5	黒褐色粘土	平安	
	6	暗褐色砂礫	地山	
	南側溝18	1	黒褐色粘土	平安
2B区 洲浜9	1	褐灰色砂泥	近世	
	2	暗灰色粘土	平安	
	3	黒褐色粘土	平安	
	池12	1	褐灰色砂泥	近世
		2	灰黄褐色砂泥	平安
		3	黄褐色粗砂	平安
		4	黒褐色粘土	平安
3A区 池16	1	灰褐色砂泥	中世	
	2	暗褐色泥土	平安	
	3	黒褐色粘土	平安	

試料3～試料1（鎌倉）では、イネ属型の占める割合が増加している。また、試料3（鎌倉）では回虫卵、鞭虫卵が250個/cm³、試料2（鎌倉）では回虫卵、鞭虫卵、広節裂頭条虫卵が590個/cm³、試料1（鎌倉）では鞭虫卵、回虫卵、不明虫卵が580個/cm³検出された。

2) 南側溝18

試料1では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優勢であり、スギ、シイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが伴われる。草本花粉では、イネ科が比較的多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが伴われる。また、鞭虫卵、回虫卵、肝吸虫卵が42個/cm³検出された。

3) 洲浜9

下位の試料3では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科（イネ属型を含む）が比較的多く、ミズアオイ属、ソバ属、ベニバナなどが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科などが認められる。また、回虫卵、鞭虫卵、不明虫卵が48個/cm³検出された。

試料2では、イネ科（イネ属型を含む）が増加し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属は減少している。

試料1（近世）では草本花粉のアブラナ科が高率に出現し、シダ植物胞子のミズワラビなども認められる。

4) 池12

下位の試料4では、樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ同じである。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、シイ属などが伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）が比較的多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。

試料3・試料2では、花粉がほとんど検出されなかった。

試料1（近世）では、草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも極めて高い。草本花粉ではアブラナ科が卓越し、ソバ属、ベニバナなどが伴われる。また、シダ植物胞子のミズワラビが認められる。

5) 池16

下位の試料3では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属―ムクノキが優勢であり、スギ、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科などが伴われる。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科などがわずかに認められる。

試料2では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が増加し、エノキ属―ムクノキは減少している。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科、セリ亜科などがわずかに認められる。

上部の試料1では、花粉密度は低くなり、草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属が優勢であり、イネ科、カヤツリグサ科も増加している。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属などが認められる。

(2) 花粉分析から推定される植生と環境

1) 東西溝22・南側溝18

東西溝22の埋土の堆積当時は、イネ科をはじめアカザ科―ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育する日当たりの良い人里の環境であったと考えられ、周辺ではイネ、ソバ属、ササゲ属、ベニバナなどが栽培されていたと推定される。なお、これらの栽培植物については、食物残渣や排泄物に由来している可能性も考えられる。また、回虫卵や鞭虫卵などの寄生虫卵が比較的多く検出されることから、溝内に糞便が投棄されていた可能性も考えられる。森林植生としては、周辺地域にカシ類（コナラ属アカガシ亜属）をはじめ、シイ属、ナラ類（コナラ属コナラ亜属）、スギ、マツ類、クリなどが多様に分布していたと推定される。

南側溝 18 では、路面東西溝と比較してカシ類やシイ属などの樹木の占める割合が高く、イネ科などの草本類は少なかったと考えられる。これらの樹木については、溝の周辺に植栽されていた可能性も考えられる。

2) 池 12

池の埋土の堆積当時は、カヤツリグサ科、イネ科、ミズアオイ属（ミズアオイ、コナギ）の水生植物が生育していたと考えられ、周辺ではイネ、ソバ属、ベニバナなどが栽培されていたと推定される。これらの栽培植物については、食物残渣や排泄物に由来している可能性も考えられる。森林植生としては、周辺地域にカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、スギ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科などが分布していたと推定される。

3) 池 16

付近では、他の地点と比較してカシ類、ナラ類、エノキ属ームクノキなどの樹木の占める割合が高く、イネ科などの草本類は少なかったと考えられる。これらの樹木については、池の周辺に植栽されていた可能性も考えられる。

近世になると、イネ、ソバ属、ベニバナなどに加えて、アブラナ科が多く栽培されるようになったと考えられる。アブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれている。この時期には、周辺地域の森林植生は大きく減少していたと推定される。

2. プラント・オパール分析

(1) 分析結果（図 54・59、表 13）

1) 東西溝 22・南側溝 18

東西溝 22 の試料 1（鎌倉）～試料 6（地山）および南側溝の試料 1 について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、東西溝 22 の試料 1（鎌倉）では密度が 7,500 個 /g と高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている 5,000 個 /g を上回っている。その他の試料では、密度が 800～4,600 個 /g と比較的低い値である。イネ以外の分類群では、タケ亜科（おもにメダケ節やネザサ節）が多く検出され、部分的にヨシ属も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねタケ亜科が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。また、東西溝 22 の試料 1 ではイネも多くなっている。

2) 池跡

洲浜 9 の試料 1（近世）～試料 3、池 12 の試料 1（近世）～試料 3、池 16 の試料 1～試料 3 について分析を行った。その結果、洲浜 9 と池 12 のすべての試料、および池 16 の試料 2 からイネが検出された。イネの密度は 700～4,500 個 /g と比較的低い値である。イネ以外の分類群では、タケ亜科（おもにメダケ節やネザサ節）が多く検出され、部分的にヨシ属も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねタケ亜科が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

(2) プラント・オパール分析から推定される植物環境

1) 東西溝 22・南側溝 18

溝の埋土の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属などの竹笹類が分布していたと推定される。また、すべての試料でイネが検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。なお、イネについては溝の周辺で利用されていた藁製品（俵、縄、ムシロ、草履など）に由来する可能性も考えられる。

2) 池

池跡の埋土の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺にはメダケ属などの竹笹類が分布していたと推定される。また、ほとんどの試料でイネが検出され、周辺で稲作が行われていた可能性が認められた。なお、イネについては池の周辺で利用されていた藁製品などに由来する可能性も考えられる。

3. 珪藻分析

(1) 分析結果 (図 55・56・60、表 14)

1) 洲浜 9

試料 3 と試料 2 は、珪藻がほとんど検出されなかった。試料 1 (近世) では、貧塩性種 (淡水生種) で流水不定性種、真・好流水性種の占める割合が高い。流水不定性種では、*Amphora copulata* を主に、*Navicula placentula*、*Navicula pupula*、*Gomphonema angustatum*、*Cymbella silesiaca*、*Achnanthes hungarica* などが伴われる。真・好流水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis*、真・好流水性種の *Gomphonema parvulum* が優占し、中～下流性河川環境指標種群の *Navicula viridula* v. *rostellata*、*Achnanthes lanceolata* などが伴われる。真・好止水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Stauroneis phoenicenteron* や、真・好止水性種の *Pinnularia microstauron* などが低率に出現する。陸生珪藻では、*Navicula confervacea*、*Amphora montana* が低率に出現する。また、中塩性種 (汽水生種) の *Nitzschia levidensis* v. *victoriae* がわずかに出現する。

2) 池 16

試料 3 では、真・好止水性種の占める割合が高く、流水不定性種も多い。真・好止水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* が卓越し、*Gomphonema gracile* などが伴われる。流水不定性種では、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema* spp. など、真・好流水性種では *Gomphonema parvulum* が出現する。試料 2 では珪藻密度が減少し、流水不定性種の占める割合が高くなる。流水不定性種では、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema* spp. が減少し、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praerupta*、*Eunotia pectinalis* が優占し、*Navicula reinhardtii*、*Amphora copulata*、*Navicula laevisissima*、*Gomphonema angustatum* が増加する。陸生珪藻では、*Navicula mutica* が増加する。真・好止水性種では、優占していた沼沢湿地付着生環境指標種群の

Eunotia minor や *Gomphonema gracile* が減少する。試料 1 では珪藻がほとんど検出されなかった。

(2) 珪藻分析から推定される堆積環境

洲浜 9 の試料 3 と試料 2 では、珪藻がほとんど検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない比較的乾燥した堆積環境であったこと、水流による淘汰を受けたこと、土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。試料 1 (近世) では、流水域や止水域、水草が生育する湿地、湿潤な陸域などが見られる多様な環境、もしくはこれらを繰り返す不安定な環境が示唆され、水田域もしくはその周辺の環境が反映されている可能性が考えられる。

池 16 の試料 3 では、水草が生育する流水の影響のある池沼の環境が推定される。試料 2 では流水域や止水域、水草が生育する湿地、湿潤な陸域などが見られる多様な環境、もしくはこれらを繰り返す不安定な環境が示唆され、水田域もしくはその周辺の環境が反映されている可能性が考えられる。試料 1 では、珪藻がほとんど検出されなかった。

4. 種実同定

(1) 分析結果 (図 57・61、表 15)

1) 東西溝 22 の最下層

スゲ属 1、カヤツリグサ科 8、コナギ 1、タデ属 2、ヒユ属 1、ナデシコ科 3、タガラシ 9、カタバミ属 1、シソ属 1、タカサブロウ 1、シャジクモ属 26 が検出された。

2) 南側溝 18

ホタルイ属 1、スゲ属 7、カヤツリグサ科 25、コナギ 14、イボクサ 1、タデ属 2、ナデシコ科 28、シャジクモ属 372 が検出された。

3) 池 12 の最下層

種実類は検出されなかった。

(2) 種実同定から推定される植生と環境

東西溝 22 最下層の堆積当時は、沈水植物のシャジクモ属をはじめ、タガラシ、カヤツリグサ科などの水生植物が多く生育していたと考えられ、水草が生育する浅くよどんだ環境が推定される。また、溝の周辺などにはナデシコ科などが生育していたと考えられる。

南側溝 18 の最下層の堆積当時は、沈水植物のシャジクモ属をはじめ、カヤツリグサ科、コナギ、スゲ属などの水生植物が繁茂していたと考えられ、水草が生育するやや深くよどんだ環境が推定される。また、溝の周辺などにはナデシコ科などが生育していたと考えられる。

5. 小 結

今回の自然科学分析により、各遺構について要約して以下に概述しておく。

綾小路路面上で検出した東西溝 22 では寄生虫卵をはじめイネ属型、ササゲ属、ソテツ属、ベニバナなどの花粉と、真・好水性～好流水性種の珪藻も出現し、当時の植生復元を行うには良好なデータを得ることができた。溝の性格については、回虫卵や鞭虫卵などの寄生虫卵が多く、溝内に糞便が投棄されていたとみられる。綾小路南側溝 18 は東西溝 22 より樹木花粉の占める割合が高く、溝周辺に植栽されていたことが伺える。溝 22 とは異なった堆積環境にあり、また珪藻密度も低く、溝の性格は異なる。

洲浜 9・池 12 については上層でアブラナ科が多く、下位に向かい花粉密度が低くなる。3 の黒褐色粘土（腐植土）では池底の堆積様相を示す。池 16 の洲浜 31 については池岸とみられ、洲浜 9・池 12 でみられたアブラナ科はあまり見られず、樹木のコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、シイ属などが多く、池周辺に植栽されていた可能性が高い。近世になると、イネ、ソバ属、ベニバナなどやアブラナ科が多く植栽されるようになり、周辺の森林植生は大きく減少したことが推定される。池にもかかわらず珪藻密度は低く、水深については花粉分析と合わせて考察する必要がある。

表 13 プラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		池												綾小路					
地点・試料		洲浜9			池12				池16			東西溝22						南側溝18	
分類群	学名	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	5	6	1	
イネ	<i>Oryza sativa</i>	30	23	22	45	8	15	7	15			75	23	8	30	45	8	46	
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	15	15	30		30	8	15	7	23	22	15			22	8		23	
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	7		7	8					8		15	8						
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	187	120	135	165	300	90	224	255	369	306	269	241	203	307	293	498	334	

推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出																		
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.88	0.66	0.66	1.32	0.22	0.44	0.22		0.44		2.20	0.66	0.22	0.88	1.33	0.22	1.34
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.94	0.95	1.89		1.89	0.47	0.94	0.47	1.42	1.41	0.94			1.42	0.47		1.44
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.09		0.09	0.09					0.09		0.19	0.09					
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	0.90	0.58	0.65	0.79	1.44	0.43	1.08	1.22	1.77	1.47	1.29	1.16	0.98	1.47	1.41	2.39	1.61

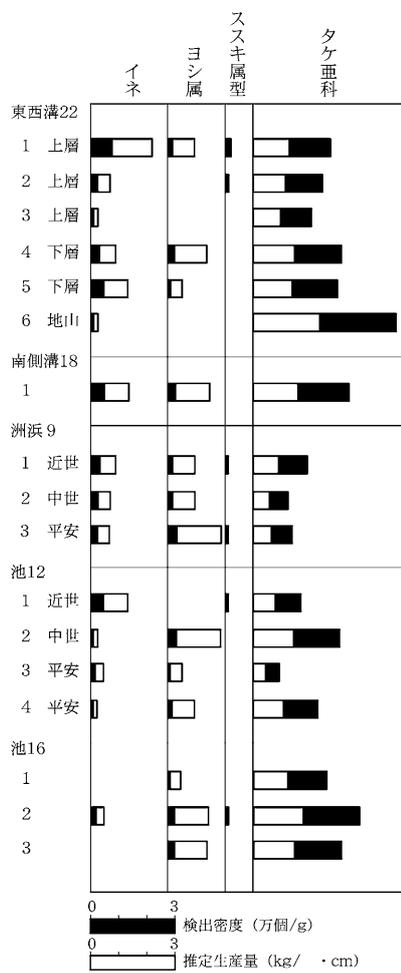


図 54 プラント・オパールダイアグラム

表 14 珪藻分析結果

分類群	池					
	洲浜9			池16		
	1	2	3	1	2	3
貧塩性種 (淡水生種)						
<i>Achnanthes hungarica</i>	8					
<i>Achnanthes inflata</i>					4	1
<i>Achnanthes lanceolata</i>	6					
<i>Actinella brasiliensis</i>						5
<i>Amphora copulata</i>	71				17	4
<i>Amphora montana</i>	3					
<i>Aulacoseira spp.</i>					7	1
<i>Caloneis bacillum</i>	3					
<i>Caloneis spp.</i>					2	
<i>Cocconeis placentula</i>	1				1	3
<i>Cymbella cuspidata</i>					2	
<i>Cymbella naviculiformis</i>	6					1
<i>Cymbella silesiaca</i>	10					2
<i>Cymbella sinuata</i>						1
<i>Cymbella tumida</i>	4					
<i>Cymbella turgidula</i>	1					1
<i>Diatomella spp.</i>						4
<i>Diploneis spp.</i>					2	
<i>Eunotia exigua</i>				1	8	
<i>Eunotia minor</i>					23	106
<i>Eunotia parallela</i>				1		2
<i>Eunotia pectinalis</i>				1	14	2
<i>Eunotia praeurpta</i>				1	38	6
<i>Eunotia sp.1</i>						3
<i>Eunotia spp.</i>						7
<i>Fragilaria capucina</i>	1					
<i>Gomphonema acuminatum</i>					4	6
<i>Gomphonema angustatum</i>	14				9	
<i>Gomphonema angustum</i>						4
<i>Gomphonema augur v. turris</i>						4
<i>Gomphonema clevei</i>					1	1
<i>Gomphonema gracile</i>	2	1			7	27
<i>Gomphonema minutum</i>					1	33
<i>Gomphonema parvulum</i>	36				18	13
<i>Gomphonema sphaerophorum</i>						1
<i>Gomphonema sp.1</i>						4
<i>Gomphonema spp.</i>	2				7	17
<i>Gomphonema truncatum</i>						1
<i>Gyrosigma spp.</i>	2					
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1				6	4
<i>Meridion circulare v. constrictum</i>						1
<i>Navicula americana</i>					2	1
<i>Navicula capitata</i>	2					
<i>Navicula confervacea</i>	21				1	6
<i>Navicula contenta</i>					3	
<i>Navicula cryptotenella</i>	2					
<i>Navicula cuspidata</i>	1					
<i>Navicula elginensis</i>	46				4	2
<i>Navicula kotschyi</i>	5					
<i>Navicula laevissima</i>	3				14	
<i>Navicula mutica</i>	2				28	3
<i>Navicula placentula</i>	19					
<i>Navicula pupula</i>	17					3
<i>Navicula reinhardtii</i>					37	
<i>Navicula spp.</i>	5					3
<i>Navicula viridula v. rostellata</i>	8					
<i>Neidium ampliatum</i>	1					2
<i>Neidium bisulcatum</i>					1	
<i>Nitzschia angustata</i>	1					
<i>Nitzschia debilis</i>	1					
<i>Nitzschia frustulum</i>	1					
<i>Nitzschia spp.</i>	1					
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	3				4	
<i>Pinnularia brevicostata</i>					3	
<i>Pinnularia episcopalis</i>					2	
<i>Pinnularia gibba</i>	4				6	6
<i>Pinnularia microstauron</i>	9					2
<i>Pinnularia nodosa</i>					9	2
<i>Pinnularia spp.</i>	3					2
<i>Pinnularia subcapitata</i>					1	1
<i>Pinnularia viridis</i>	6				3	1
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>					1	2
<i>Stauroneis acuta</i>					1	
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>	1				3	
<i>Stauroneis nobilis</i>					1	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	12				6	3
<i>Surirella ovata</i>	3					1
<i>Synedra ulna</i>	3				1	2
中塩性種 (汽水生種)						
<i>Achnanthes brevipes</i>					2	1
<i>Nitzschia levidensis v. victoriae</i>	3					
合計	354	1	0	4	304	308
未同定	14	0	0	0	8	7
破片	131	4	2	37	287	110
試料 1 cm ² 中の殻数密度	5.4	4.0	0.0	8.0	2.4	9.6
	$\times 10^5$	$\times 10^5$		$\times 10^5$	$\times 10^5$	$\times 10^5$
完形殻保存率 (%)	73.7	-	-	-	52.1	74.1

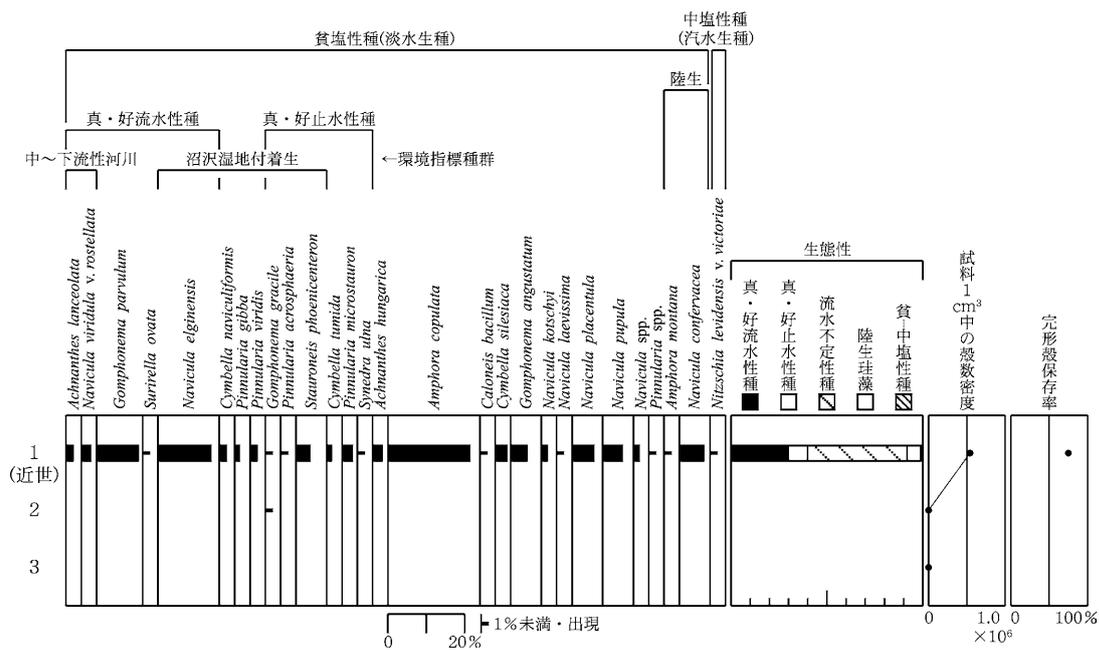


図 55 2B 区洲浜 9 における主要珪藻ダイアグラム

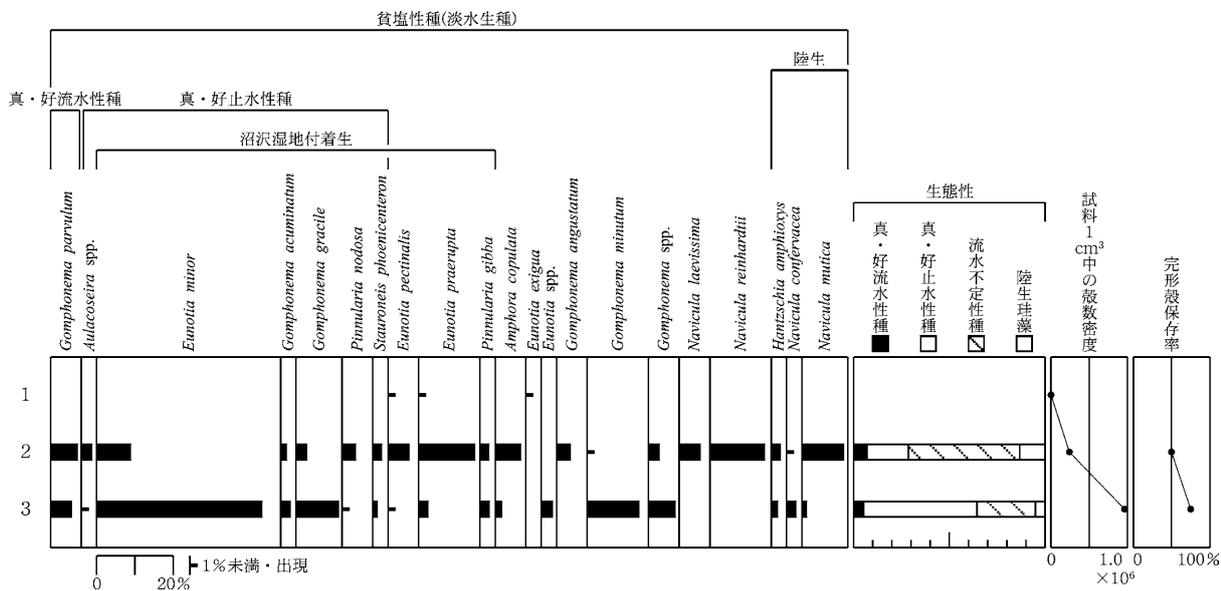


図 56 3A 区池 16 における主要珪藻ダイアグラム

表 15 種実同定結果

分類群		部位	綾小路 東西溝22	綾小路 南側溝18	池12
学名	和名		最下層		
Herb		草本			
<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実		1	
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	1	7	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	8	25	
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl	コナギ	種子	1	14	
var. <i>plantaginea</i> Solms Laub.					
<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子		1	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	2	2	
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	3	28	
<i>Ranunculus scleratus</i> L.	タガラシ	果実	9		
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1		
<i>Perilla</i>	シソ属	果実	1		
<i>Eclipta prostrata</i> L.	タカサブロウ	果実	1		
<i>Chara</i>	シャジクモ属	卵胞子	26	372	
Total		合計	54	450	0

(200cm³中0.25mm篩)

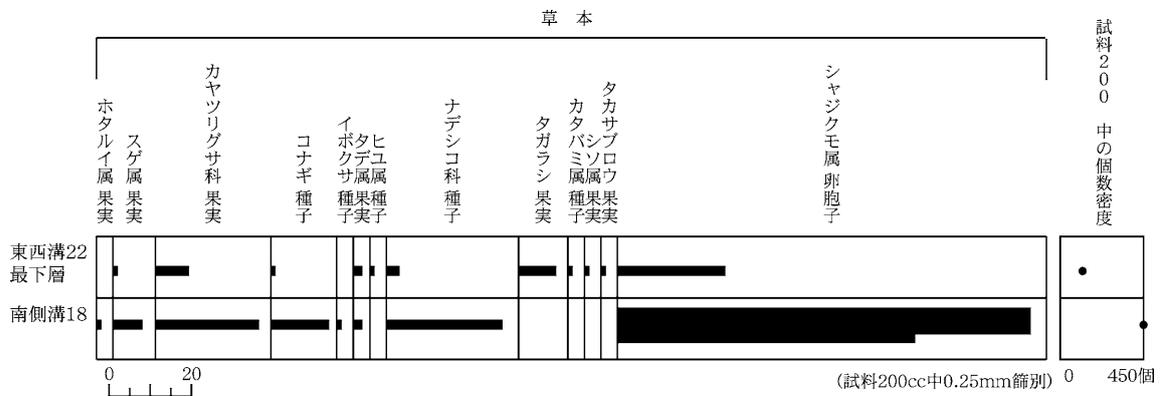
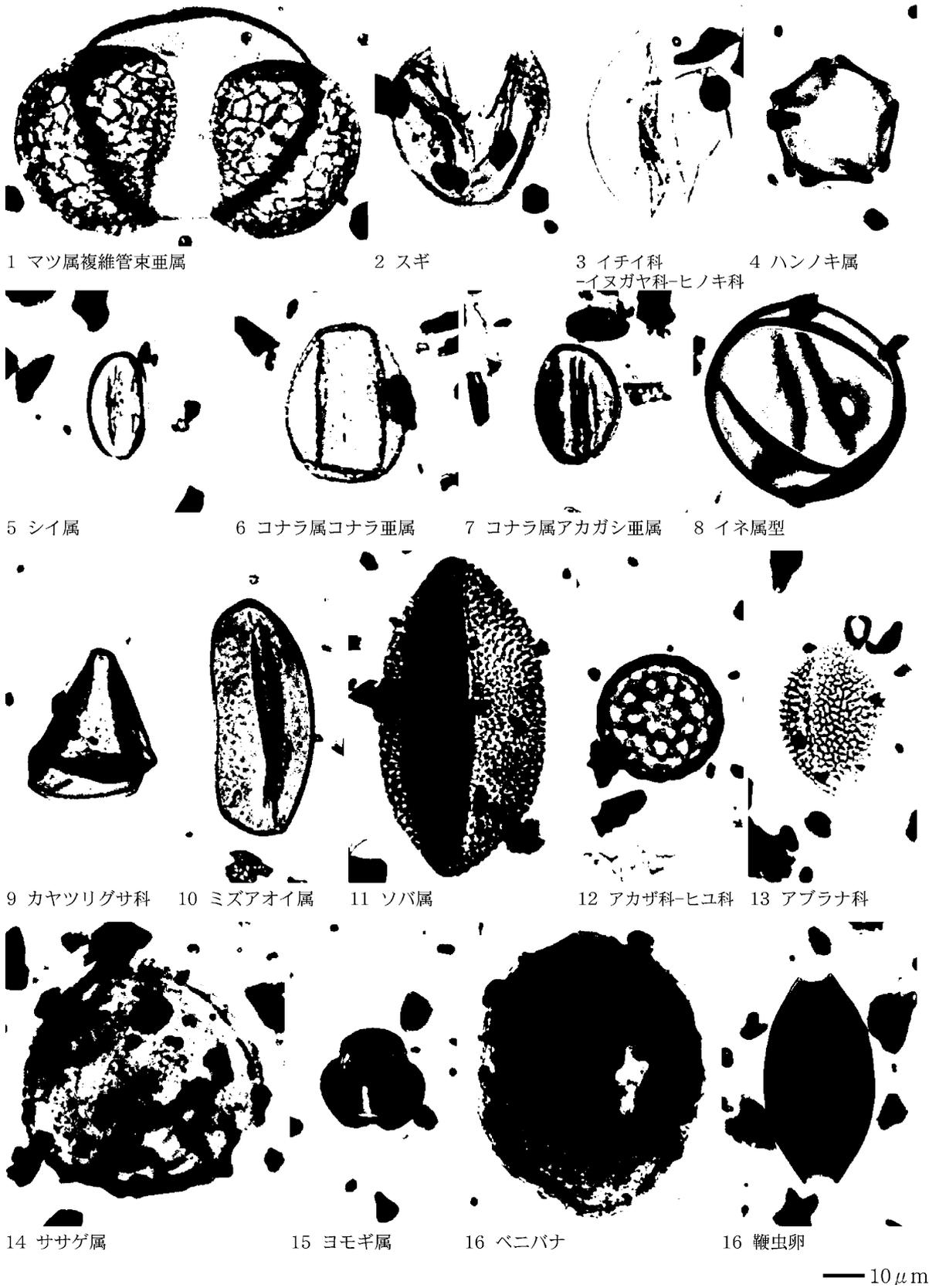


図 57 種実ダイアグラム



1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 イチイ科
-イヌガヤ科-ヒノキ科

4 ハンノキ属

5 シイ属

6 コナラ属コナラ亜属

7 コナラ属アカガシ亜属

8 イネ属型

9 カヤツリグサ科

10 ミズアオイ属

11 ソバ属

12 アカザ科-ヒユ科

13 アブラナ科

14 ササゲ属

15 ヨモギ属

16 ベニバナ

16 鞭虫卵

—10 μ m

図 58 花粉・寄生虫



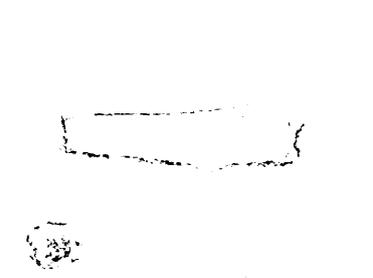
イネ



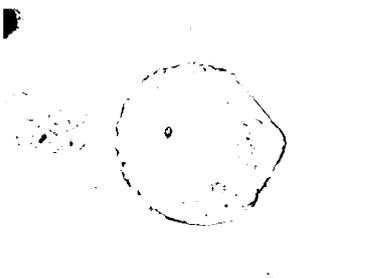
イネ



イネ (側面)



キビ族型



ヨシ属



ヨシ属



ススキ属型



シバ属



メダケ節型



メダケ節型



ネザサ節型



ネザサ節型



チマキザサ節型



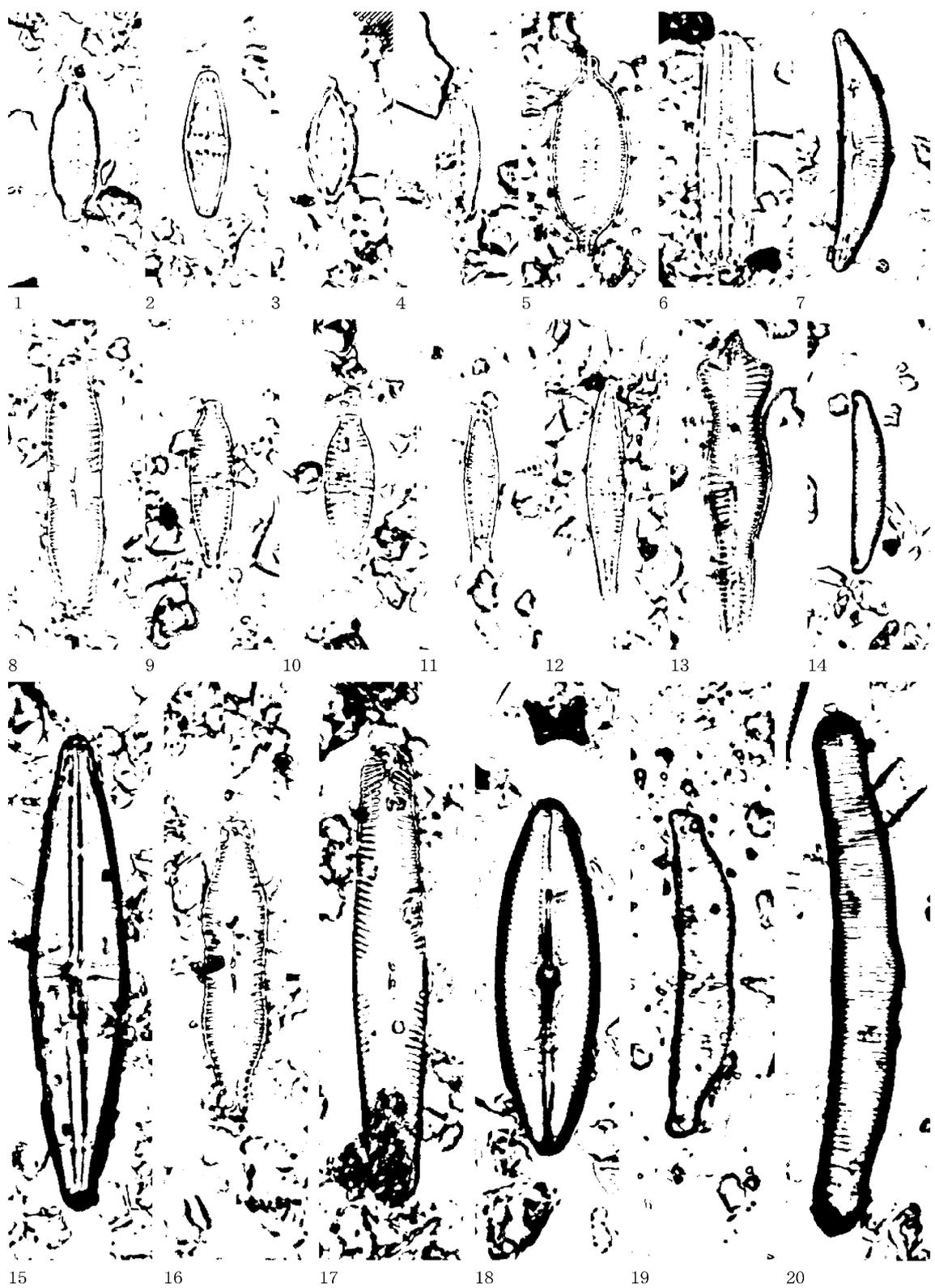
ミヤコザサ節型



海綿骨針

50 μm

図 59 植物珪酸体 (プラント・オパール)



1. *Navicula elginensis* 2. *Navicula mutica* 3. *Navicula confervacea* 4. *Navicula pupula*
 5. *Navicula placentula* 6. *Navicula laevisissima* 7. *Amphora copulata* 8. *Pinnularia microstauron*
 9. *Gomphonema parvulum* 10. *Gomphonema angustatum* 11. *Gomphonema minutum* 12. *Gomphonema gracile*
 13. *Gomphonema acuminatum* 14. *Eunotia minor* 15. *Stauroneis phoenicenteron* 16. *Pinnularia nodosa*
 17. *Pinnularia gibba* 18. *Navicula reinhardtii* 19. *Eunotia praeupta* 20. *Eunotia pectinalis*

10 μm

图 60 珩藻

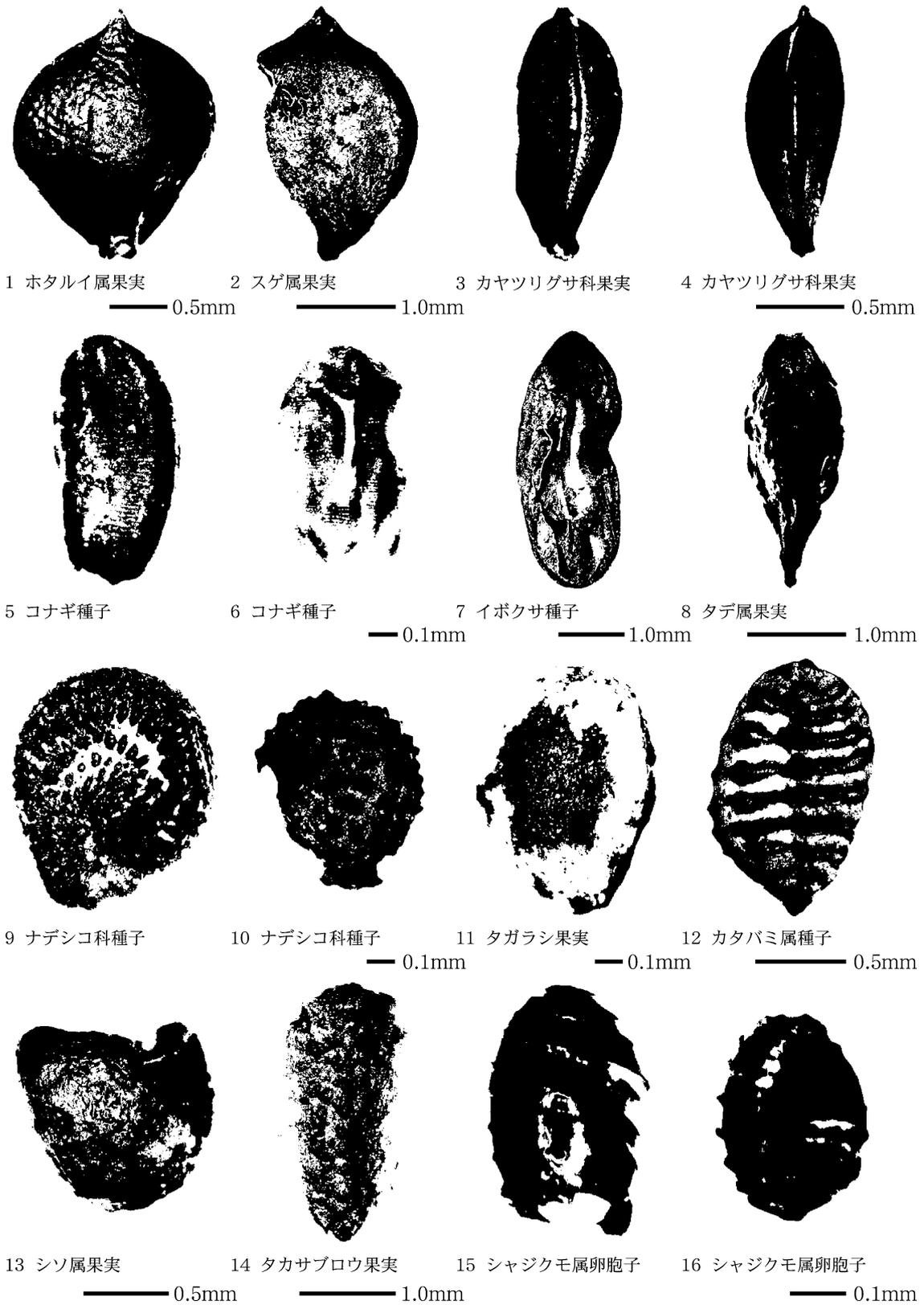


図 61 種実

版 图

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうあと・おどいあと							
書名	平安京跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-18							
編著者名	津々池惣一・加納敬二・東洋一・田中利律子・吉村正親							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東元入伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょうほちじょう 平安京左京八条 いちぼういちちょうあと・ 一坊一町跡・ おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 かんきじちょう 観喜寺町	26100		34度 59分 05秒	135度 44分 46秒	2004年4月 20日～2004 年5月31日	約76㎡	JR山陰線 複線工事
へいあんきょうきょうしじょう 平安京右京四条 いちぼうよんちょうあと 一坊四町跡 (すじゃくいん)あと (朱雀院)跡	きょうとしなかがょうく 京都市中京区 みぶはないちょう 壬生花井町	26100		35度 00分 04秒	135度 44分 40秒	2004年10月 13日～2004 年12月17日	約272㎡	
へいあんきょうきょうろくじょう 平安京右京六条 いちぼういち・にちょうあと 一坊一・二町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ちゅうどうじきたまち 中堂寺北町	26100		34度 59分 41秒	135度 44分 41秒	2005年11月 10日～2005 年12月26日	約324㎡	
へいあんきょうきょうごじょう 平安京右京五条 いちぼういち～よんちょうあと 一坊一～四町跡	きょうとしなかがょうく 京都市中京区 みぶたかひちょう・ 壬生高樋町・ まつばらちょう 松原町	26100		35度 00分 03秒	135度 44分 30秒	2006年8月 21日～2006 年12月22日	約1,028㎡	
へいあんきょうさきょうほちじょう 平安京左京八条 いちぼういちちょうあと・ 一坊一町跡・ おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 かんきじちょう 観喜寺町	26100				2006年9月 25日～2006 年9月29日	総延長距離 約40m 立会調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京八条 一坊一町跡 御土居跡	都城跡 土塁跡	江戸時代 ～明治時代	堀	陶器、白磁、染付				
平安京右京四条 一坊四町 (朱雀院)跡	都城跡	江戸時代前期 以前	土壇、柱穴、溝	磁器、陶器、土師器		縄文土器が出土した。		
平安京右京六条 一坊一・二町跡	都城跡	鎌倉時代 ～室町時代	土壇	土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶器、瓦質土器				
平安京右京五条 一坊一～四町跡	都城跡	平安時代	洲浜、池状堆積、路面、側溝、土壇、整地層	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、輸入陶器、軒瓦、銭貨、木製品		平安時代前期の綾小路路面・南側溝、池を検出。池から木簡出土。		
平安京左京八条 一坊一町跡 御土居跡	都城跡 土塁跡							

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18

平安京跡・御土居跡

発行日 2007年2月28日

編集
発行
住所 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961